



あなたの未来たちへ

日本文化「自然の構造」

日本文化の総体 その思想とは

The Japan Code

Principle & Origin of Japanese culture

( 抜粋版 本編 日英文 約400ページ )



イメージ画像

日本文化構造学 研究会主宰

日本学・京都教授研究「知恵の会」

京都新聞出版 京都検定解説・校閲

京都府商工会議所認定 協力事業

<https://nakamuranina.jimdo.com/>

[kyotodotcompro@gmail.com](mailto:kyotodotcompro@gmail.com)

中村 正司

# 目次

はじめに 日本文化構造学 のすゝめ … 3 (ページ)

日本文化 「自然の構造」 ……11 構造学の主旨と目的

先達諸先生文化論との適合と総合 …… 24 日本文化構造論 の 証明

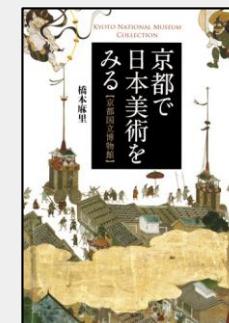
本論 抜粋 『古事記』より …… 43 構造学による 日本文化の原理 構築過程 事例

本論 抜粋 『総論』 …… 60 日本文化の原理 検証 と 応用

本論 抜粋 『現代への活用』 …… 91 日本文化の原理 活用 仏教 と 儒教

英語版 本論要旨 抜粋 別途 参考掲載

## The Japan code Principle & Origin of Japanese culture



推奨図書 事例  
本論と併せ、日本美術 ご参照



### 本論 主たる上呈先 (ご教授・交流 / 活用 御礼)

京都 歴史的 著名社寺 宮司・住職  
京都大学など 名誉教授方々  
上田正昭 先生 村井康彦 先生 他

京都 高麗美術館 館長・常務理事  
龍谷ミュージアム 館長  
京都国立博物館 列品管理室長  
京都市歴史資料館 井上館長  
国際日本文化研究センター 小松所長  
佛教大学 田中学長  
NHK京都 編集デスク  
京都市文化財保護部門  
京都府商工会議所  
京都府立図書館 他

国際交流関連  
京都市国際交流協会  
韓国文化院 朴院長  
外資系ホテルコンシェルジュ世界組織  
ル・クレドールジャパン 名誉会員  
通訳案内士・日本文化専門 翻訳者 他

**日本文化とはなにか？** その総体をとらえた構造について、以下の章立てにて 解説する。  
日本文化の健全なる総合的理解、並びに **読書 啓発・図書館の利用促進** を 目的とする。

ご理解は、読者や編集方々のそれぞれの予備知識に負うところが多いため、引用する著書の要点・主旨を 付属した。  
全編 約400ページ 上呈・講座に応じて編集可能なモジュールページ構成で、本資料はその抜粋版のため、多少、展開は早い。  
文章配列・文字ポイントなどは、制作時期などによって異なる。 今回の案としては、ご酌量 容赦いただきたく  
仏教や儒教そのものの教義は概要だけを紹介した。(今回掲載していない部分：考古と古代史、各時代の文化思想的解説)  
また、文章は、文字数低減のため「文末:である」もしくは「体言止め」としたが、一般読者への出版時に修正予定。

“はじめに” で、この著書にまとめた 構造学による成果の 目的、重要さを紹介する。

“第一章 日本文化「自然の構造」” で、まず、**結論** となる 構造を示す。  
そして、日本文化を象徴する言葉を、具体的に 漆芸修復の文化的意義 から抽出し、構造化の事例とする。  
そのうえで、日本語・古事記・神仏習合などで、少し深く紹介する。

“第二章 先達諸先生文化論との適合と総合”では、日本文化に造詣のある読者、聴講者のため  
鈴木大拙先生以下の諸先生方々見識との適合、それらを総合的に理解できる構造として紹介する。

“第三章 本論抜粋『古事記』より”では、日本文化の原理構築に至る過程を事例として紹介し、  
同時に、『古事記』そのものが、そのあとの日本文化の精神性を内在していることを示す。

第四章、第五章では、歴史に沿って信仰、仏教、儒教、政治体制、文学、時代の気風について概観する。  
最後に、現代的な課題認識へも有効であることを呈示する。

以上、構造学によって原理を活用、応用することで、日本文化の総合的理解が可能なることを 解説する。

あなたへ、質問させてください

日本語の文字 といえば、主に漢字とひらかな、カタカナですね  
毎日、読み書きしているの、あまりにも日常的な話と思われるでしょう  
でも、日本語の文字たち3種類には、「日本文化のこころ」の 構造 が 秘められていると、言われたら どうでしょうか？  
特に「ひらかな」は、その 構造 の 中心 です。  
しかも「日本人のこころ」が 創りだしてきた歴史 や 信仰、文化も、日本語の3種類の文字と同じ 構造をもっています。

おそらく、そんなこと 考えたこともない と、答える人が、ほとんどでしょう。  
実は、私たちも、日本文化について、様々なことを考える前は、そうでした。

例えば、和食の代表である お寿司にも、日本語と同じかたち(構造)をした「日本文化のこころ」があるといったら どうでしょう

日本語の「ひらかな」にあたるものは、寿司では「酢」です。

ここで、どんな意味か わかった あなた  
その答えが、『古事記』に書かれた日本神話の神々とも 共通する、日本古来の文化だと気づいたら、もう、これ以上読まなくても 結構です。 失礼しました。  
なんのことか まったくわからない あなた  
心配はいりません、不思議でしょう 少し、興味がわいてきましたか？

この本には、その答えがあります。  
古典文学が好きな あなたには、日本神話や源氏物語 などについて  
アマテラス以前の 大切な神々の構成と、もののあわれは共通します  
神社やお寺が好きな あなた には、いわゆる 神道、仏教 について  
古事記の神々と 京都などの神社、聖徳太子 から 親鸞 まで  
歴史のことなら、なんでも好きという あなたには、考古 や 古代史、天皇と武家、幕末 について  
出雲や大和・伊勢、縄文から現代へ

伝統工芸、日本画、わびさび、義理と人情 などにも、  
日本語や寿司と 同じ構造をした「日本文化のこころ」があります。

つまり、この日本文化、日本人のこころ の かたち(構造)がわかれば、色々な「日本」が、  
全体として、あなたに 見えてきます。

いまでも、日本の文化、信仰や宗教は、よくわからないとおもわれがちです。 なぜでしょうか？  
それは、今、紹介した日本語の文字、文学、神道や仏教、歴史を、ばらばらに考えるからです。

この本は、初めて、それらのことについて、全体を、わかりやすく、構造的に説明します。  
あなたが、明日からも日本人なら、是非、お読みください きっと、役に立ちます。  
なぜなら、**これからの日本、日本人にとって、その「こころのかたち(構造)」が、大切** だからです。  
日本人のままだけれど、海外で活躍しようという あなたは、必ず読んでください  
日本について、なにかと聞かれるかもしれませんよ

日本文化とはなにか？ もし、あなたが、そう問われたらどのように答えるのでしょうか？

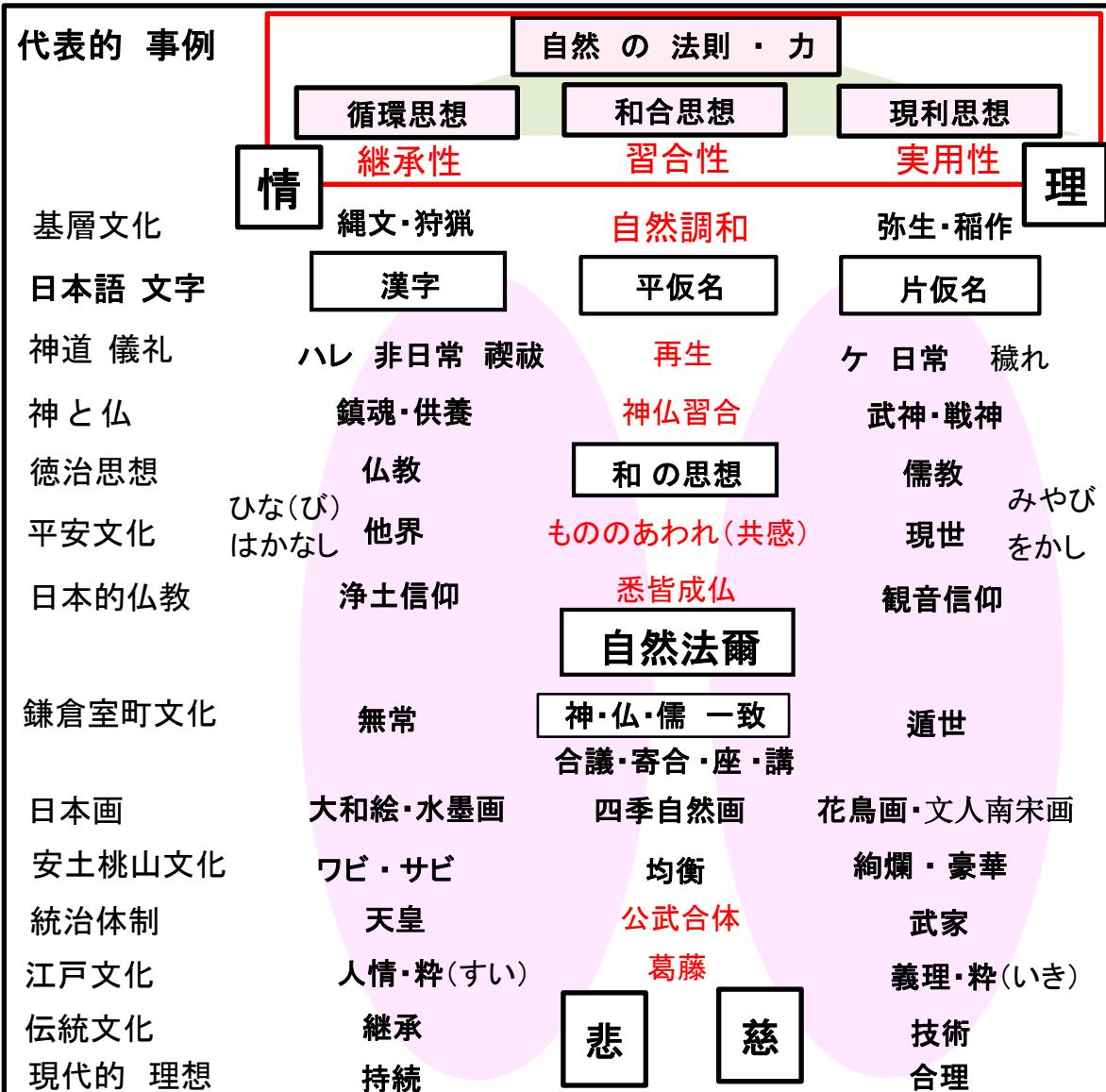
「日本のこころ」 その構造 について

代表事例 **日本語**の文字システム  
漢字の「継承」・片仮名の「実用」・文章をまとめる平仮名の「調和」で構成される。  
「思想」と、堅い表現となっているが、以下のような「こころ」のことである。

「循環思想」 守り伝えるこころ  
魂への思い、継承価値 天皇尊厳 時間軸「無常」  
非日常・非合理であり、他界性を内在し **情緒的** な傾向を持つ

「現利思想」 今を大切にすこころ  
技能・技を極めるこころ 政治的には徳治 場所・上下軸「今」  
日常・合理であり、現世性を内在し **理論的** な傾向を持つ

「和合思想」 上記2軸の「間」で、和合、均衡、葛藤 ゆらぐこころ  
「国譲 神々和合」「神仏習合」「公武習合」「武家と禅・茶道」  
「義理と人情」「粋」「いき」「花鳥画と水墨画」  
「赤楽茶碗と黒楽茶碗」などの間のこころ



## はじめに 日本文化構造学のすゝめ

**日本文化とはなにか？** もし、あなたが、そう問われたらどのように答えるでしょうか？断片的ではなく、それらを総合的に説明できるでしょうか？

その説明は、まず基本的なこと、例えば「日本語の文字 漢字と平仮名、片仮名」について、その三種となって今日まで存在する 心情的、少し硬く言えば 思想的理由でなくてはなりません。

なおかつ日本人の 自然観と自然(じねん)思考や、日本神話の構造、出雲と大和、熊野と伊勢、仏教の受容と神仏習合、天皇と武家、浄土信仰と観音信仰、わびとさびは もちろん、日本人のモノへのこころ、伝統工芸や、建築や美術のあり方、儒教と江戸幕府・幕末思想などについて、日本語の文字システムと関連づけた、**統一的な理論** で説明できなくてはなりません。まず、考えてみてください。 なにか キーワード が見つかるかもしれません。

この **プロジェクトの目的** は、その理解を通じて、健全なる日本、日本文化を自覚し、国際・民際として、国内外へ伝えることです。

特に近年の、日本に対する海外からの注目は、ここに提示する我が国文化になにかを感じるものが多くなっている所以です。単なる観光だけで興隆しているわけではありません。文化的、精神的関心が、その根幹にあります。しかしながら感銘されること、またその感覚は明瞭ではなく、断片的な場合がほとんどです。その結果、極端に言えば、間違った認識を持たれる損失、危険さえあります。日本人自身が自覚できていない状態では、当然の結果です。つまり、我々自身が解き明かし説明する必要があるわけです。これは、誰かに任すことではありません。以上の事情が、本論構成の背景にあります。

その **日本文化総体の解明** のため、縄文時代～近代まで、考古学、記紀・文学、神への信仰、仏教・儒教を通観し、著名な先達諸先生方々と交流、教授研究会での成果を総括しました。国史など正統で膨大な情報をもとに『**日本文化構造学**』(以下『構造学』)によって初めて「日本文化の原理」を創生しました。従来、日本の歴史文化について、個別のことについての解説は多くあります。あるいは全体であっても時系列にのみ列記しているものもあります。しかし、本論は、今までどこにもない、発想しえなかった **普遍的 総合理論** です。以下に掲載する抜粋だけでも、その違いをご理解いただけると考えます。僭越ながら、いままで存在しなかった一因は、学問の局部化であり、考える 視野と動機 です。本論を機会に、さらに的確な 総合理論に期待しております。

しかし、その理論の構築のために理解すべきことは、広範囲な分野に及びます。例えば、日本文化や歴史に大きく影響した神への信仰について そもそも、我が国において、神とはなにか？『古事記』で、初めに成りませる神は「隠身」(かみ)と書かれています。実はこのことが始まりであり、また結論でもあります。そして、現代において重要な意味を持ちます。 どのような神が、なぜそこに祀られているのか？ 神社の祀神や場所と 歴史との関係は？ 体系化は可能か？ など確認すべきことは、順々に拡大していきます。さらに、この分野では考古学との整合も不可欠となります。仏教と儒教について 今のインドにあたる地域の原始信仰と 釈迦の教え(原始仏教)との関係は？ その仏教は元来、どういうもので、中国から日本でどのように変化したのか？ 我が国古来の神信仰との関係はどうだったのか？ 特に真言宗や天台宗はどういう内容で、なぜ定着したのか？なぜ天台宗から多くの宗派が誕生したのか？ 中国古代思想と孔子の儒教とはどういった関係か？ その儒教は中国でどう変化し、日本でどのように取捨選択されたのか？ 神への信仰、仏教、さらに治世との関係は？ そして、祭や芸能、社寺などの建築、日本画・伝統工芸品、文学への影響、さらに葬送儀礼、埋葬方法(土葬と火葬)や 墓・仏壇 との関係は？ つまり、これらは他人事ではなく、すべて 今日の日 本 に 関係しています。もちろん、正月行事、夏越祓と大祓、彼岸やお盆、供養 にも関係します。

**重要なこと**は、その変化・取捨選択した理由、因果の認識です。そこに「日本人のこころ」を、客観的に理解し、体系化 できる ヒント があります。

日本人の持つ他界観、モノへの愛着、銅鐸と鏡、穢れと祓、日本語の文字、天皇、鎮魂・供養、神仏習合、もののあわれ、無常、草木国土悉皆成仏、日本的な禅、わび・さび、義理と人情、浮世や意気、祭と芸能、建築や日本画、和歌、さらに言えば、桜を愛でるこころ、寿司などが、なぜ発祥あるいは関係し、どう変遷し、なぜ定着したのか？ その理由を、体系的に 説明できるものが、本構造論です。

おおよそ日本文化、日本らしいとして語られている著書の要点・語彙を網羅し、なおかつそれらを因果関係で繋ぎ、全容を構造としてとらえたものです。したがって当方も拝読を 薦めている個別の 著書を読まれる時、そこに書かれていない事柄との関係が分かり、さらに **読書意欲** を惹起するものとなります。

聖徳太子、役小角、道昭、義淵、行基、最澄、空海、良源、円仁、円珍、安然、空也、法然、親鸞、栄西、道元、一遍から林羅山、石田梅岩、吉田松陰へ ご縁いただいた上田正昭先生や村井康彦先生、そして、鈴木大拙、折口信夫、和辻哲郎、中村元、家永三郎、石田一良、林屋辰三郎、樋口隆康、司馬遼太郎、梅原猛、森浩一、中西進先生方々や、研究機関の論を 確認。 その中には、個別面談 で 特別にご教授いただき、反映した内容もあります。京都大学など名誉教授や、教授研究「知恵の会」での意見交換、社寺の住職・宮司、キーンダナルド先生、西尾幹二先生、上野誠先生、京都所在の大学学長方々 への上呈、京都府市、NHK、新聞社、出版社社長、芸術工芸師・茶道家・書家・華道家の 方々と交流し、広くご意見を拝聴しております。

この構造論は、特定の分野、時代だけに特定した研究者からは、とらえにくい世界です。したがって、広範囲な視野を備える研究者でない限り、初めて聞く、見る内容であるため、すぐさま理解できる人は稀です。しかし、その視点で研究されてきた著名な見識者からは、評価いただき書簡まで頂戴しました。実際、市民文化講座で実感しておりますが、理解する意欲のある方々からは、日本の歴史文化信仰の広範囲な部分が、**因果関係**によって繋がり、理解できることが増えたと、ご感想をいただきました。また根拠ある正統なご意見は尊重し、さらに検証分野を拡大して、論に矛盾なきことを確認しております。上呈先や発表課題に応じて各論を制作する場合も、本構造を骨子としているため論旨狭窄することなく、分野・対象で詳細に派生させております。

本内容は、名誉教授研究会では主に文献考証によって論証、社寺では神道仏教論から日本文化論へ、市民文化講座では聴講者に応じて、身近な話題から好奇心を刺激、相手を考慮し伝え方など試行しております。興味される文化見識者へは分野・要望に対応し「デマンドカスタム出版」にてご提供しております。それを可能にしている理由は、日本文化のどの分野にでも通用、活用できる内容であり、また各ページで項目別に完結する「モジュール構成」だからです。そこには、国史・文献の文系スキルと全国初法人ITの理系スキルの相乗効果もあります。全体的視野から組織的に課題認識し各市場を革新してきました。構造論の基本部分と、そのように個別分野に応用してきたものを総括し、研究機関共同プロジェクトとして日英文で出版予定です(全編約400ページ)。

**最も重要なこと**は「日本文化、日本のこころ」への理解を通じて本質的な価値観を持ち、大切な存在に気づくこと、そして継承のために行動することです。

学問として研究するだけでは出逢える人、体験できる範囲は限定されます。歴史は生かすため生きるための学問であり、そのことを伝えるための出版です。

2017年は大政奉還の、また2018年は明治維新の150周年記念の年です。高まりつつある 歴史や文化への関心 と 相乗し、良き機会となるでしょう。

『構造学』による歴史・文化の理解は「京都検定」の学習者にとっても、特に「京都検定」合格者にとっても、日本文化の総合的理解に有効です。なぜなら、京都検定の出題分野にとって「基礎となる歴史文化信仰」だからです。因果の認識 によって、我々の理解は深まります。「京都検定」の学習は、京都の基礎的な知識、情報にあたりますが、『構造学』は、その知識だけではなく、背景にある歴史や信仰、因果関係を理解することです。このサイトの「京都新発見」では、さらに専門的な内容について、京都大学ご出身の名誉教授方々との研究発表を掲載しております。

現在、「京都検定」学習啓蒙の趣旨も含め、以下の通り、全集として出版準備を進めておりますが、今回、京都府商工会議所が薦める京都検定事業協力者として、全体の「概要」や 各歴史・分野ごとの主旨をPDFファイルにて <https://nakamuranina.jimdo.com/> に掲載致します。ダウンロードにてご覧ください。

## 一般の方々向け 導入部分 事例

京都の歴史、信仰は山々から始まりました。北白川や上賀茂など山麓の縄文遺跡や、その**上賀茂神社**の神山、**松尾大社**の大杉谷、**伏見稻荷大社**の稲荷山など、山や磐座(巨石)への信仰があります。今日、**神道**と呼ばれる信仰は、京都では、そのように起源します。ではその神社や神道とは何でしょうか？

その山々へ、やがて僧侶たちが入り**観音菩薩**を主に祀って修行しました。**愛宕山**など京都市内の周りの山々では、奈良時代創建の由緒ある寺院が長い歴史を伝えています。では、なぜ彼らは観音菩薩を祀ったのでしょうか？西国三十三か所霊場や京都市中の観音菩薩は、平安時代から今日まで、多くの人々の信仰を集めています。では、その観音菩薩とはなんのでしょうか？観音菩薩のもととなる仏教とはなんのでしょうか？このような疑問、興味を持たれる方々が、近年、増えてきました。

『京都学』は、身近な事柄だけでも、知らなかった、分からなかった歴史を楽しく学ぶことです。それら疑問の解決は、日本文化の理解にも役立ちます。『京都学』では、もちろん、基本的な京都の歴史について解説しますが、その中にも、あなたの知らない京都がまだまだあるはずです。

さきほどの神道や仏教は、普段、なじみのない世界かもしれません。しかし、簡単な部分だけでもわかると、神社やお寺に参拝されるとき、そこに祀られる神様や仏様など様々なことについて、より感慨深く、味わうことができます。例えば、松尾大社には大山咋神(おおやまくいのかみ)と市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)が祀られています。事例として、その大山咋神について簡単にご紹介します。

大山咋神は『古事記』の大国主神の話の中で、「またの名を山末之大主神、この神は近淡海国の日枝の山に坐し、また葛野の松尾に坐して、鳴鏑(なりかぶら)を用つ神」と記されています。大国主神は、ご存じの出雲大社の神様です。大山咋神はその大国主神の子孫で、「山の神」として登場します。まず「近淡海国の日枝の山」とは、滋賀県の**日吉大社**のことで、もちろん今でもその東本宮に大山咋神が祀られています。そして、東本宮の背後にある牛尾山の山頂には、巨大な磐座が祀られており、松尾大社と同じく「山の祭祀」であることがわかります。そして、それだけではなく、古代より二つの神社の間に人々の交流があったこともわかります。松尾大社の社紋は「二葉葵」です。日吉大社の社紋も「二葉葵」で、**山王祭**は葵祭とも呼ばれます。もちろん上賀茂神社・下鴨神社も「二葉葵」ですね。それらが同じことにも理由があります。そしてそれらを繋ぐものが、川、滝、つまり水です。

ところで、そこに暮らした人々は、なぜ山を信仰したのでしょうか？松尾大社の市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)とは誰でしょうか？なぜ、松尾大社に祀られているのでしょうか？市杵島姫命も『古事記』に登場し、九州の**宗像大社**や、京都では松尾大社以外に、京都御苑の宗像神社などでも祀られています。

**出雲大社**の大国主神は、『古事記』でスサノオの子孫とされています。つまり大山咋神は彼らの子孫となります。そしてスサノオと兄弟とされる神がアマテラスですが、なぜアマテラスは**伊勢神宮**に祀られているのでしょうか？このように『京都学』は、京都や近隣だけではなく日本全体の歴史、神道とも深く関連します。

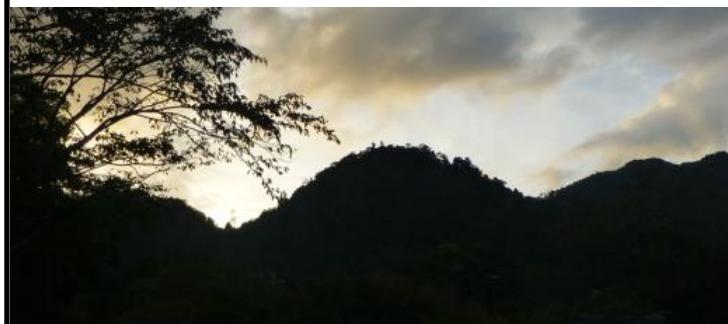
滋賀県の日吉大社を話題にしたのには、理由があります。平安時代から現代まで京都を中心に様々な仏教宗派の母体となった**延暦寺**と関係するからです。平安時代の初めに延暦寺を創建した人が**最澄**です。最澄はその日吉大社の門前で誕生し、奈良時代の末に、さきほどの「山の祭祀」である日吉大社の牛尾山の、さらに背後にある高い山に入って修行しました。それが**比叡山**です。

今、比叡山延暦寺の本尊は、薬師如来ですが、その元となる「一乗止観院」創建当初からある「**山王院**」に観音菩薩が祀られていました。現在、その観音菩薩は、重要文化財として、延暦寺の国宝殿に安置されています。「千手観音立像 平安時代(九世紀)」そして、「山王」の名称は、先ほどの日吉大社の山王祭や、特徴的な山王鳥居と繋がるわけです。つまり、冒頭にふれましたように、延暦寺も、他の山岳寺院と同じように観音菩薩を祀っていたわけです。

最澄は、**法華経**を重んじました。そもそも最澄が伝えた天台宗は、中国天台山で智顓(ちぎ)が創立した仏教の教学体系を奉ずる中国・朝鮮・日本を通じての代表的な一宗です。我が国では平安仏教の中核となり、京都や日本文化に多大な影響を与えました。その中国天台宗の中心的な経典は法華経であり、観音菩薩は、その法華経の中に登場するのです。さきほどの最澄が始めて比叡山で作った草庵「一乗止観院」の一乗は、法華経に由来します。

では、その法華経とはどのようなものなのでしょうか？実は法華経と日本は関係が深く、平安時代より遡ること約200年、**聖徳太子**から関係します。そして鎌倉時代に、**日蓮**によって開宗された日蓮宗は法華経を信仰し、室町時代の京都の民衆(町衆)の強い支援を受けたため、今でも多くの寺院が京都市中心に残っています。

「京都検定」の学習は、京都の基礎的な知識、情報にあたりますが、『京都学』は、その知識だけではなく、背景にある歴史、因果関係を理解することです。そのためには、我が国古来からの神への信仰、そして神道、仏教や儒教について、概要を理解する必要があります。『京都学』による理解は、「京都検定」の学習にも有効です。例えば、**浄土宗**や**浄土真宗**では、多くの本尊が阿弥陀如来であり、**空海**が開宗した真言宗の寺院で祀られる大日如来を本尊とすることはありません。つまり、お寺の本尊や、仏教絵画、名称や所在地までも、何らかの歴史的な理由があるわけです。そのことを知る探求が、つまり『京都学』です。では、その浄土信仰は、いつから、なぜ我が国、京都で盛んになったのでしょうか？そして仏教を受け入れ、京都を中心に、世界的にも珍しく多様で、しかも長期に定着した理由はなんなのでしょうか？神道との関係は？答えは『京都学』にあります。お楽しみに



日本文化とはなにか？その構造について次章から解説する。 簡便に解説した最近の講座反響を掲載する。

“第一章 日本文化「自然の構造」”で、まず、**結論**となる 構造を示す。そして、日本文化を象徴する言葉を、具体的に漆芸修復の文化的意義から抽出し、構造化の事例とする。そのうえで、日本語・古事記・神仏習合などで、少し深く紹介する。

“第二章 先達諸先生文化論との適合と総合”では、日本文化に造詣のある読者、聴講者のため鈴木大拙先生以下の諸先生方々見識との適合、それらを総合的に理解できる構造として紹介する。

“第三章 本論抜粋『古事記』より”では、日本文化の原理構築に至る過程を事例として紹介し、同時に、『古事記』そのものが、そのあとの日本文化の精神性を内在していることを示す。

第四章、第五章では、歴史に沿って信仰、仏教、儒教、政治体制、文学、時代の気風について概観する。最後に、現代的な課題認識へも有効であることを呈示する。構造学によって原理を活用、応用することで、日本文化の総体的理解が可能なことを解説する。

講座では、意識して、日常は耳にしない神名や古典著書を引用し、軽く質問を交え、聴講者の思考を刺激した。結果、好奇心・学習意欲を喚起、好評なご感想を多数いただき、続編も希望される。今後の講座、そして出版に向け、一般の方々の**マーケット調査**として参考となった。

本件、京都まちなか案内文化サロン「都草・京の四方山ばなし」について井筒八ツ橋 本舗とNPO法人京都観光文化を考える会・都草が共催、京都市などが後援する**市民講座**です。通常の観光情報では得られないお話を織り交ぜ、市民や観光客のみなさんに、京都の 魅力をお伝えする **市民講座**として発足した。<http://www.miyakogusa.com/?news=nbs-30> 2014年からスタートし、今年2017年で4年目となる。京都新聞などでの告知もあり、京都市民を主に、継続的な聴講者も多い。今回、その聴講者方々のご感想にもあるように 稀有な観光的情報に加え、「文化サロン」として、京都や日本文化の総体を伝える首魁となった。

平成29年4月1日

～京都まちなか文化サロン～

第35回4月1日|井筒八ツ橋 都草京の四方山ばなし

『神仏と京都文化』(担当:中村 正司)

作成者:都草・XXXXXXXXXX

1. 来館者数

21名(うち事前申込者は13名、他は当日受付者)

2. 聴講者からのアンケート集約

回収は21名

問1 どちらから来られましたか

- ・北区 4 ・左京区 1 ・中京区 1 ・東山 2 ・下京区 1
- ・右京区 2 ・西京区 1 ・伏見区 4
- ・府下 4(久御山町、城陽市、長岡京市 2)
- (・新聞2 ・チラシ1) (・初めて1 ・4回目1 ・5回以上2)
- ・他府県 0

問2 性別

・男性 10 ・女性 10

問3 年代別

・50代 1 ・60代 6 ・70代 12 ・80以上 2

問4 職業

・会社員 2 ・公務員 1 ・自営業 1 ・無職 14 ・その他 1

問5 文化サロンを知った経緯

・京都新聞 12 ・知人 3 ・チラシ 5

問6 参加回数

・初めて 4(京都新聞2、チラシ1) ・2回目 3 ・4回目 2  
・5回以上 12(京都新聞7 紹介3 チラシ1)

問7 ご感想を

- 山の神から始まる神仏習合、奥深いです。ありがとうございます。
- 私たちの知らない寺院の説明が、大変OKでした。
- 京に住んで、京を知らず。大いに催されて結構です。
- 大変興味深かったです。知らないことが沢山ありましたので、少し理解が深まりました。
- 近くで、余り知らないことが沢山あり、目からウロコでした。
- 本日の続編を希望します。
- 話が、広くなりすぎた。帰って勉強します。ありがとうございました。
- 面白いけれど、ちょっと難しかった。
- キーワードが多く、自分の中でまとまらない。
- 内容がここまで詳しく聴くのが初めてで、理解が容易ではなかった。
- 牛尾山も愛宕山も何度も登ったけれど、改めて歴史を感じ、荒れている山ですが、元気なうちにもう一度。

問8 今後のテーマ

- 中村先生の次回の講座をお願いします。今回話されなかった「儒教」など。
- 京都検定の関連での勉強法等をお願いします。
- 目立たぬ名所旧跡を探して、そして、説明してほしい。
- 神仏、祈り系なら何でも興味があります。(50代、男性、会社員)
- 仏像の見方
- 千家十職について
- 京都と天皇
- 京に関することなら何でも。またまた、知らないことばかり、どんな題でも楽しみにしております。

問9 その他ご意見

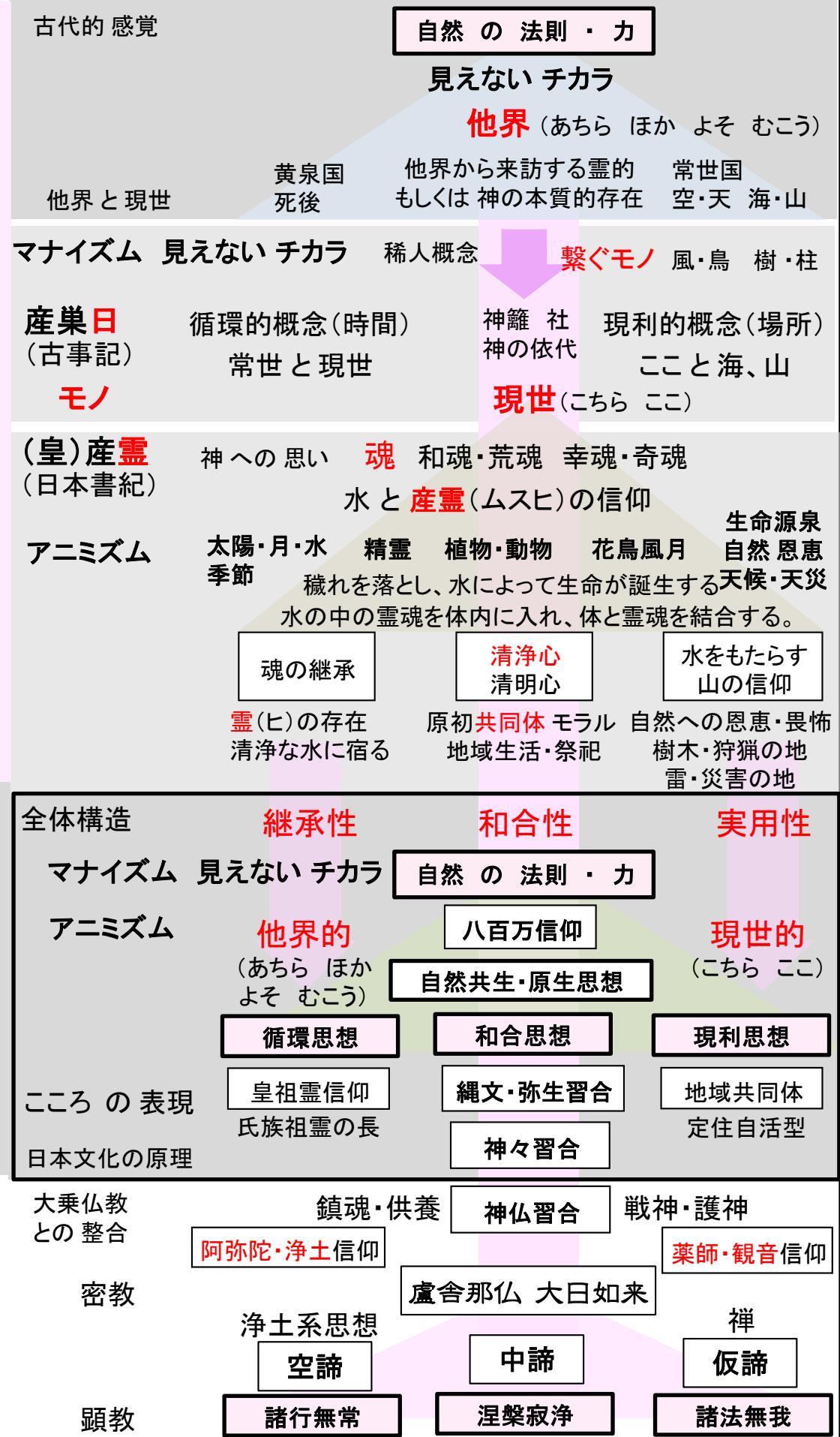
- 毎回、楽しく興味深く聞かせてもらっております。(70代、女性)
- 毎回、学ぶことがいっぱい楽しみです(60代、男性)
- 初めて来ました。また、来月も来たいと思います。(70代、女性)
- もっと多くの開催を希望します。(60代、男性)

「出版 編集提案」  
学術文芸 & ビジュアル

The Japan Code  
Principle & Origin of Japanese culture

日本文化「自然の構造」

- ① プロローグ 目的 ニーズ 出版までのストーリー 共生の出版
- ② プレゼンテーション 構造の解説  
事例 漆芸修復 日本語 寿司
- ③ ストーリー 構造の成立過程  
考古学 縄文と弥生 磐座（上賀茂、松尾、伏見、日吉） 他界と現世  
銅鐸と銅鏡 巻向と三輪 神信仰 おもてなしのころ  
**古事記** 自然と人間 モノとタマ よみがえりの思想 水と産霊  
出雲と大和 出雲と伊勢（外宮と内宮）  
（新旧習合 ヒメ 産経新聞）
- ④ アカデミック **諸説 適合と 総合**  
古典 日本的靈性：情的浄土信仰と知的禪、日本思想：三主義と新旧構造  
構造論 粹、甘え、中空 葛藤から自然、無私と関係 無為と均衡  
現代 司馬、上田、中西、佐々木 自然と調和、東西と南北 両軸と動的  
  
自然から平等
- ⑤ アレンジ 構造による歴史解説  
奈良 神仏習合 山岳信仰、浄土信仰と観音信仰（月輪寺と法蔵寺）  
平安 源氏物語 他界 怨霊からものあわれ 浄土信仰  
鎌倉 平家物語 浄土信仰から 無常  
室町 夢窓国師 無常から 自然 禪  
江戸 天皇と武家 自然から天下 公武均衡  
近松門左衛門 義理と人情 復興と浮世  
幕末 吉田松陰 孟子と尊王攘夷 嵯峨本から木版出版（本の力）
- ⑥ アドバンテージ 構造の活用 思想  
聖徳太子 和の思想 神仏儒 法華経  
仏教と儒教の日本化（鎮魂供養・鎮護国家、陰位の制・宦官欠落）  
仏教 密教と三諦円融 草木国土悉皆成仏 親鸞の自然法爾  
儒教 朱子学（室町から江戸）と 陽明学（幕末）
- ⑦ プレステージ 構造の価値 哲学  
現代社会 課題と活用 ビジネス・政策（PHP）
- ⑧ エピローグ 読書 図書館 京都検定  
文化とご縁 終活じゃなく 文化集活のすゝめ  
本著の課題 今後の目標 日本文化構造の実践



日本文化「自然の構造」

① プロローグ 目的 ニーズ 出版までのストーリー 共生の出版

② プレゼンテーション 構造の解説  
事例 漆芸修復 日本語 寿司

③ ストーリー 構造の成立過程  
考古学 縄文と弥生 磐座(上賀茂、松尾、伏見、日吉)  
銅鐸と銅鏡 巻向と三輪 神信仰 おもてなしのころ  
古事記 自然と人間 モノとタマ よみがえりの思想 水と産霊  
出雲と大和 出雲と伊勢(外宮と内宮)  
(新旧習合 ヒメ 産経新聞)

④ アカデミック 諸説 適合と 総合  
古典 日本的靈性:情的浄土信仰と知的禪、日本思想:三主義と新旧構造  
構造論 粹、甘え、中空 葛藤から自然、無私と関係 無為と均衡  
現代 司馬、上田、中西、佐々木 自然と調和、東西と南北 両軸と動的  
  
自然から平等

⑤ アレンジ 構造による歴史解説  
奈良 神仏習合 山岳信仰、浄土信仰と観音信仰 (月輪寺と法蔵寺)  
平安 源氏物語 他界 怨霊からものあわれ 浄土信仰  
鎌倉 平家物語 浄土信仰から 無常  
室町 夢窓国師 無常から 自然 禪  
江戸 天皇と武家 自然から天下 公武均衡  
近松門左衛門 義理と人情 復興と浮世  
幕末 吉田松陰 孟子と尊王攘夷 嵯峨本から木版出版(本の力)

⑥ アドバンテージ 構造の活用 思想  
聖徳太子 和の思想 神仏儒 法華経  
仏教と儒教の日本化 (鎮魂供養・鎮護国家、陰位の制・宦官欠落)  
仏教 密教と三諦円融 草木国土悉皆成仏 親鸞の自然法爾  
儒教 朱子学(室町から江戸)と 陽明学(幕末)

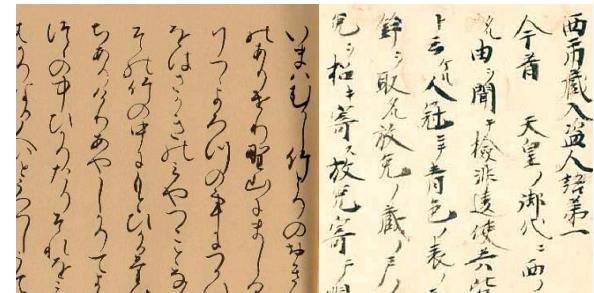
⑦ プレステージ 構造の価値 哲学  
現代社会 課題と活用 ビジネス・政策 (PHP)

⑧ エピローグ 読書 図書館 京都検定  
文化とご縁 終活じゃなく 文化集活のすゝめ  
本著の課題 今後の目標 日本文化構造の実践

現代版『嵯峨本』到来 ビジュアル読本

漆芸修復、書家、日本画家、京風イラストレーター、写真家などコラボ

以下、イメージ画像



仮称『京都学のすゝめ』

編集提案 歴史 編年体 …… 主に 地域で 区別する観光本とは違う 歴史(因果関係)的理解を促進

本文は「歴史 ビジュアル編集」 各時代と関係させて、「テーマ」を特集 「コラム」でプラス教養

従来の京都通史が弱い部分を充実 入門編だが、京都学らしい特徴を出す 京都文化の基層部分をわかりやすく解説



歴史

歴史解説の中で、各時代の重要な「名称」を織り込む

テーマ

見開き特集

コラム

簡単なコーナー紹介 シリーズ各編へ布石

縄文  
弥生  
古墳

神 信仰

遺跡

神社

古代信仰

京都の古代祭祀 磐座

飛鳥  
奈良

仏教公伝

松尾大社 伏見稻荷大社  
上賀茂神社 下鴨神社

寺院

日本神話

古事記と京都の神々

古事記

神道

神道と日本文化

平安  
時代

南都六宗

(八坂神社)  
大原野神社  
平野神社 城南宮  
熊野神社 梅宮大社  
石清水八幡宮  
北野天満宮

京都周辺 山岳寺院  
愛宕・西山・山科・比叡山  
神護寺 清水寺

観音信仰

京都 山の観音様

社寺建築

仏像

仏教

密教と天台

鎌倉  
時代

浄土信仰

浄土宗  
浄土真宗  
臨濟宗  
曹洞宗  
日蓮宗

新熊野神社

蓮華王院

浄土信仰

仏教 美術

平安文学

鎌倉文学

怨霊と鎮魂  
浄土信仰の系譜  
地獄と地蔵

南北朝  
室町

武家への臨濟宗・禅  
民間への日蓮宗  
浄土真宗 浸透

建勲神社  
豊国神社

大徳寺 妙心寺  
天龍寺 相国寺  
金閣寺  
銀閣寺  
龍安寺 本法寺

京都五山

北山東山  
文化

禅

芸能

儒教

禅と儒教  
鎌倉禅と室町禅

安土  
桃山時代

文化人・幕府での  
儒教 派生

西本願寺 養源院

日本画

茶道

町衆

工芸

日蓮宗と町衆

江戸  
時代

国学 尊王攘夷思想

白峯神社 護王神社  
平安神宮

智積院 東本願寺

万福寺

二条城

幕末と維新

近代化

幕府と朱子学

倒幕と陽明学

明治  
以降

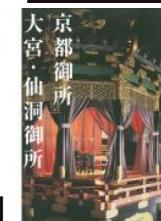
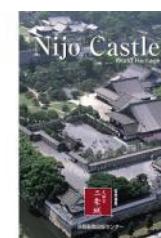
近代化

疎水

近代京都文学

「細雪」「粹の思想」

既刊引用  
事例



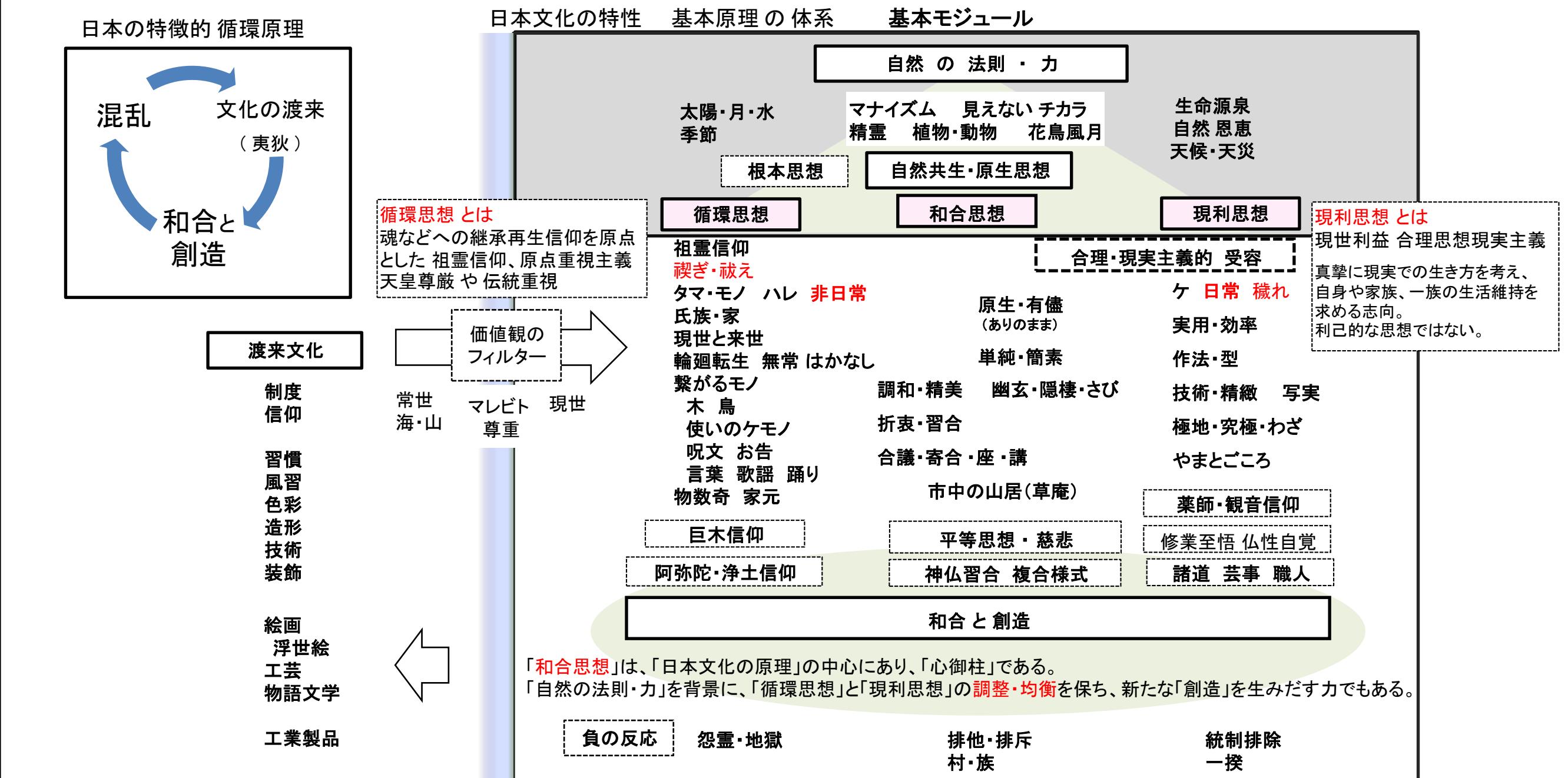
## 日本文化「自然の構造」

Foundation of Kyoto culture  
Principle & Origin of Japanese culture

歴史的な出来事、思想と宗教、制度、祭祀と芸能、文字、建築、絵画や諸道などあらゆる歴史は因果関係を持つ、しかし因に対する果は様々であり、その国、人々の特性が現れる。我が国でも、無数の因果の結果、現在があり、また、未来も同様である。今回、その因果の**基本原理を、仮説提示する**。**日本文化の特性**を知り、**源流を探ることは、日本国家や自己認識と、とかく理解されにくいと思われている外国人への明快な説明、そして国際社会の中における日本の未来にとって「何が重要か」を知る手掛かりとなるはずである。**

先人諸先生の研究成果を手掛かりに、改めて日本の思想文化史を通観すると、特性の体系と、歴史に循環法則があることに気づく。また、その循環の繰返により、進化と主体の拡大を遂げてきたと考える。その法則とは？ 縄文から弥生時代の自然を根本とした思想、つまり「循環和合現利(現世利益)思想」を軸とし、そしてそこから様々な「創造」を誕生させる法則を仮説する。また時間軸では、「混乱、文化の渡来、そして和合と創造」の並びとなる循環原理が存在する。基本原理の体系とそこから発生した**特徴的語彙事例**を下図に纏めた。この説が、一般の方々にとってこの分野の専門書を読む動機となり、また理解補助となれば僥倖幸いである。論拠となる文化・思想の分析、循環の検証は後述、歴史に沿って解説する。

ではなぜ、このような文化的特性と循環が発祥したのか？ この国の地理的環境にその理由があると考えられる。大陸、半島から小規模な海洋、海峡で隔たり、また暖寒流の合流があることは多様で周期変化な気候と海流、そして生態系と農耕環境、防御の環境をもたらす。結果、その住民には、独立した食生活と、断続的な近隣文化の渡来、そして征服には困難な状況を与える。重要なことは、受け入れた文化を、基本原理(精神)と照らし、取捨選択、変化・習合・特化させる、遠隔環境と期間的余裕があることと考える。世界の大半の国々とは多少とも違う環境である。またなぜ、様々な性格の人々がいるのに特性的循環が成立するのか？ 答えは一人ひとりの人間にある。人間も様々な思考、感情、環境が一人の特性を形成している。国家・人民も同様である。国家文化の特性は、一人の人生よりはるかに長永な自然・社会的環境が影響し、深層に蓄積、形成される。そして、そこに暮らす人々の思想、歴史文化として顕在化するものと考えられる。なぜこのような仮説提起が必要か？日本人としての自覚、近年の**エネルギー問題、東アジア和平、日本の将来**に向け、検証しておくべき事柄と考える。



主たる参考・引用書籍 (著者 敬称略)

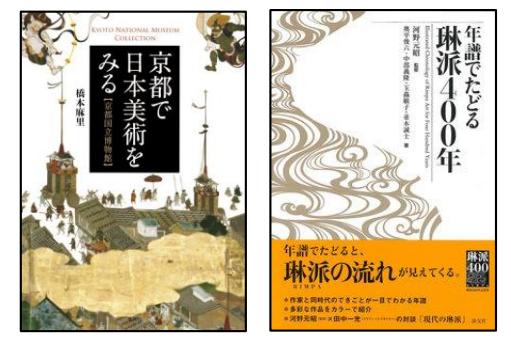
「風土」 和辻哲郎  
「日本の古代文化」 林屋辰三郎  
「古代日本と古墳文化」 森浩一  
「日本文化史」 家永三郎  
「街道をゆく」シリーズ 他 司馬遼太郎  
「空海の風景」他  
「三教指帰」 他 空海  
「古代幻視」 梅原猛  
「神々の流竄」「海人と天皇」  
「仏教の思想」「葬られた王朝」  
「古事記・日本書紀」解説書籍  
「研究最前線 邪馬台国」 石野博信 他  
「出雲と大和」 村井康彦  
「古代出雲文化展」 上田正昭 他  
「出雲大神宮史」  
「日本古代国家成立史の研究」 上田正昭  
「ヤマト政権誕生と大丹波王国」 伴とし子  
「元伊勢の秘宝と国宝海部氏系図」 籠神社  
「三輪山と古代史」 石野博信・森浩一 他  
「原始仏教」他 仏教書 中村元  
「京都の歴史」全10巻 林屋辰三郎 編  
「京都」「町衆」 林屋辰三郎  
「平安京年代記」 他 村井康彦  
「京都の歴史を足元からさぐる」 森浩一  
「京都の美術史」 赤井達郎  
「京の美術と芸能」  
「古代の日本と渡来人」 井上満朗  
「京都 よみがえる古代」  
「京都発見」シリーズ 梅原猛  
「京都の歴史」シリーズ 佛教大学編集  
「古寺めぐりの仏教常識」 浄瑠璃寺 佐伯快勝  
「十一面観音巡礼」 白州正子  
「月輪寺の仏たち」 佛教大学 八木透  
「京都愛宕研究会調査資料集Ⅰ」 京都愛宕研究会  
その他 社寺文献 古文書、仏教経典、古地図・他  
都名所図会、山州名跡誌、月輪寺略縁起

主たる参考・引用書籍 信仰思想文化関連として、特に参考とした書物 (著者 敬称略)

「禅と日本文化」「日本的靈性」 鈴木大拙  
「日本倫理思想史」 他 和辻哲郎  
「思想をどうとらえるか」 中村元  
「思想史」 石田一良  
「日本史論聚」「歌舞伎以前」他 林屋辰三郎  
「日本人はどこから来たか」 樋口隆康  
「日本人と日本文化」「日本とは何かということ 宗教・歴史・文明」他 司馬遼太郎  
「日本人のこころ」「とも生み」の思想」 上田正昭  
「神と仏の古代史」「日本神話」「死をみつめて生きる」 他  
「古代の日本と渡来の文化」 同氏 古稀記念 論文集  
「日本の文化」 村井康彦  
「日本宗教文化の構造と祖型」 山折哲雄  
「こころの日本文化史」 他 中西進  
「日本とは何か」 網野善彦  
「神仏習合」 義江彰夫  
「花鳥風月の科学」 松岡正剛  
「雪月花の心」 栗田 勇  
「日本文化を探る」 小松左京、黒川紀章  
「日本人の心と建築の歴史」 上田 篤  
「日本建築史」 藤田勝也、古賀秀策  
「空也上人の研究」 石井義長  
「茶の文化史」 村井康彦

構造的見識について

「いきの構造」 九鬼周造 「甘えの構造」 土居健朗 「中空構造 日本の深層」 河合隼雄  
「日本の文化構造」 中西進 「日本人らしさの構造」 芳賀綏  
その他、論中に引用させていただいた諸先生（順不同 敬称略 著書名は論中に掲載）  
**高田良信、佐々木閑、尾関宗園、玄侑宗久、竹内信夫、田中典彦、田中恆清、松下幸之助(PHP)**



推奨図書 事例  
本論と併せ、日本美術 ご参照

主たる現地調査・撮影・ヒヤリング・教授

月輪寺、神護寺、愛宕神社、高鴨神社、上賀茂神社、下鴨神社、石清水八幡宮、籠神社、大神神社  
石上神宮、出雲大社、出雲大神宮、松尾大社、護王神社、金蔵寺、法住寺、恵心院、平等院、醍醐寺  
聖護院門跡、妙顕寺、本法寺、**法蔵寺**、清水寺、貴船神社、鞍馬寺、二尊院、本願寺、仏光寺、法然院  
東寺、大覚寺、泉涌寺、智積院、建仁寺、南禅寺、大徳寺、妙心寺、天龍寺、日吉大社、延暦寺  
浄瑠璃寺、海住山寺、伊勢神宮、飛鳥坐神社、聖林寺、興福寺、春日大社、法隆寺  
住吉大社、四天王寺、往生院(泉南)、孝恩寺(貝塚)、大宰府 観世音寺、宗像大社、霧島神社  
堺市博物館(古墳情報)、京都市歴史資料館、京都府立総合資料館  
京都国立博物館、奈良国立博物館、高麗美術館

「歴史学」 諸先生 京都新聞出版センター、国際日本文化研究センター 平安神宮宮司(藤裔会)

データ検索 国史大辞典、歴史地名体系など 辞典データベース

京都の歴史、国際日本文化研究センター、早稲田大学、佛教大学など  
編集基礎データとアプリケーション  
歴史文化 ネットリンク年表 (エクセルハイパーリンク対応)  
文化分野別 社寺創建・人物・出来事 時代考証照合  
仏教 東アジア教義変遷図 (同上)

編集基礎データと 関連製作 アプリケーション  
地図マーキング照合 (グーグルカスタム)  
寺院パンフレット製作 (フォトショップ・イラストレーター) DTP連携・印刷 京都 (株)からふね屋  
情報提供用ウェブサイト (JIMDO)  
最終編集 (パワーポイント) メール配布 (PDF)

粉は、日本文化の調和の象徴として、今日まで継承されている。

我が国の精神性を背景とした創作、工芸品は、太古より、粉との関係が深い。その特性は、あとの時代の紙や日本画、食生活においても同様で、日本は「粉の文化」とも言える。

粉状にすることで、別の素材と混ざりあい調和する。

これは、創作における素材のことではあるが、実は日本文化の特性である習合性、調和の象徴とも解釈できる。

日本美術の「素材」や「表現」の中心には、美的で習合的な「粉」がある。

粉の特性を生かした「技法」には、彫り塗り、ぼかし、たらし込み 濃淡 片ぼかし、破墨、潤筆、渴筆 裏箔 切箔 砂子などある。

それらは、先住と後入、神と仏、かなと漢字、和と洋などに通じる美的で習合的な技法である。粉技法は、その様な日本人の精神を表現している。

さらに、大和絵と水墨画に加え、花鳥画や金銀の使用には、わび・さびと絢爛・豪華といった異なるモノ同士の調和の美が表現され、新しい価値を結ぶ。

「漆」は、縄文時代の赤色から始まった。

漆は半透明のあめ色であるが、鉱物を粉末にして混合し、「赤い漆」を作りだした。

またこの時代から漆で土器のひびを補修していた。

これがのちに室町時代から興隆する漆による金継ぎの原点であり、日本人のモノへのこのころの源流である。

そして、今、漆芸修復と呼ばれ、仏像・建築・茶碗などを、漆によって修復する伝統技法のことである。

2017年までに発見されている縄文時代、最古の漆は「赤い漆」(以下、赤漆)である。その時代の主役は土器であり、その土器の材料である土も粉とする粉研究の先達、三輪茂雄先生のご見識がある。石器や土器は、直接生活に必要なものであるが、漆は、その赤色や、創作の困難さ、作られた物、素材の長期耐久性から、精神性を伴う、呪術的なものとして意図的に赤漆が用いられたとする見解が主説である。

北海道南茅部町の縄文時代早期、約9000年前の垣ノ島B遺跡から遺骸跡が発掘されたが、赤漆塗り糸が樹皮らしい軸に巻き付けられた衣類あるいは装身具を身に付けていた。約6800年前の石川県七尾市の三引遺跡や、約5500年前の福井県鳥浜遺跡からは、赤漆の堅櫛が出土している。

青森県の三内丸山遺跡から出土した同時代の漆の種子は、DNA鑑定によって中国ではなく日本産であることが判明している。竹などで編んだ一種の籠に赤漆を塗った籃胎漆器(らんたいしっき)が、胡桃とともに出土している。縄文時代の漆器は、北海道・東北から関東・北陸を主に、近畿・山陰などでも散見されている。また、弥生時代の奈良県唐古(からこ)遺跡から出土した漆塗り革盾・乾漆棺などは、この時代の漆工技術の進歩を示している。

漆を赤く染めるには鉱物性顔料が必要で、原初は酸化第二鉄(ベンガラ)を用い、縄文時代後期からは水銀朱を用いられた。いずれも鉱物を粉末にして漆と混合する。のちの時代、黒色は煤や鉄を、黄色は鉱物の石黄・雌黄を、緑色は岩緑青(孔雀石)や黄色素材に群青の石を、それぞれ漆に混合し創色されるが、いずれも主に粉末である。

日本の粉文化として、工芸を代表する我が国の独創的なものに「蒔絵」がある。これは、粉末の素材で彩色された漆を用いつつ、さらにその上に別の粉末を蒔く技法である。

粉は、縄文時代からの自然共生に始まり、弥生時代から古墳時代に渡来人を受け入れ、その後も、文化を和にアレンジしてきた日本文化の特性と共通する。

粉は、日本文化の調和の象徴として、今日まで継承されている。



## 自然を調和させ、再生し 美を結ぶ技

# 和

# 自然



# 再生

# 調和



# 美

# 結



# 技

### 自然

自然素材である山の土から火を用いて茶碗などの陶磁器は創られる。そして、その修復にも同じく自然の樹木から採取された漆を用い再生される。さらに金粉などを加えることで、新たな美が誕生する。自然への視座として、中国の五行説では、前にあるものから後のものを生ずるとする五行相生(そうせい)の次序が記され森羅万象の配当がなされた。(木 → 火 → 土 → 金 → 水 → 木 )

五行説は木から始まるが、我が国では水から始まる自然の循環、再生への信仰がある。『水を掬ぶ(むすぶ)』という言葉があり、水を両手のひらで掬って(すくって)飲む動作を『水を掬ぶ』と言う。そこには、水の中に靈魂を入れてそれを人間の体の中に入れることで体と靈魂を結合させるという日本の古代信仰があった。その動作は「禊」の技法と呼ばれ生命力が再生されると信じられた。

### 再生

よみがえりの思想 (建築や着物の再利用) 古事記で「神産巢日神」(かみむすひのかみ)は、生命再生を表現している。関連し「ハレ」と「ケ」は、日本人の循環的な生活リズムを表現した言葉である。「ハレ」は、神社の祭礼や寺院の法会、正月・節句・お盆といった年中行事、初宮参り・七五三・冠婚葬祭といった人生儀礼など、非日常的な行事が行われる時間や空間を指す。日常生活(普段の労働や休息の時間・空間)が「ケ」である。古代の「死生観」において、「ケガレ」る魂「タマ」は生霊であり、生霊が抜けた肉体が行く世界が「モノ」である。縄文時代には屍を村外に遠ざけたことから「ケガレ」の意識が強く表れている。弥生時代には、土器など死者への副葬品が後期に増加するが、副葬品は古事記の葬儀に登場する「殯」に用いられたと考えられている。死の直後「タマ」はすぐには「モノ」の世界に行かず滞留すると考えられ、「鎮魂」の歌舞、辞で「魂振」をして屍に呼び戻し、死者と生者の「タマ」を結合する儀式が「殯」である。非日常と日常、他界と現世、無常と現実 それらの連続性や近接性、つまり調和が、我が国の文化に深く堆積している。

### 調和

異なる文化の習合 旧と新、継承と合理、異なる文化の「間」で、和合、均衡、葛藤 ゆらぐところ 「国譲 神々和合」「神仏習合」「公武習合」「武家と禅・茶道」「義理と人情」「粋」「いき」「花鳥画と水墨画」「赤楽茶碗と黒楽茶碗」などの間のところ(別途詳細)「自然との調和」は用いられる素材そのモノや、そこから創造され表現されるモノにある。そのあり様が、本来、人間の思考・行為を表す自然(じねん)であり、日本人は同じ文字を万物に用いた。我が国では自然との優れた調和によって、時代を超えて文化が再生されてきた。それが、日本の美である。

### 美

美の方向 例えば、日本画は、平安時代以来続いている絵画様式、画材を継承してきた。画題・画材・素材は、自然天然を基本に、比較文化上多様に富む。日本美術の「素材」や「表現」の中心に、美的で習合的な「粉」がある。粉は、縄文時代からの自然共生、弥生時代から古墳時代への渡来人の受け入れ、文化を和にアレンジしてきた日本文化の特性と共通する。粉の特性を生かした「技法」には、彫り塗り、ぼかし、たらし込み 濃淡 片ぼかし、破墨、潤筆、渴筆 裏箔 切箔 砂子などある。それらは、先住と後入、神と仏、かな と漢字、和と洋などに通じる美的で習合的な技法である。粉技法 は、その様な日本人の精神を表現している。大和絵と水墨画の技法に加え、金銀の使用には、わび・さびと 絢爛・豪華といった異なるモノ同士の調和の美が表現され、新しい価値を結ぶ。

### 結

「産日と産霊、結」の原意はモノや命の生成である。現在、宮中には産日(産霊 むすひ)の神を中心に天皇守護の八神を祀る「神殿」がある。「結び」の語源である『産巢日・産霊(むすひ)』は、日本の神信仰における重要な概念である。「産(むす)」は生じる、「日」は太陽、「霊(ひ)」は神秘的、霊的な働きを示す。つまり『ムスヒ』とは天地万物を生み出すチカラ、霊的な働きのことを言う。宮中「神殿」には、産日(霊)に関して五神が祀られている。神産日神(カミムスビ)と高御産日神(タカミムスビ)と以下三神、玉積産日神は『古語拾遺』の「魂留産霊」と同神で、「タマツメ(タマトメ)」は魂を体に留める(鎮魂)という意味。生産日神の「イク」は「イキ」(生き、息)と同根で、むすひの働きを賛える語である。足産日神の「タル」は、その働きが満ち溢て(足りている)様子を示す。これら「産日と産霊、結」は、見えないチカラや存在に対する、我が国のマナやアニミズムや、隠身(神)観念、他界観を古層とする。日本には、新しいモノを 結び生み出す、技の蓄積・継承 が 著しい。

### 技

モノの美を結ぶ・生み出す技の前提には、日本人特有の自然に対する精緻な観察がある。自然の造形は、技を生み出す源である。縄文時代の火炎土器には複雑な装飾や文様があり、単なる実用器以外の「信仰」と創造する「技」が、その「美」を実現している。火や食物とついで、古事記に、オオゲツヒメ(大気都比売神)、カグツチ(火之迦具土神、紀・ホムスビ/火産霊)、トヨウケヒメ(豊受比売神)、ウカノミタマノカミ(宇迦之御魂神、稲荷神)たちが登場する。自然からモノが誕生することへの信仰である。紀元前2世紀～紀元後3世紀 弥生文化の成立・展開は渡来人のもたらした稲作技術、金属工芸などの外来技術の伝播を契機とする。雄略朝～欽明朝にかけて、朝鮮南部の百濟・加羅(任那(みまな))から「今来(いまき)の才伎(てひと)」といわれる先進技術をもった人々が移住し習合、発展してきた。いわゆる今の「職人」は、鋳物師(いもじ)のような手工業者、大歌所十生(としよう)のような芸能民の職能が<所職の業能>くやむごとなき嚴重の職)のように<職>とされ、ここからこれらの人々をさす職人の語が鎌倉後期から現れ、しだいに広く用いられるようになった。今日の日本を支える「モノ作り」の原点は、「自然を調和させ、再生し 美を結ぶ技」にある。

漆芸修復とは、仏像・建築・茶碗などを、漆によって修復する伝統技法のことをいいます。

文化的な意味、価値として漆芸修復を表現すると、「自然を調和させ、再生し 美を結ぶ 技」となります。

目的や手段、成果を意識して表現すると、「ものを再生するために、技によって、自然の素材を調和させ、新たな美を結ぶこと」です。

まず、漆芸修復を日本文化の事例としてとりあげる理由は、「縄文時代に起源する素材や技法の歴史性」、「ものを大切にする精神性」、「精緻な技巧性」という日本的な特徴がそろっているからです。さらに、建築や工芸など多くの伝統的分野に関係し、特に茶碗などの修復である「金継ぎ」は、近代以降、海外からも注目されているからです。

ところで、あなたが日本文化らしいと思う事柄、または特徴はなにでしょうか

例えば、それは、神社やお寺、信仰・宗教、行事や風習かもしれません。あるいは文学や、美術、建築、芸能、庭園、食べ物などの分野から、選ばれた言葉かもしれません。

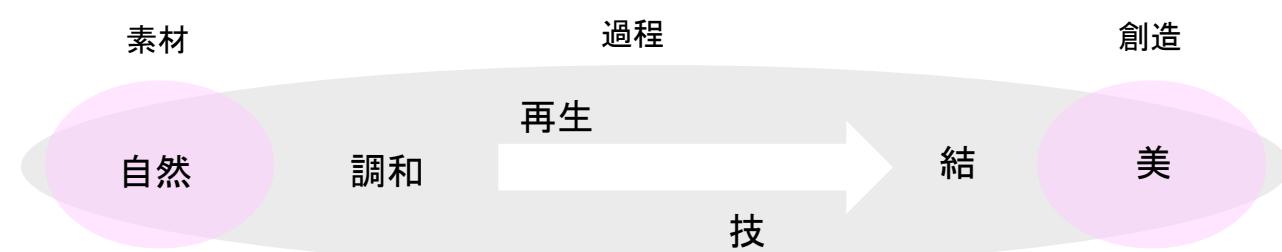
日本文化に詳しい読者や、専門的に学習したり、研究している方は、いかがでしょうか『古事記』や『源氏物語』などについて、もしくは、神道や仏教、儒教の分野、あるいは特定の時代を象徴する言葉かもしれません。

あなたが考えた事柄や特徴と、漆芸修復とはなんらかの共通点はあるでしょうか日本らしいことならば、どこかに重なる特徴があるかもしれません。

そのことを確認するためには、まず、さきほどの「漆芸修復を文化的に表現する言葉」を一度、分類し組み立て、汎用的な表現にすることが必要です。

「自然」は、もちろん環境ですが、この場合は素材も意味します。そして「調和」は、全体的な状態を表します。「再生」は、時間的な流れの中での行為や現象ですが、「技」は、その時々、ある時点の行為として区別できます。「結」は、最終的な結果、成果として生み出すことです。「美」は、自然に存在しますが、この場合は、人が生みだすものへの評価、価値観です。以上、異論はないと考えます。

流れに沿って図式化すると、以下のようになります。



では、他の文化との共通性を確認するため、少し汎用的で普遍的な表現に置き換えます。

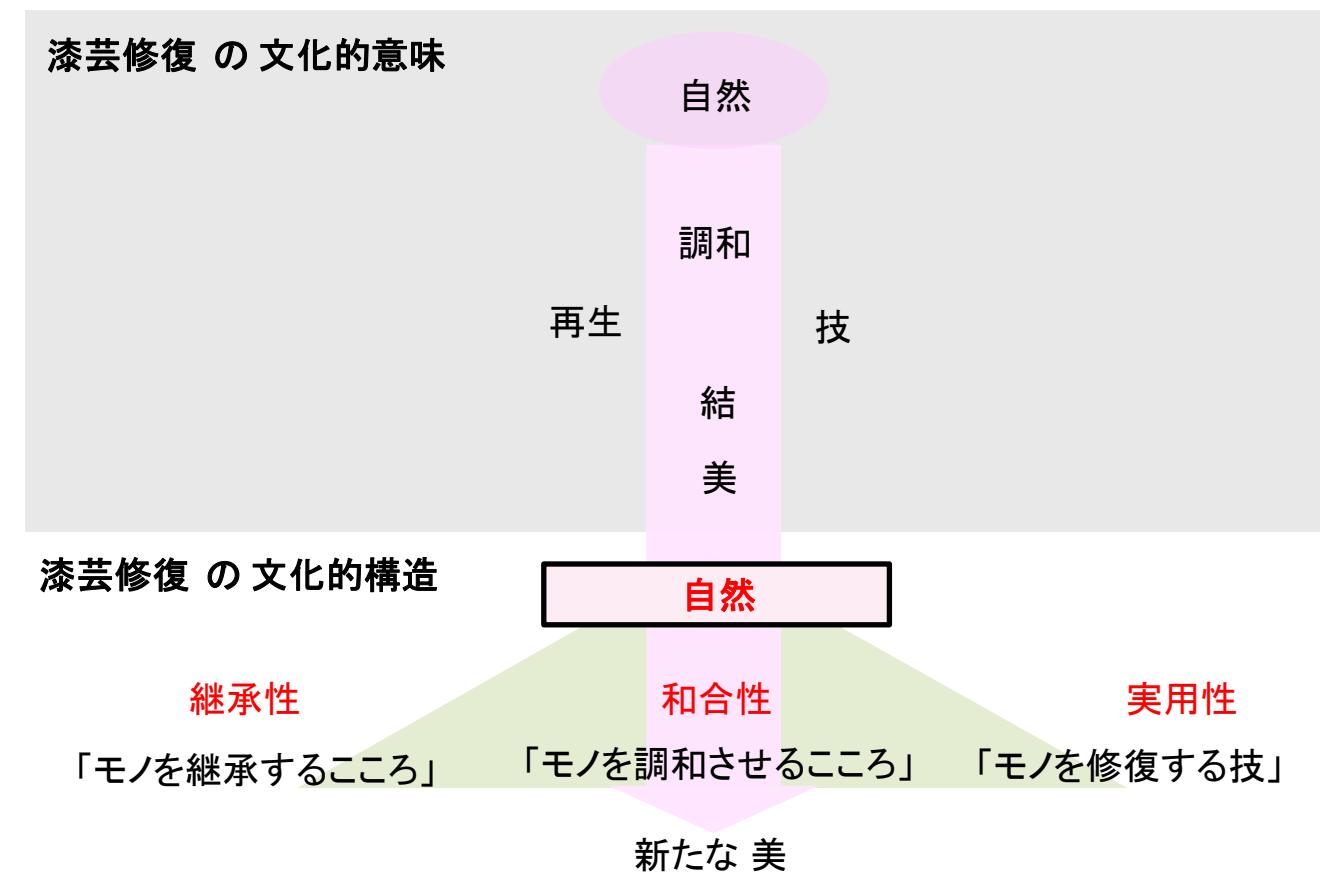
まず「自然」が、この事例においても、すべての元であることは、間違いありません。「自然」とはなにか、人間との関係、特に日本においてはどうか、少し考えてくださいあとから解説しますが、このことが、重要な意味を持ちます。

その「自然」から、「調和」、「結」、「美」へと、つながる経路があります。「再生」、「技」は、その過程として、時間軸なこと、現在のなこととして対比できます。

これを、再度、図式化すると、以下のようになります。汎用的で、普遍的な表現に置き換えますと、一番下のような構成になります。

さて、あなたが日本文化らしいと思った事柄、または特徴と共通点はあるでしょうか確認のためには、その事柄や特徴を、同様に構造化する必要があります。ここで紹介した手順と同じく、発展的に他の事柄も説明できるような汎用化が必要です。

本論の目的は、日本文化の特徴を全体的に理解し説明できる理論の発見です。その特徴について書かれた著名な方々の見識も引用し、事柄や特徴を抽出し検証します。あなたが考えた事柄や特徴が登場するかもしれません。しかし、その著書にも、全体を表現しようとするものと、個別を主題とするものがあります。つまり、できる限り広範囲な分野について理解し、総合する必要があるわけです。それらが構造として一致すれば、日本文化を説明できる有力な理論となるわけです。



日本文化構造学により、本論で解説する構造全体と、漆芸修復との整合を図に示す。  
その構造は、自然世界の中の生死・場所の他界感、自然のチカラを媒介するモノ、他界と現世を繋ぐ霊・魂を、文化生成の基層とし、「自然環境との現実・実用的かかわり」と「自然時間との循環・継承的かかわり」の習合から成る。

「漆芸修復の世界」は、日本人の「モノ」に対する ころを 深層とする。

日本人のモノへの愛着、大切にすることは、歴史的にも、その文化特性として賛同を得られるであろう。

その「モノへのころ」を 考える場合、マナイズムを前提にすると理解しやすい。  
マナは非人格的超自然観で、超自然的な力を示す。それは、動植物・自然現象・自然物・人工物などに宿り、それらモノからモノへと転移し得ると考えられた。

つまり、超自然的な力そのものがモノに宿ると信じる信仰がマナイズムである。  
同じ原始宗教のいわゆるアニミズムとは、生命万物の「霊」観念としての人格的超自然観であり、対して、マナイズムは超自然的・神秘的で、非人格的な力への信仰、自然観である。

マナイズムは、自然物、自然現象に対する尊敬や畏怖の態度の総称であり、日本人の自然観、神々への信仰と共通する。そして、これはまた、現代においても認識すべき課題でもある。

当論の主題である「日本文化の原理」もまた、「金継ぎの世界」に存在する。  
すなわち、「モノを継承するころ」と、「モノを修復する技」  
その二つの習合こそが「金継ぎの世界」を実現している。

したがって、金継ぎの技法は、継承を第一義に置かなければならない。  
安易な手法は、本来の継承を弱体化させる。

そしてまた、技法そのものが、継承されるべき「文化」でもある。  
さらに「金継ぎの世界」には、継承だけでなく、「再生」がある。

同じモノの再現ではなく、新たな「美」をモノに生み出す「再生」である。  
これはまた、我が国古来の産霊、鎮魂、つまり、魂の「よみがえりの世界」でもある。

モノを継承しつつ、ワザを継承する 再生されたモノは、新たなマナを持つにちがいない。

**和** 「漆芸修復・金継ぎ」は、万物自然と人間の 自然(じねん)なる 和 である。

そもそも、日本文化の総体は、異なる文化の習合である。  
旧と新、継承と合理、異なる文化の「間」で、和合、均衡、葛藤し、ゆらぐころが、我が国の「和」である。

「縄文文化と弥生文化」「国譲 神々和合」「神仏習合」「他界と現世」

もののははれ すなわち、王朝文化における「はかなしとみやび」

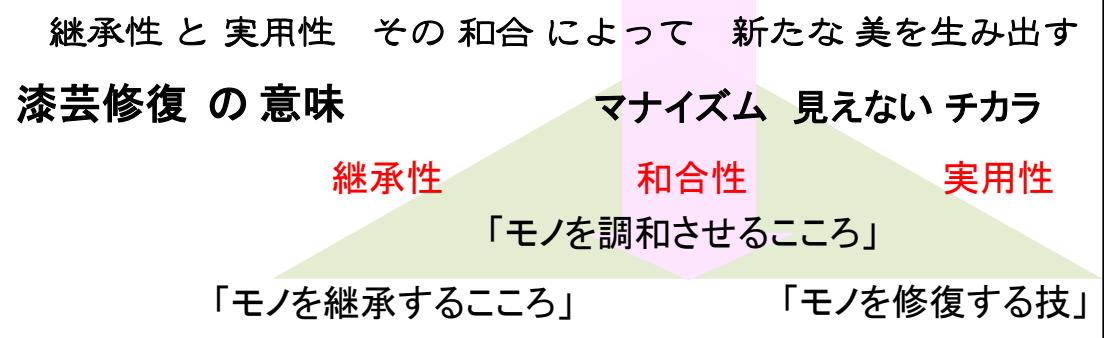
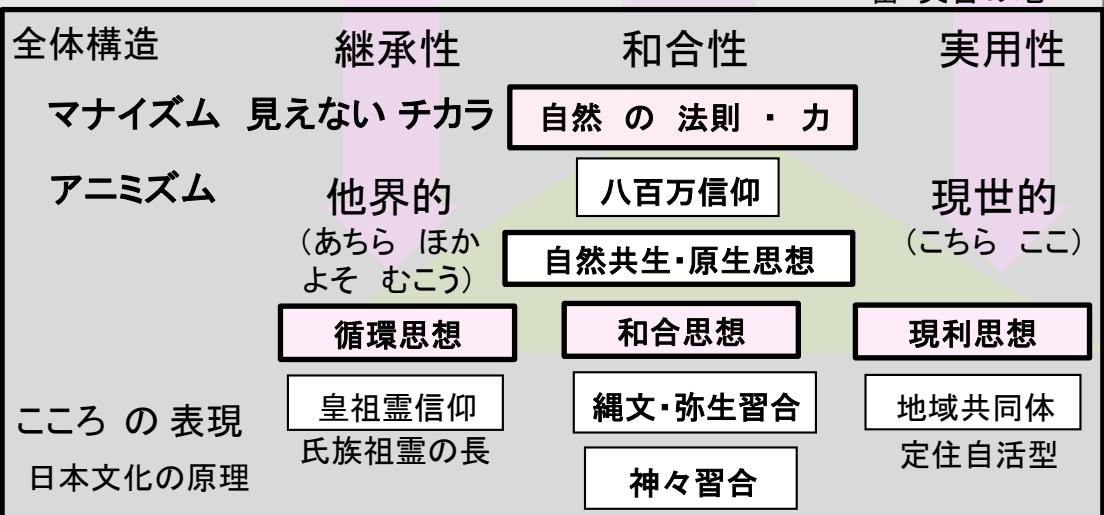
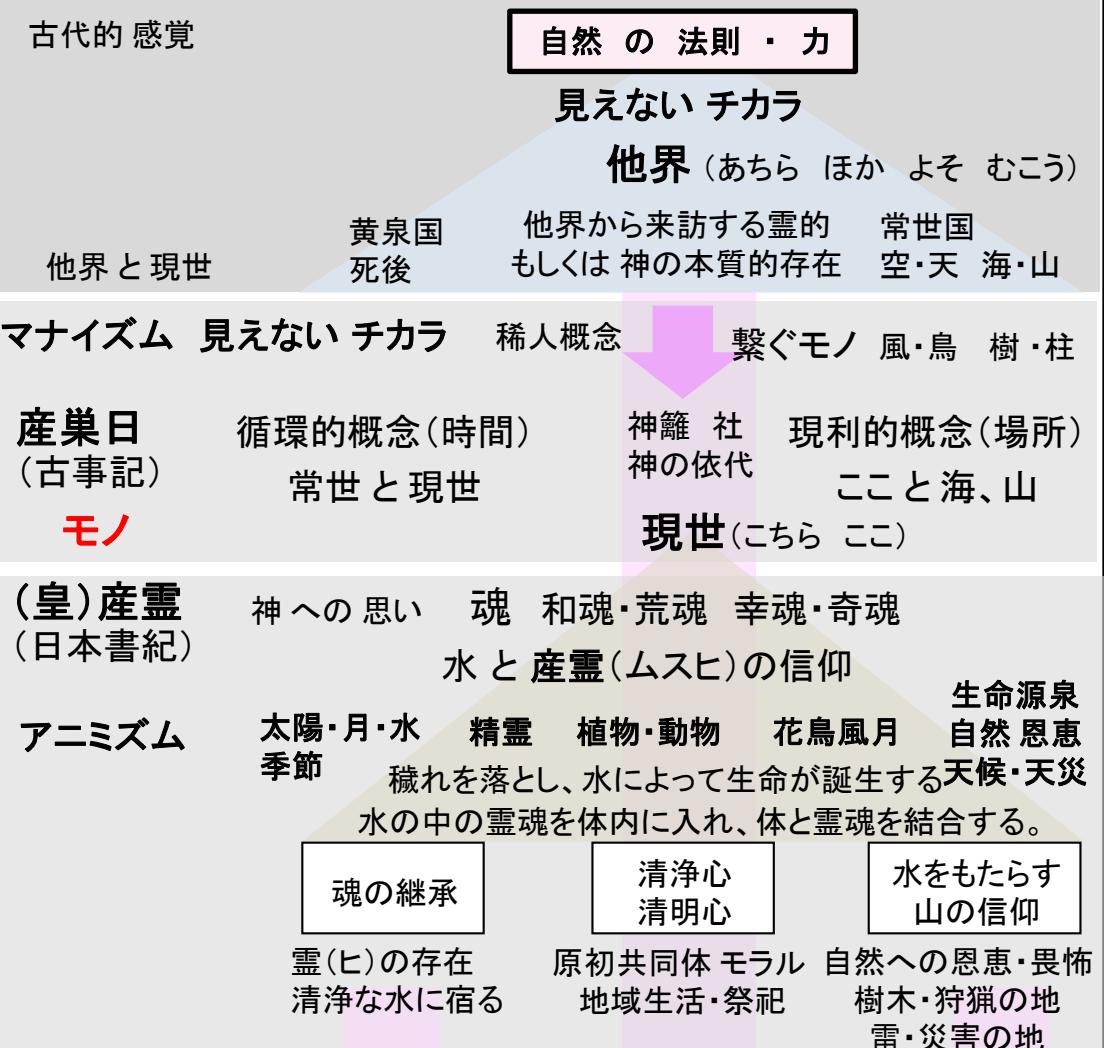
「漢字と仮名」「浄土信仰と観音信仰」「天皇と武家」

「無常と現実」「俗世と隠棲」無常から自然 万物自然と自然法爾

「武家と禅・茶道」「花鳥画と水墨画」「桜と松」

「わび さび」と「絢爛 豪華」「赤楽茶碗と黒楽茶碗」

「義理と人情」「粋(すい)と「粋(いき)などの 間のころ が 和 である。



「日本文化の原理」について

日本の「モノ」「カミ」について、「記」・「紀」神話から、その古代の感覚を解説する。それは、「見えないモノ、チカラ」の気配を感じるころである。『古事記』は、初めに「天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)」「高御産巢日神(タカミスヒノカミ)」「神産巢日神(カミスヒノカミ)」が誕生する。そのあと萌え上がったモノ(物)から「宇摩志阿斯訶備比古遲神(ウマアシカビヒコチノカミ)」「天之常立神(アメノトコタチノカミ)」が誕生し、力としてのモノを表現している。そして「國之常立神(クニノトコタチノカミ)」「豊雲上野神(トヨクモノカミ)」が誕生する。以上、七柱の神いずれも「隠身」なりとする。モノは「大物主大神」のモノで、モノが依りついた三輪山の神である。縄文土器にはそのモノとしての超越的な力の表現がある。

上田正昭先生は、この記述から、目に見えない「隠身」、これを日本語の「カミ」の語源とする説を、説得力があると支持される。『日本人のころ』より) 石田一良先生は、「記」・「紀」神話や、『風土記』などの説話は、縄文時代の古いカミガミ(精霊といった方がよかろう)が水稻農耕時代の新しい神々と葛藤し、結合し、癒着し、それに吸収されたプロセスを反映しているとされる。(「思想史 I」より)

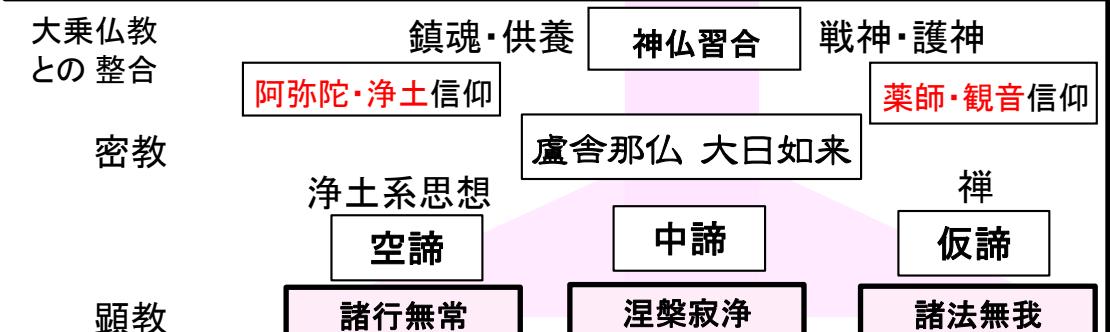
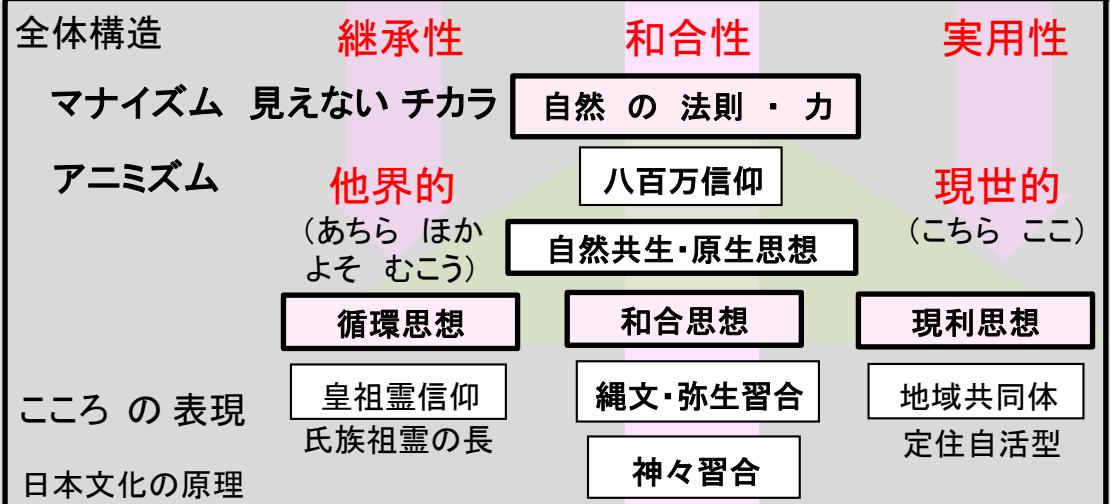
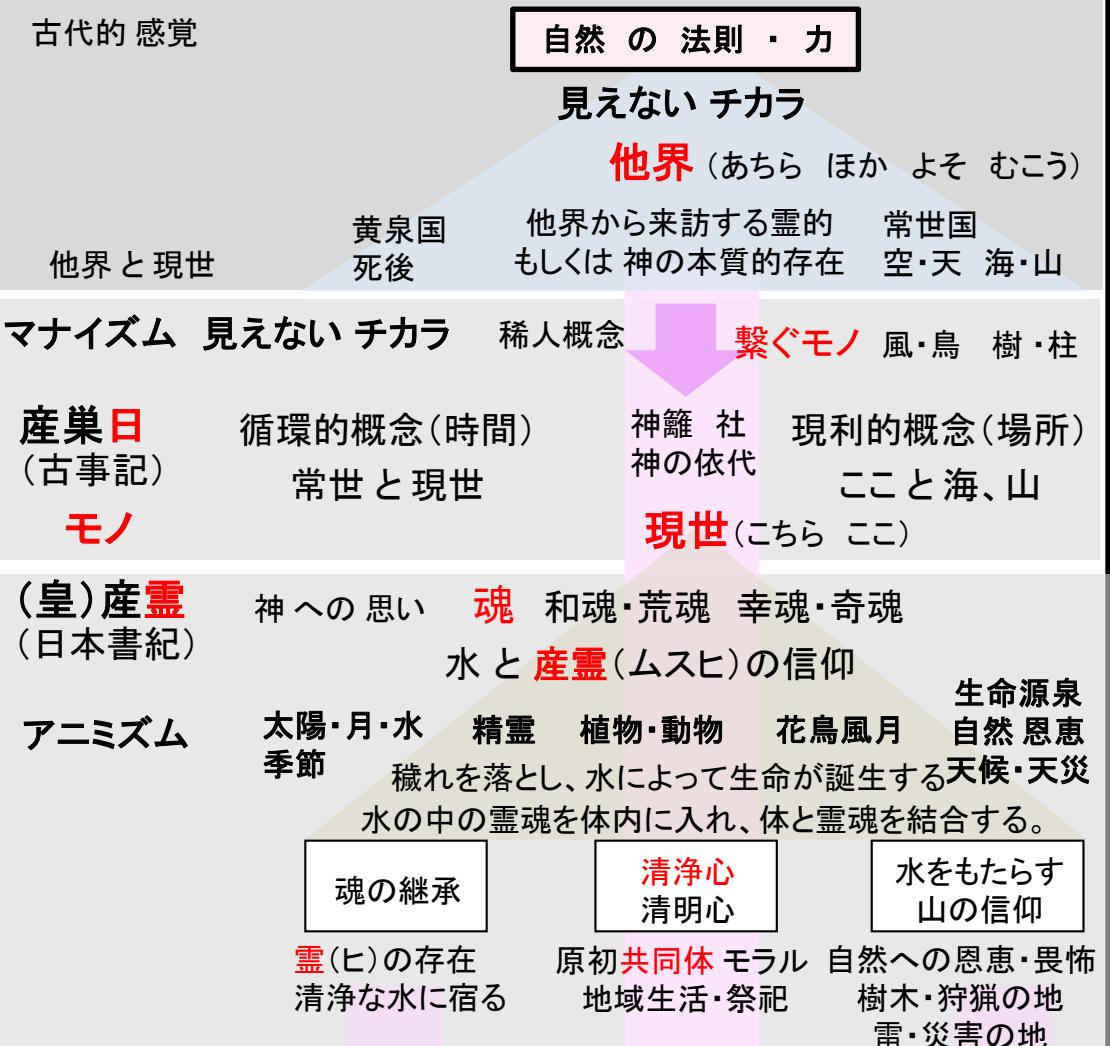
『日本書紀』は、天孫降臨する前の葦原中国について、精霊の活躍する幽暗な(うすくらしい)呪術の世界とする。また、『常陸国風土記』では、先住する体が蛇で頭に角がある「夜刀の神」と、西方から進出してきた稲作の水田開墾者とが交渉し「夜刀の神」を祀ることで決着する。大和の三輪山では蛇神が祭られ、豪族の娘と結ばれて三輪氏の祖となる。その神は『日本書紀』ではスサノオの子の大物主神とされ、平安時代の始めには「名神大社」の一つとなって五穀豊穡をもたらす「農耕神」として国家から奉幣された。これらが、「カミ」として描いた古代の感覚である。

『日本書紀』一書曰、天忍穗根尊、娶高皇産靈尊女子栲幡千千姫萬幡姫命・亦云高皇産靈尊兒火之戸幡姫兒千千姫命、而生兒天火明命、次生天津彦根火瓊瓊杵根尊。其天火明命兒天香山、是尾張連等遠祖也。及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇産靈尊、勅八十諸神曰「葦原中國者、磐根・木株・草葉、猶能言語(なおよくモノ言う)。夜者若燦火而喧響之(夜はホベのモロコにオトナい)、晝者如五月蠅而沸騰之(昼はサバエナすワキあがる)」云々。

右に本論で紹介する日本文化の構造を提示した。「思想」と、堅い表現となっているが、以下のような「ころ」のことである。

- 「循環思想」 守り伝えるころ  
魂への思い、継承価値 天皇尊厳 時間軸「無常」  
非日常・非合理であり、他界性を内在し情緒的な傾向を持つ
- 「現利思想」 今を大切にころ  
技能・技を極めるころ 政治的には徳治 場所・上下軸「今」  
日常・合理であり、現世性を内在し理論的な傾向を持つ
- 「和合思想」 上記2軸の「間」で、和合、均衡、葛藤 ゆらぐころ  
「国譲 神々和合」「神仏習合」「公武習合」「武家と禪・茶道」  
「義理と人情」「粹」「いき」「花鳥画と水墨画」「赤楽茶碗と黒楽茶碗」などの 間のころ

古代的感覚として  
**他界感覚** … 「見えない世界」との交流 自然の中に見えないチカラ、存在を感じる ころ  
場所として、空・天 海・山から来る「隠身」(神) を感じるころ 繋ぐもの: 依代「神籬・御諸・社」  
そして時間軸である、前世や死後の世界を含め、それらを習合した他界感覚  
**水と産霊の信仰** … 「万物自然に対し、感じるころ」  
霊す(ムス) 霊(ヒ)、生命が誕生する水、それらに共通する「穢と禊」、清浄心・清明心  
以上の重層する感覚を基礎に、形成されてきた「ころの表現」として、「日本文化の原理」とする。



現代の日本語に、大きく影響した漢字。漢字から誕生した「平仮名」と「片仮名」の成立過程をまとめた。

主たる参考著書 『かな』 小松茂美 著 『万葉仮名でよむ万葉集』 石川九楊 著 『日本文学の歴史』 ドナルド・キーン 著

「漢字」そのものの継承、言葉の表現としての「平仮名」、実用的な記号を起源とする「片仮名」。それぞれに、日本文化の特性が顕れた意味がある。「日本文化の原理」の検証を兼ねて、整理し、図解した。上記著書『かな』の要旨を、下に纏めた。平がなは、漢字原型を大きく削除することなく、かつ柔軟に崩した。そして、消息や和歌の世界で重用された。その造型は、「公式文書の漢字」と「実用的な略字である片かな」の中間に位置し、多分に会話的かつ情緒的で、書に心情を表す。継承的な漢字、実用的な片かなの中庸で「漢字かな交じり文」において、活用語尾、接続詞、感動詞、助詞、助動詞に使われ、文章全体をまとめ、意思や感情を表現する。

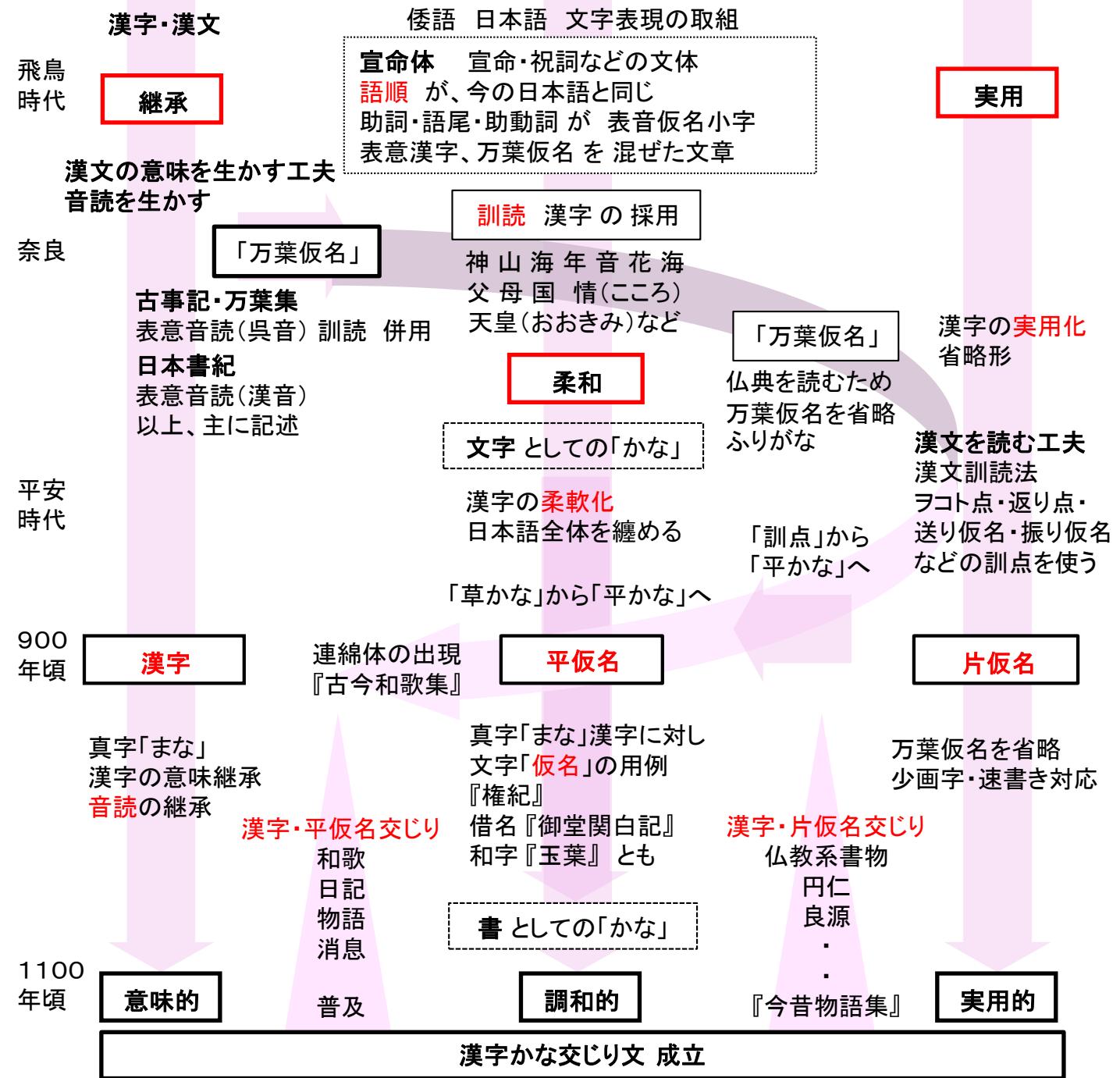
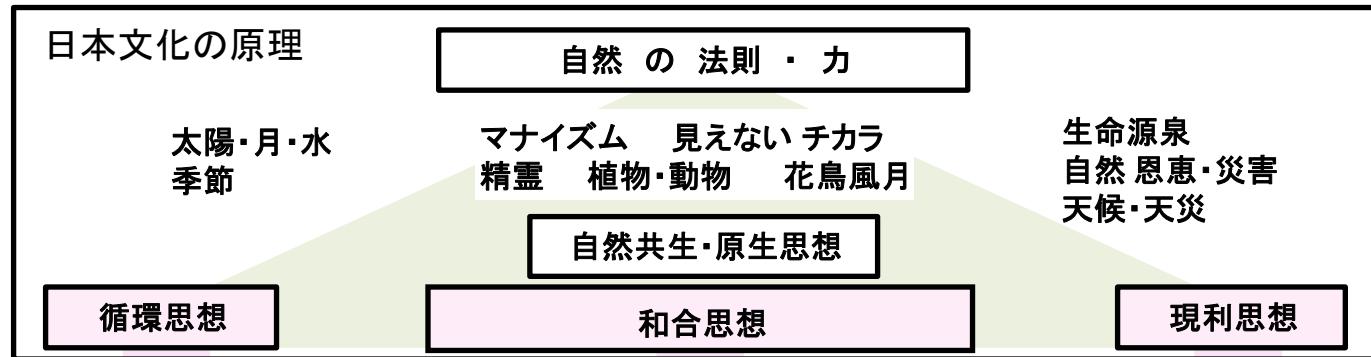
わが上代人は、漢字の音を借りて日本語の音にあて、文章を書くことを工夫した。「万葉がな」である。奈良時代、日本語の音一つに対して数種の漢字をあてはめ、記紀・万葉集を通じて、全973文字から始まった。

一方、書体としては、中国から、篆書、隸書、楷書、草書などが渡来していた。平がなは「万葉がな」を起源に、日常生活で文字を速く書くため、必然的に画を省略した草書の体が応用され、生まれた草がなを、その起源とする。『宇津保物語』に記される様に、平安時代には、草かなが、さらにくずされ「女手」が生まれた。和歌の復活繁栄と、書道の発展が相補って、より美しく、よりやさしい簡略な形へと進んでいった。別に、草かなから平がなへの移行をしめすものとして訓点がある。これは、漢文を読むために使われた、片かなの中にまじって見られる草かなに近い形のかなである。つまり、草かなから生まれた女手を主流とし、訓点からの影響も交えて、今日の平かなが誕生した。醍醐天皇延喜5年(905)紀貫之ら撰『古今和歌集』の序文までが、すべて平がなで書かれた。奈良から平安時代初期までは、「文字としてのかな」に限られ、それ以降は、「書としてのかな」が主流になっていく。その時代、平がなは、日常の消息(手紙・たより)やそれに付随する贈答の和歌などにおいて、自然に発達していった。一音に対して使用されるかな字体は、平安末期、合計約300文字となり、鎌倉・室町時代、かなが書としての「型」に変貌し、同時にその字体としての「型」も淘汰限定されていった。伏見天皇皇子で青蓮院座主尊円入道親王を祖とする尊円流(青蓮院流)を、松花堂昭乗が江戸幕府に伝え公用書体となる。この書体は御家流とも呼ばれ、庶民教育にも手習手本、文学書が出版され、かなの字体統一を促進した。現代の47文字は、明治時代中期に統一されたが、この統一までの1200年間のかなを「変体がな」と呼ぶ。

片かなの起こりも、また、平がなと同様に「万葉がな」である。平がなが漢字の一字全体をやわらかい線にくずしたものであるのに対し、片かなは、主として、漢字の一部をとって簡略化したもので、実用から生まれた。443年頃製作と推定されている和歌山橋本の隅田八幡神社伝来の「人物画像鏡」に、銅を「同」、鏡を「竟」とする略体字の例がある。略体字は、中国にもあるが、平がな同様に日本独自に省略形を作り上げた。同鏡には、忍坂宮を「意柴沙加宮」と書いているが、日本語の固有名詞を一字一音表記した初期事例でもある。正倉院文書に、村を「寸」、牟を「ム」、のち仏典の醍醐を「酉酉」、瑠璃を「王王」など、早書きや反復文字の省略による省文(せいぶん)省字(せいじ)が用いられた。これは、一時的な利用だが、この省文から暗示を受け工夫されたものが、片かなである。平安時代初期、奈良の古宗派(華嚴・法相・三論など)僧侶が、仏典講義を聞きながら、訓読を覚えるために、行間、字間に、万葉仮名を省略してふりがなのように書き入れた。小さく、字画が少なく早書きできるものとして、片かなが誕生した。そして、平がな同様に、当初の字体繁雑、不統一から同様な経緯で今日の形になった。

日本文化の特性 基本原理の体系より

漢字・平仮名・片仮名は、それぞれ 日本文化の三要素として各思想と一致し、本原理を裏付ける



**鮓** すし『国史大辞典』 … 魚、塩、酒、米、酢、醤油 との関係

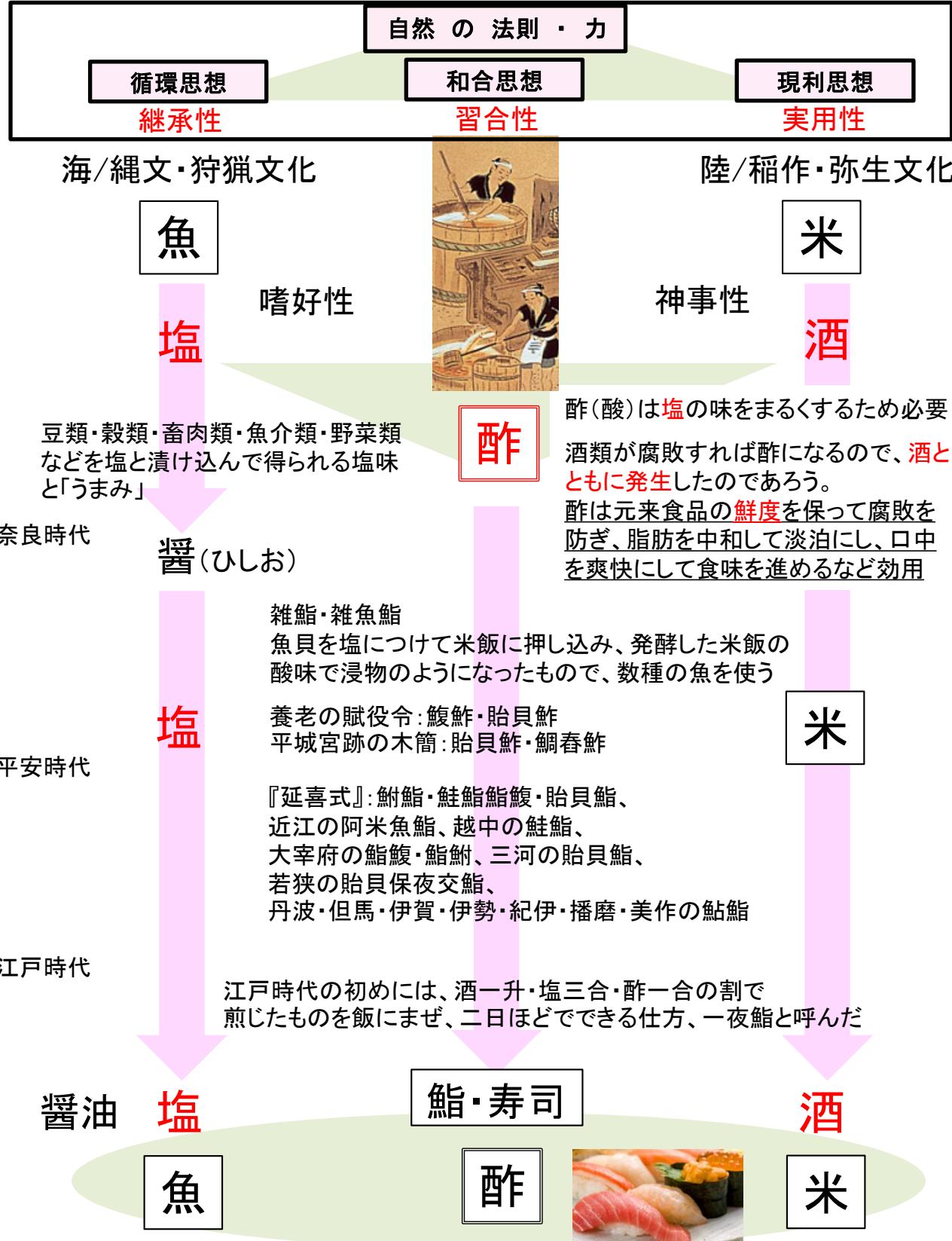
和食の代表である鮓、寿司は上方が発祥だが江戸前で「粹(いき)」となり全国に還流した。

「鮓の文化的構造」は、その狩猟・漁労文化の魚・塩と、稲作文化の米・酒を両軸に、酒が発酵(腐敗)した酢によって塩味が和らげられ全体をまとめている。まさに和の調和構造である。

鮓などとも書く。中国の古代に蜀の人は、魚の鱗をとらず、臓物を取り出し、**塩**をして、なかに飯と酒を交ぜたものを詰め、重しをして発酵させたと伝え、そのような調理は、早くから伝わっていたと思われ、天平六年(七三四)の『尾張国正税帳』、同九年の『但馬国正税帳』や養老の賦役令には雑鮓が記され、また天平六年の『尾張国正税帳』には白貝内鮓、養老の賦役令には鮓鮓・鮓鮓、平城宮跡の木簡にも鮓鮓・鮓鮓の名がみえ、奈良時代にはかなり魚貝の鮓が作られている。そして『延喜式』によると中男作物として鮓鮓・鮓鮓、神今食料に鮓鮓、諸国の調として鮓鮓などが納められ、近江の阿米魚鮓、越中の鮓鮓、大宰府の鮓鮓・鮓鮓、三河の鮓鮓、若狭の鮓鮓保夜交鮓、丹波・但馬・伊賀・伊勢・紀伊・播磨・美作の鮓鮓などもみえている。これらの鮓はいわゆる飯鮓(いづし)とは違い、魚貝を塩につけて米飯に押し込み、発酵した米飯の酸味で浸物のようになったもので、数種の魚を使うのを雑鮓や雑魚鮓といった。奈良・平安時代には輸送の便も十分でなかったから、鮓鮓や楚割(すわやり)のような加工品とともに鮓の需要は多く、生物(なまもの)として公家の食膳に供され、『土佐日記』には「ほやのつまのいづし(鮓鮓保夜交鮓か)、すしあはび」、『今昔物語集』にも「魚ノ鮓」などとみえ、大切な料理として全国で作られている。『沙石集』には鮓鮓にかかわる話が語られ、長享三年(一四八九)の奥書がある『四条流庖丁書』にも鮓について記され、中世も同様で、室町時代の女房言葉で「すもじ」といい、鮓の腸や子などは品が下がるが、季節初めの品ならば良いなどと、鮓の調理にも方式があったわけで、やがて本膳料理に鮓鮓や鮓鮓が、生の魚貝と並べて出された例も少なくない。このような鮓は飯鮓が作られた近世にも続き、大津の鮓鮓などは今日まで残されている。

江戸時代の初めには、酒一升・塩三合・酢一合の割で煎じたものを飯にまぜ、二日ほどでできる仕方があって、一夜鮓と呼んでいる。寛永ごろには山城の六条飯鮓(いづし)や大和の奈良飯鮓などが有名で、六条飯鮓は押鮓の作り方に似ていたが、形は握鮓と同じようであった。『守貞漫稿』(『近世風俗志』)には、三都とも押鮓であったが、江戸時代の中ごろまでに江戸では筥鮓がすたれ、握鮓だけになったとみえ、卵焼・鮓・鮓・鮓・鮓・穴子・白魚・小鱈・干瓢などを使うといい、また京坂の筥鮓の作り方を述べて、主に卵焼・鮓・鮓を薄く切ったのせた柿鮓と鳥貝の一種をおく魚貝鮓、飯のなかに椎茸と独活(うど)を入れる巻鮓を説明している。さらに京坂では梅酢に漬けた紅生姜、江戸では酢漬の新生蓼や姫蓼を添え、笹折に詰めるとき、葉蘭を使うのと熊笹をのせるのと、上方と江戸の違いはあっても、ほぼ今日のような鮓は、江戸時代の後半に整い、毛拔鮓・稲荷鮓などもあった。宝暦ごろ江戸では、丸く浅い桶に薄い紙で傘形の蓋をし、鮓・鮓の鮓を売り歩く者があり、重ね箱や御膳籠を荷う者も現われ、一方大坂では魚を横に切り、もとの形に並べる早鮓があり、(みさご)が海岸の岩陰に貯える小魚のみさご鮓は、江戸時代の珍味の一つであった。

国史大辞典 [参考文献]『古事類苑』飲食部、関根真隆『奈良朝食生活の研究』  
「**寿司**」という表記は、縁起をかついだ江戸時代以降の当て字 日本国語大辞典 浮雲[1887~89]〈二葉亭四迷〉  
「如何(いかが)な真似をした上句(あげく)、寿司(スシ)などを取寄せて奢散らす」



**酢の産業化** 今の愛知県半田村、中野又左衛門は、江戸で当時流行のきざしを見せはじめた“すし”に出あう。それは現在の“握りずし”の原型となった“半熟れ”と呼ばれるもので、“熟れずし”から“早ずし”へ移行する中間のすし。元々の“すし”は塩漬けにした魚を米飯に漬け、乳酸発酵させる熟れずしであり、一年以上かけて作っていた。一方、酢を一部加えて発酵を早めた押しずし<sup>1</sup>の一種が“半熟れずし”である。江戸での大量需要を見込んで、酒造業のかたわら酒粕を原料とした“粕酢”の製造をはじめ、1804年(文化元年)本格的な酢造りをスタートさせる。

原理を仮説し、信仰・文化の歴史を辿っている。その過程で「循環的なもの」と「現利的なもの」との間で「均衡作用」があることに気付いた。

仏教では、阿弥陀如来に対する薬師如来や観音菩薩。また、天台智顛の「三諦円融」空仮中の均衡は、それを受け入れることで浄土信仰や禅・日蓮誕生の土壌となった。闘争する武家に対して、静寂なる茶道や禅。茶道は、武家など日常に対する非日常を均衡させる作用。絵画では花鳥画に対する水墨画で均衡した。その均衡をもたらした源が自然の法則・力を潜在する日本文化であり、和合的な現象として現れたと考える。神仏習合はその代表であり、戦う神と鎮魂の仏である。

古事記、古代から中世まで日本文化の原理を仮説・検証してきたが、改めて逆に「均衡」を意識して古事記をふりかえると、「天之御中主神」と「月読命」がその作用で共通していることに気がつく。両者は同時に誕生した活動的な他の二者の間で、無作為な力・作用である「均衡」を象徴しているのではないか。「天之御中主神」と「月読命」、そして、火照命(海幸彦)を兄に火遠理命(山幸彦)を弟に持つ「火須勢理命(ほすせりのみこと)」も同様で、いずれも天津神・国津神ではなく、ただ存在を記される。

冒頭に提起した「天之御中主神」の意味、それは、自然の法則・力と考えた。なぜなら、そのあとに誕生した「高御産巢日神」は別名「高木神」、神の依ります神籬(神体木)、天地を繋ぐもの出雲大社、伊勢神宮の心御柱に表現される。そして、「神産巢日神」は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を蘇らせる循環再生を表す。この神代再生は、世代・時間の継承を表現している。つまり、その頂天に語られる「天之御中主神」は、「場所」と「時間」の概念で、それぞれ「高御産巢日神」と「神産巢日神」とに繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考えた。その解釈は誤りではなかったが、その「自然の法則・力」がもたらした具体的な力、すなわち「均衡作用」とも言える。

とすれば、古事記の「月読命」の意味は何か？ その神も同じ作用をもたらし、国譲りを演出したと考える。天照大御神に象徴される「太陽」と建速須佐之男命の「大地」、昼間の太陽は大地を熱する。しかし、特に晴れた夜には、放射冷却で大地は逆によく冷える。太陽と大地の熱循環(交流)作用が高まっている状態だ。その晴れた夜には「月」がよく見える。太陽と大地の好循環は月の作用と考えたに違いない。自然に敏感で稲作など農耕が主な生活では、ごく自然な発想、信仰と考える。

「国譲り」の主体は大国主とその代理者や天照大御神に派遣された者たちだが、その前に月読命を登場させた意味は、「国譲り」の予言、伏線であろう。二者択一ではなく二者均衡の支点と考える。その存在は、いわゆる二極の「間」と表現したら理解しやすいかもしれない。

自然の法則・力から誕生した和合の神格が、「天之御中主神」であり、「月読命」である。では、その神話の基本思想は誰のものか？ 記紀編纂を勅命した人、武力で皇位についた天武天皇は語りづらい。最終的な編集者、藤原不比等にとっては、祖神の活躍が最重要であった。

その思想の草案者は、やはり「和」の思想家、聖徳太子と考える。古事記の神話部分などは「国記」を反映しただろう、そして十七条憲法とは、均衡させる作用、和合思想で結びつく。京都の月読神社は、顕宗3年(487)、阿閉臣事代(あへのおみことしろ)が朝鮮任那渡航の際、壱岐から分霊した元来は海神である。現在は秦氏松尾大社の摂社で、その境内に聖徳太子を祀る社がある。月読神社によると、太子は月読神を崇敬したとされ、ここに祀られていることがその証である。また、その仮定だと、聖徳太子以前に鏡威信が天照大御神の様な固有名詞で信仰化されていたことになる。

日本書紀は、推古28(620)年 推古天皇、聖徳太子による歴史書、「天皇記」「国記」「臣・連・伴造・国造百八十部等の本記」が編纂されたと記す。それら書物は、皇極5年(645)乙巳の変の際に、蘇我蝦夷の家とともに燃やされ、船恵尺(ふなのえさか)により「国記」のみ取り出されて残ったと記録する。船恵尺の子供が道昭で、入唐し玄奘と同じ房に住して学問し、招来した法相宗は奈良時代に栄えた。「国記」編纂の約100年後、712年「古事記」が、720年には「日本書紀」が撰上された。

本論構築後に分かったが、ユング心理学の権威で元文化庁長官の河合隼雄先生『中空構造 日本の深層』でこの無為な中央にのみ注目されている。しかし日本文化の理解にとっての重要は、両極の思想軸の発見認識である。同著者『神話と日本人のこころ』あとがきにある「開かれたアイデンティティー」の理解や発展に繋がる。



「和合思想」は、「日本文化の原理」の中心にあり、「心御柱」である。「自然の法則・力」を背景に、「循環思想」と「現利思想」の調整・均衡を保ち、新たな「創造」を生みだす力。

負の反応 怨霊・地獄 排他・排斥 村・族 統制排除 一揆

飛鳥は、今日まで続く**仏教の日本的解釈、活用と、そして国防・国家意識発祥の時代**である。崇峻天皇5年(592年)推古天皇即位、飛鳥豊浦宮から元明天皇期の和銅3年(710年)までを示す。その前は、古代から続く神への信仰を背景にした**首長権威の時代**であった。箸墓古墳、神功皇后、応神天皇から始まる大和の首長を、大型古墳として表現した約350年間。のちに記紀では、冒頭で神話とつながり、史実に変化していく神の時代である。また中国や朝鮮半島の戦乱の関係で多くの渡来人を受け入れ、後期には継体天皇の皇子、欽明天皇の時に**仏教が公伝**した。飛鳥の次は、平城京、一般には奈良時代。元明天皇から桓武天皇の遷都までの間、**仏教と国家制度としての律令政治**が、我が国の内部で変化を始める。**神仏習合**と土地所有についての**墾田永年私財法**である。平安京において、「神仏習合」は神像、特に神社建築に影響、「墾田永年私財法」は荘園の拡大に繋がり、律令制度の崩壊や貴族と武家の勢力交代にまで遠因する。

古墳と奈良時代の狭間にある**飛鳥時代**は、白村江での大敗を経験し、危機意識からも国家としての内制を整える時である。そして、**神仏共存の模索の時**である。この時代、まず神の坐す場所や祀る者が整えられた。日本書紀は、齊明天皇5(659)年、出雲国造に命じて「神之宮」を修造させた、と記す。天武天皇期には、伊勢神宮の齋宮を制度化した(壬申の乱の戦勝祈願の礼『扶桑略記』)、以後、南北朝時代まで続く。また上賀茂神社造営も天武天皇7(678)年である。では**仏教、仏についてはどうか**？

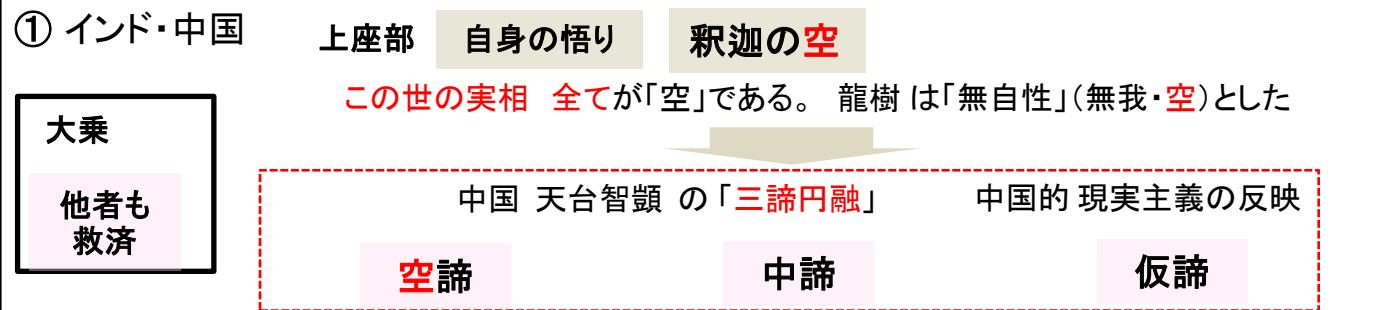
本来、仏教はこの世において、苦から脱却する修業、悟りをとく教えである。その延長に、煩惱を克服した先の浄土という夢を説いた。浄土への注目も、仏教がインドから中国に伝わったあとのこと。だが、それは、**自分自身がおこなう「空」の認識、そして「自分で観想する浄土」**であった。ここで**重要なこと**は、我が国で根付いた「他者の鎮魂」「自らの氏寺、先祖供養」とは違うということである。500年代中頃とされる公伝から間もない日本、飛鳥時代の仏教において、「自分で観想する浄土」から、「他者の鎮魂」「自らの氏寺、先祖供養」に拡大、定着する。そして仏教としての「先祖供養」は江戸時代の檀家制度から民衆に普及し、現代に伝わる「**仏壇**」にまで繋がる。平安時代の貴族の持仏堂や、室町時代、浄土真宗の蓮如が布教で配布した「南无阿弥陀仏」の掛軸も、仏壇普及の起源とされる。自ら関与した死者には「**鎮魂**」、病などで倒れた身内には「(回復祈願) **供養鎮魂**」を求める思い。この信仰、思想こそ、**日本的な仏教解釈**の変容、拡大である。

それは何がもたらしたか？ それまでの神、自然の精霊、祖霊・皇祖霊の殯(モガリ)、穢・禊、魂振など魂の「**循環思想**」だと考える。神における皇祖神、氏神の思い、信仰が、仏にも氏寺を誕生させる。その背景には、**神の変遷**がある。農耕・漁撈・狩猟に関わる田の神、そして祭司、支配のための神、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、争乱から誕生した宇佐の八幡神。**戦いの神**への変遷・拡大である。その戦う神が誕生した時、神の概念は自然世界を前提とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。(古墳時代、熊襲・三韓征討伝承の神功皇后、戦勝祈願、710年隼人の乱)「東大寺」創建の前、749年に大仏鑄造が完成し、宇佐から**八幡神**を勧請「東大寺」の鎮守社として「手向山八幡宮」が創建された。その南都教学と神仏習合発祥の時代、752年、**聖武天皇・光明皇后が東大寺の大仏(盧舎那仏)開眼供養**。天平宝字2年(758)に、竣工した。777年、八幡神は神で初めて出家し、八幡大菩薩となる。

(他者の)「(怨霊)鎮魂」については、物部守屋死後の四天王寺、聖徳太子の死後に再建された法隆寺がある。蘇我倉山田石川麻呂の死後に完成した山田寺も天智天皇2年(663)塔の建設開始され、同様に「怨霊鎮魂」だが、孫の持統天皇による「**供養鎮魂**」の意義もある。別名も「浄土寺」とされる。これらはいずれも「(怨霊)鎮魂」草創期の寺院である。宇佐八幡などの神宮寺に繋がる。「自らの氏寺、先祖供養」は、蘇我氏の「法興寺」(のちの飛鳥寺)から始まり、宗派の本山などは別として、しだいにこの目的が寺院創建の主になっていく。京都「**広隆寺**」も同様である。『書紀』によれば、推古天皇11年(603年)聖徳太子拝領の仏像を拝みたまつるため、『**広隆寺縁起**』広隆寺資財交替実録帳縁起では、推古天皇30年(622年)同年「死去した聖徳太子**供養**のために、秦河勝が「蜂岡寺」として建立された」ともあるが、秦氏の氏寺となった。天智天皇も、母**齊明天皇の鎮魂供養**のため、668年「崇福寺」、670年頃の「川原寺」、そして671年までに大宰府の「**観世音寺**」を建立発願したとされる。「山階寺」は、本来、神事・祭祀を司る中臣氏、その鎌足の病に際し、669年夫人が建立した。天武天皇元年(672年)藤原京に移り、地名から厩坂寺に、平城京では法相宗「**興福寺**」、藤原氏の氏寺となる。藤原氏の仏教支配の起源となる寺院は、この飛鳥時代に起源する。また、当麻氏氏寺の「**當麻寺**」がある。白鳳14年(685)、**天武天皇**が「諸国の家毎に**仏舎**(ほとけのおおとの)を作り、乃ち仏像(ほとけのみかた)及び経を置きて以て**礼拝供養**せよ」との詔を出した。今の「**仏壇**」草創起源となる。

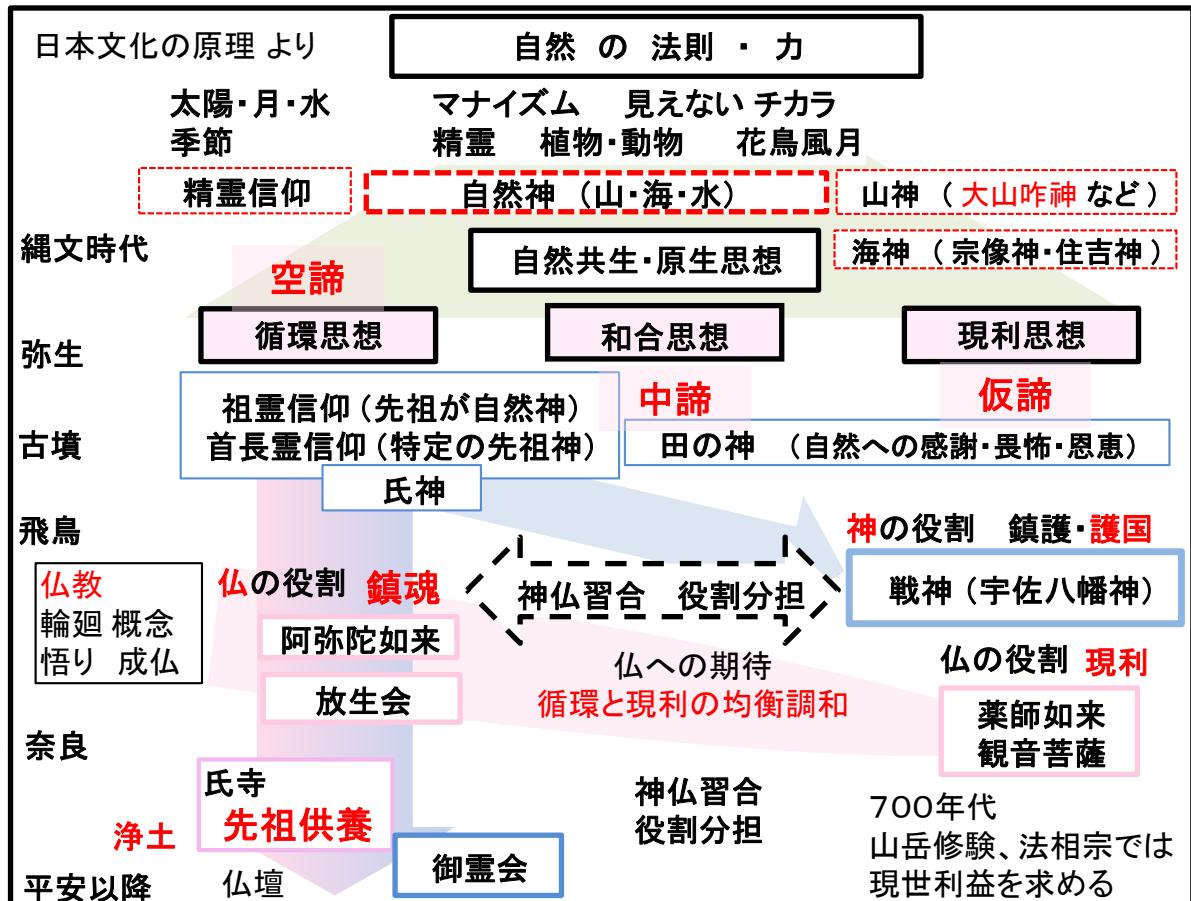
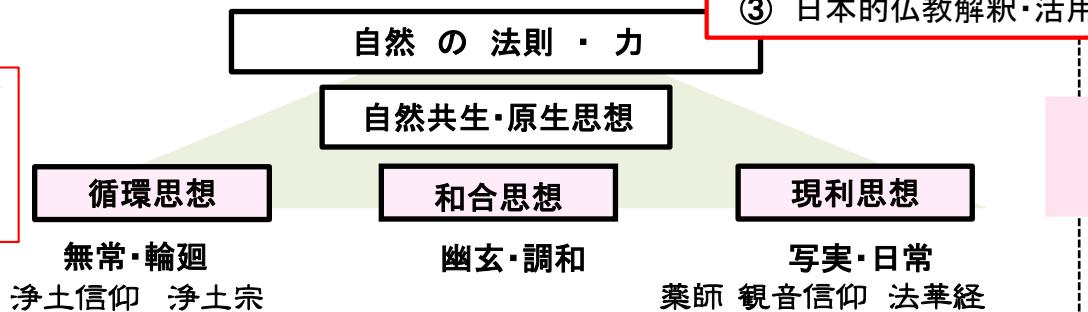
日本では、釈迦の、この世全てが「**空**」であるとする仏教元来の思想より、**天台智顛「三諦円融」の現実的思想の方が適合した**。その結果、仏教が定着、神仏習合した。空海の真言密教、浄土宗の口称念仏、日蓮宗の立正安国論、町衆の法華門徒が誕生した理由でもある。

仏教思想の整理



② 日本での適合

智顛の説を受け継ぎ法華経を中心としつつ、禪や戒、念仏、密教も要素とした。



仮説「日本文化の特性 基本原理」を、縄文、弥生から古墳時代までの歴史を辿りながら、成立過程とその傾向をみてきた。以下、簡単に整理する。

古代日本で、自然は、狩猟の山麓、稲作の水など、現実の生活に「恩恵・現世利益」をもたらし、一方では猛威を振るう「畏怖」の対象となった。そこに魂を感じ、木、草、山、川、岩、嵐、雷などを対象に「自然信仰、自然の法則・力」を感じた。その価値観が古事記で神々の有り様に描かれている。「神山」、「神奈備 磐座」などの存在も、その地域の「現世利益」を願う「自然信仰」の証である。その信仰の発祥理由を、「国土の立地・地形」と「気候」、そこからもたらされる「自然環境」にあると考えた。「列島を取り巻く環境がもたらす山からの恩恵」である。暖流が温暖と、豊富な雨量をもたらす、森林を育む。そして山の水が川となり下流に集まる。その水は森が生んだ栄養含み、川や沿岸を、貝や魚の良き生き場とする。縄文時代においては、その多くの河川、山麓環境で採種・漁撈を分かち合った。それは、気候が一定の範囲で定まると、安定かつ豊富な自然を循環させるからである。西欧と比較し明らかに生活環境は異なる。大陸から離れている列島は、その中でも多様な気候と、断続的な人々や文化の渡来、防御の役割となる。

縄文から弥生時代への移行では、漁撈を共通に、採集に水稻稲作が加わり、次第に稲作が主となる。ここでも大きな混乱はなかった。もともと陸稲の生産効率を改善する水稻であり、先住者の狩猟、漁撈とは棲み分けられた土地活用だからである。漁撈技術にも好影響があったに違いない。また、山、森林からの恩恵を共通、つまり価値観も異ならないからである。同じ価値観は、信仰を違えず、自然の循環サイクルの中で「和合」した。その前提条件は、自然への感謝と畏怖である。「穢れ 禊ぎ・祓え」などの清浄心も自然信仰によると考える。

以下、簡単に、各思想と、その根拠となる関連事項を整理する。重要なことは、いずれも、上部の「自然」や「神」とのかかわりから発祥し、その結果として、これまで 無為、無自覚に、構造的に 組み込まれてきたことである。

「循環思想」は、殯（モガリ）魂振 鎮魂の儀式に残る。その深層度は、神社建築や放生会、御霊会、怨霊への恐れ、行事、仏壇に出現する。モノへの霊性は、唐物から和物など中世の「物数奇」に繋がる。魂の「循環」、「継承」と「根本（原点）」への崇敬に繋がり、皇統・貴族・家系や、工芸・芸道など伝統文化への高い価値感を生む。

「和合思想」については、重要であり、多くの事例、仮説を提示した。漁撈から出雲文化の継承は、銅鐸の編み紋様や、大社の亀甲紋に残る。出雲と神武天皇の名の勢力交渉は、「国譲り」として その状況を詳しく語られている。現代に残る多くの出雲祭神の神社が、その交渉の結果、和合を裏付ける。出雲系姫たち母系や「天照國照彦天火明命」の名にも、その手掛かりを探した。鏡威信勢力については、神武天皇と崇神天皇を、それぞれ内行花紋鏡と画紋帯神獸鏡に仮説比定し、その鏡の合祀埋葬に和合を見た。それらの和合は、伊勢神宮の構成である、内宮の天照大御神と外宮の豊受大御神によって象徴され、今日も多く多くの参拝を迎えている。

「現利思想」で、神への願い、信仰の変遷を追った。農耕・漁撈・狩猟に関わる神、田の神、そして祭司、支配のための神、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、争乱から誕生した神が、宇佐の八幡神。戦いの神への変遷・拡大である。その戦う神が誕生した時、神の概念は、自然世界を前提とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。

以上が、我が国、自然なる 古代生活から誕生した「神」への信仰である。同時にそれは、日本文化の基礎部分として、「日本文化の原理」が、歴史とともに徐々に骨格されてきた時代である。このあと、古墳時代、仏教・儒教の公伝以降の歴史となる。

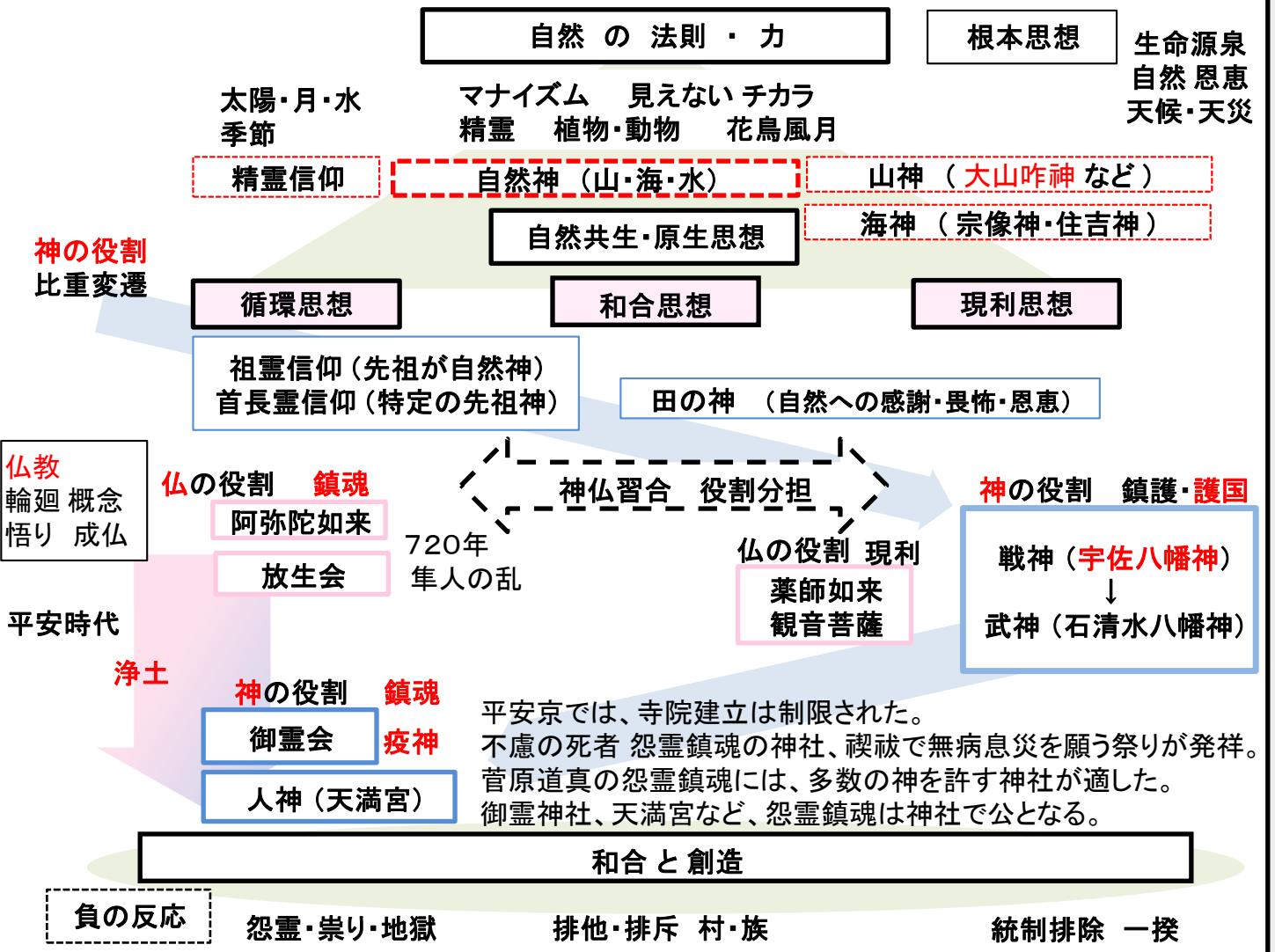
基本原理と整合しながら、人々の願いに応じて 神仏儒教 が 役割分担していく。そして「和合と創造」の産物 が 誕生してゆく。

その自然循環は、天地の柱、生死の「循環思想」をもたらした。のちの仏教伝来「彼岸と此岸」「浄土信仰」が、我が国で根付いた理由でもある。

信仰の遺跡として天と繋ぐ柱、魂の再生思考は、環状列石（ストーンサークル）環状土籬（周提墓）環状木柱列（ウッドサークル）古事記「伊邪那岐命と伊邪那美命」の於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿「円+柱」「村・大地」そして「山」「神奈備山」へと広がったのではないか。諏訪大社の御柱祭 出雲大社の心御柱、伊勢神宮心御柱はそんな縄文祭祀の名残りである。

土偶埋葬も再生信仰の表れと考える。死産児の遺骨を、住居近辺のトイレや玄関など、女性がよくまたぐ場所に埋葬して再生を願う、近年まで残った風習である。四季を持つ「日本の森」があつて初めて生まれた言葉、自然の音を捉えた擬音、日本特有の「擬態語・擬音語・擬声語」、「言霊（ことだま）」という思想がある。本来「モノ」に対する心情は、そこに非人格的なチカラが宿るとするマナイズムである。モノづくりの場において、その「モノ」に魂を吹き込むという日本人の特性に、「マナ」という心根の継承がある。日本では「モノ」という言葉に、物質以外の要素を詰め込んできた。「物思い・物語・物静か・物の怪・物のあわれ・物忌み…」と、物質以外のモノは多い。語源的にも「マナ」と「モノ」とは共通性がある。そして、「モノ」のやりとり、交易をもたらす人々を、マレビト（稀れ人）=まろうど（客人）と呼び、手厚くもてなした。「渡来文化」への高い価値観、憧憬になる。

日本文化の特性 基本原理の体系より



自然の法則・力

根本思想

生命源泉  
自然恩恵  
天候・天災

太陽・月・水  
季節

マナイズム 見えないチカラ  
精霊 植物・動物 花鳥風月

精霊信仰

自然神 (山・海・水)

山神 (大山咋神など)

自然共生・原生思想

海神 (宗像神・住吉神)

神の役割  
比重変遷

循環思想

和合思想

現利思想

祖霊信仰 (先祖が自然神)  
首長霊信仰 (特定の先祖神)

田の神 (自然への感謝・畏怖・恩恵)

仏教  
輪廻 概念  
悟り 成仏

仏の役割 鎮魂

阿弥陀如来

放生会

720年  
隼人の乱

神仏習合 役割分担

仏の役割 現利

薬師如来  
観音菩薩

神の役割 鎮護・護国

戦神 (宇佐八幡神)

武神 (石清水八幡神)

平安時代

浄土

神の役割 鎮魂

御霊会

疫神

人神 (天満宮)

平安京では、寺院建立は制限された。不慮の死者 怨霊鎮魂の神社、禊祓で無病息災を願う祭りが発祥。菅原道真の怨霊鎮魂には、多数の神を許す神社が適した。御霊神社、天満宮など、怨霊鎮魂は神社で公となる。

和合と創造

負の反応

怨霊・祟り・地獄

排他・排斥 村・族

統制排除 一揆

日本文化「自然の構造」 予告

先達 諸先生 文化論 との 適合 と 総合

The Japan Code

Principle & Origin of Japanese culture

鈴木大拙氏は、69才の1939年「禪と日本文化」(原題 Zen Buddhism and Influence on Japanese Culture「禪仏教と日本文化への影響」)、74才の1944年、「日本的靈性」を著し、1966年、96才で没した。

「禪と日本文化」 禪は、仏陀の精神を直接に見ようと欲する。その精神は、般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思う患わず作用する万物への愛)である。とする。禪で、般若は無明と業に密雲に包まれて、我々の内に睡っている般若を目ざまそうとする。禪は、知性と論理を蔑視し、事物の真髓が把握せられた後に、知識の価値を知る事ができる。禪の考え方は、精神に焦点を置き、形式を無視する。よって、どの様な形式にも存在し、不十分不完全なる事で、精神が顕著になる。形式・慣例・儀礼の否定が精神を浮き彫りにする。無執着である超越的な孤高が、清貧主義、禁慾主義の精神である。孤高は仏教では絶対と解釈され、森羅万象の中に存在する。多くの内外権威者は、禪宗が日本人の性格形成に重要な役割を果たし、日本人の道徳的・修養的・精神的な生活の背景にあるという。以下、個別の文化との関係で禪を説明している。

・「禪と美術」 中国と比較し、我が国民の文化生活への影響が大きい。ただし中国の宋学、絵画に影響し、特に南宋絵画は中国で廃れたが、日本の国宝となる。南宋「一角」と日本「減筆体」の極めて少ない描線・筆触は、禪の精神と一致する。表現される「わび」は、世間的な富・力・名に頼らず貧困、自然であり、禪はそれを親しみ、単純性を味わう精神である。精神を重視するため形式は無視され、不完全となり、そこに古色と原始性が伴うと「さび」となる。知性は均衡を欲するが、本来、日本人が好み文化の特性でもあるそれら「非均衡・非相称・一角・貧乏・単純・さび・わび・孤絶」は、禪の真理「多即一、一即多」の認識、つまり個々の事物を完全と見ると同時に「一」に属する「多」の性質を体現するものとする認識、と一致し、またその認識から生まれる。

・「禪と武士」 禪は、道徳的に首尾一貫の意思・哲学的には生と死の無差別で、武士を支援し、潔い死と関係させる。また、禪修業と戦闘精神を単純・直裁・自恃・克己的で一致。当時、既成仏教が強い京都と違い、鎌倉の地での禪導が可能であったと説明する。

・「禪と剣道」 「刀は武士の魂だ」という言葉に、忠・自己犠牲・尊敬・恩愛および宗教的感情の涵養を見る。大刀と小刀を帯びる鍛錬は、道徳的・精神的な目的で、禪と提携した。沢庵の「無心」や、「無我」や悟りを目指す禅僧と「技を完成させる武者修行」で例える。

・「禪と茶道」 原始的単純性の洗練美化、人為排除自然親和。禪と密接する感情的要素の「和敬清寂」の説明で、聖徳太子によって明文された日本意識である「和」を、我が国の地理環境・温暖気候による固有の心とした。(1935年出版、和辻哲郎 著「風土」が影響か?)

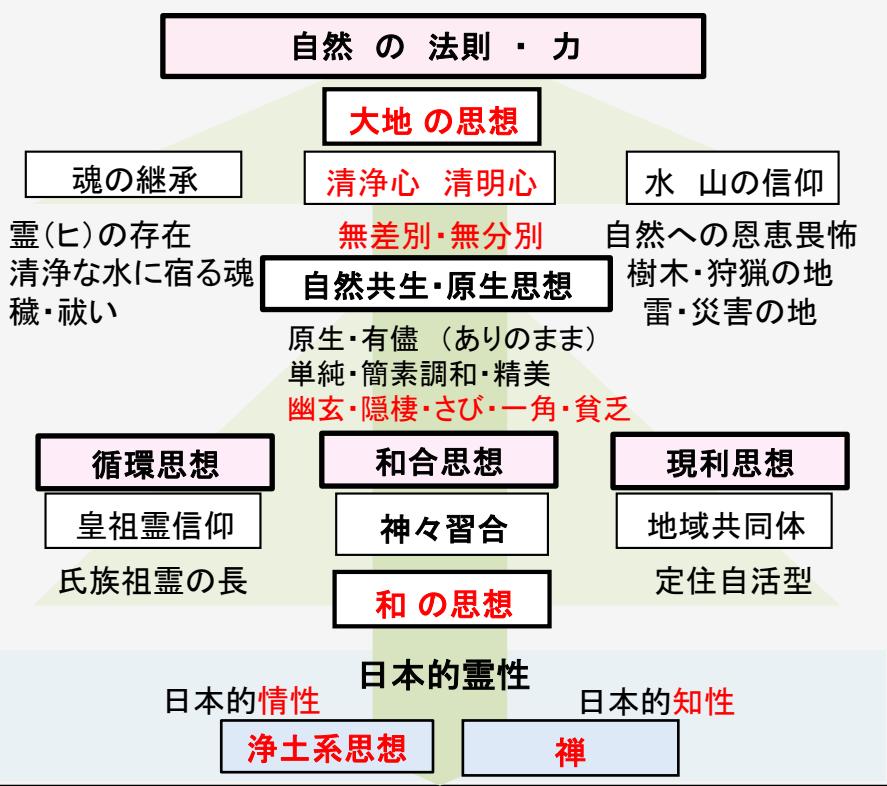
解釈するに、その「靈性」を理解する手掛かりが、上記の「聖徳太子」、そして「大地性」と「修験道」である。【別途詳述】「大地性」とは、大地に関わりの無い生命は無く、親しむべき「愛の大地」とする。人間は大地において自然と人間の交錯を経験する。鎌倉時代は、雲の自然、大地の自然が、日本人をしてその本来のものに還らしめたと言ってよい、と定義を結ぶ。「修験道」について、それまで貴族たち上層部に留まっていた奈良仏教や最澄・空海の真言が、「神道」と抱合を遂げて発展し、それは日本的靈性の外郭に触れた、という。それらに共通する思想が、「万物自然そして人間、また人間同士の一体性と共生和合」である。仏教では、弥陀という名で、万物自然の般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思う患わず作用する万物への愛)を認識し、「禪」で内省的に自覚、「浄土系思想」では称名することで体認する。「修験道」では、自然の中での体認を通じて「大地」を感じる、そこで直覚させるものが日本的靈性ではないだろうか。

著者は、本来内在するも顕在していなかった靈性が、社会的弛緩への反動や外圧により覚醒したとする。その「本来のもの」とは？ また、その発祥理由は？ 他国との比較で説明が必要である。文中の断片を繋ぐと、『靈性は日本精神の明き心、清き心が深層意識に沈潜し、無意識無分別に莫妄想に働く時、靈性が認識せられる。万葉集に歌われる神、清明心には反省無観の機会がおとずれていなかった。「清明心、丹心、正直心、物忌み、穢れ、祓う」は、素朴で原始的な日本の情性であり、伊勢神道は「神道の目覚め」であるが、形而上学的基礎をもたず、「絶対者の絶対悲」を欠くことで、靈性的領域に認めない』とする。執筆当時の戦中神道に筆者は寄りがない心情があり、「伊勢神道」への見解については、直覚性を重視する靈性論理とは矛盾がある。しかし、両部や山王、そして元寇を契機に仏教を意識して発祥した伊勢神道など、広く神道が、明確な主体性に弱く仏教や儒教との相対的思想であることは事実である。一方、筆者は、それらの原始的な日本の情性と靈性発生との関係は否定しない。ここに、我が国独特の地理環境・温暖気候、つまり自然や「大地の思想」を前提に、著者が定義する「靈性」を含む我が国の心情、信仰、思想の一貫性を見出す。原始的な日本の情性が無ければ靈性の覚醒もなかった。つまり、「禪」と「浄土系思想」が、インドや中国で長期かつ国家的に信仰文化として根付かず、我が国では、ここでいう「靈性」という形で顕在した。その源流が「原始的な日本の情性」である。

また、この執筆当時、1939年の社会的・経済的・民族的難題に際し、その美德を守護する「禪による救済」を説いている。「寂」では、快樂と刺激を求める当時の現代生活に対し、教養的享受や根本的再起を提言している。また実業家の早衰に触れ、武士の闘争に対する茶道に、心身爽快と普遍価値想起の効果を見出す。

・「禪と俳句」 改めて日本と仏教との深い関係と、他の仏教と禪の違いを「われわれ自身の存在、実在そのものの秘密を直接に洞察すること」とする。悟りの原則は事物の真理に到達するために概念に頼らぬこととし、西洋人の心理は秩序論理的で、東洋の心理は直感的とする。禪と日本的芸術概念との精神的関係として「妙」つまり日本文学における「幽玄」は、「永遠なる事物の瞥見、実在の秘密への洞徹」として悟りと通ずる。禪の心は、宇宙自然に面し、対象物や特殊存在に興味し、季節に移り変わる自然のできごとに深く関心を持つ。これらの直覚を詩的形式で表現することを俳句とする。日本語の豊かさがこれを実現する。日本人の心の強みは、最深の真理を直覚的につかみ、表象を借りて現実的に(俳句などで)表現することにある、とする。

「日本的靈性」 「禪」と「浄土系思想」が、インドや中国には無い、最も日本的靈性なるもの、とする。「靈性」の定義は、精神や心に包みきれない物(物質)を含み、倫理性を伴う「精神」を超越する「無分別智」である。靈性に目覚めることで初めて宗教がわかる。靈性の直感力は精神より高次元で、靈性に裏付けられた精神の意思力は、不純なものを含む自我を超越し、聖徳太子「以和為貴」の真義に至る。とする。靈性は、民族がある程度の文化段階に進まぬと覚醒せず、日本でそれは鎌倉時代とする。平安時代の貴族、女性文化時代を経て、時勢頹廢が自身存在の反省を促し、蒙古襲来や南宋交流に刺激された武家文化を通じて、日本靈性たる「禪」と「浄土系思想」が民衆に萌芽した。鎌倉時代、越後から関東の「大地性」に触れた親鸞や武家階級が、それら靈性たる思想を生み、政治的側面では日蓮を動かした。ここでいう「浄土系思想」は、末世思想では無く、「純粹他力」と「大悲力」を指す。浄土往生の是非ではなく、弥陀の誓願を信じ、その大悲を、親鸞が「大地」で体認した。また法然から遡り、日本の教主として聖徳太子に進み、自身の靈性が日本的なる所以を意識した。日本的靈性の情性方面に顕現した「浄土系思想」は、個己の方向に超個の人を見る。日本的靈性の知性(概念性)方面に顕現した「禪」は超個の人の方向に個己を見る。その双方は「超個の人でまた個己の一人一人である。この一人一人が超個の人」という自覚で共通した、とする。



「修験道」は、古代の「自然なる信仰」、特に神山信仰を起源とし、飛鳥時代から鎌倉時代に出現した、神仏習合や山岳修行、天台教学や密教などの影響を受け、日本独自に仏教的な神道宗教として成立した。その成立過程と信仰思想的構造を、「日本文化の原理」で、図解した。

「本山修験宗 聖護院門跡」によると、「修験道」は、煩惱で曇る本来の本性(仏性)を、修行で験徳を顕わす業道である。とする。以下引用 編集した。

日本人は昔から山には神々が宿ると信じ山の神を信仰してきた。山岳信仰、**自然崇拜**に源を発した民族信仰を持っている。これは日本の国土が山に覆われ、四季折々に変化する大自然と信仰が結びついていたからである。山自体をご神体(法体)として拝むことに始まり、山の中、つまりご神体の中に入って修行することにより呪術的な験力を得る事を望んだ。また仏教が伝えられると仏教と融和し、**神道・儒教・道教・陰陽道**等をも融合して、**仏教的な神道的色彩の濃い「日本独自の神仏習合・権現信仰の色彩が強い修験道」**が完成されて来た。

修験道では今から約1300年前に誕生された役行者神変大菩薩を開祖と仰ぎ、聖護院では平安期の高僧、第5代天台座主智證大師圓珍を中興の祖と呼んでいる。修験道は山岳崇拜の精神を基とし、厳しい山々で修行し、困苦を忍び、心身を修練し、悟りを開いて仏果を得る、という出家在家を問わない菩薩道、**即身即仏を実修する日本古来の宗教**である。

人は本来、仏様と同じ本性(仏性)を持っている。ところが煩惱という迷いの中で悪い事を行ってしまい、本性を曇らせている。修行してこの曇りを磨き、悪から離れて**清らかな本心**を発揮する。そして**「法の徳を顕わす」**ことが修験の意味で、これを実践する人を「**修験者**」と言う。修験十二箇条に、「凡ソ修験ト称シ候ハ、実行ヲ修シ験法コレヲ成スル之義也」秘訣集に、「修トハ修生始覚ノ修行、験トハ本有本覚ノ験道ナリ」とある。

修行とは、「**毎日の生活が則ち修行である**」ということに気づき行動する事。経典は主として、**法華経**(妙法蓮華経)・不動経(稽首聖無動大威怒王秘密陀羅尼経)・般若経、錫杖経(得道梯橙錫杖経)を読む。しかし天台宗の影響を受け、法華懺法や例時作法(阿弥陀経)も日課とする。修験道の思想からすると、宇宙一切の事象や音声は、皆「**法身の顕れ**」である、ありとあらゆる全て経でないものはない。とする。

**鈴木大拙**先生は『日本の靈性』の中で、「修験道」について、それまで貴族たち上層部に留まっていた奈良仏教や最澄・空海の真言が、「神道」と抱合を遂げて発展し、それは日本の靈性の外郭に触れた、という。

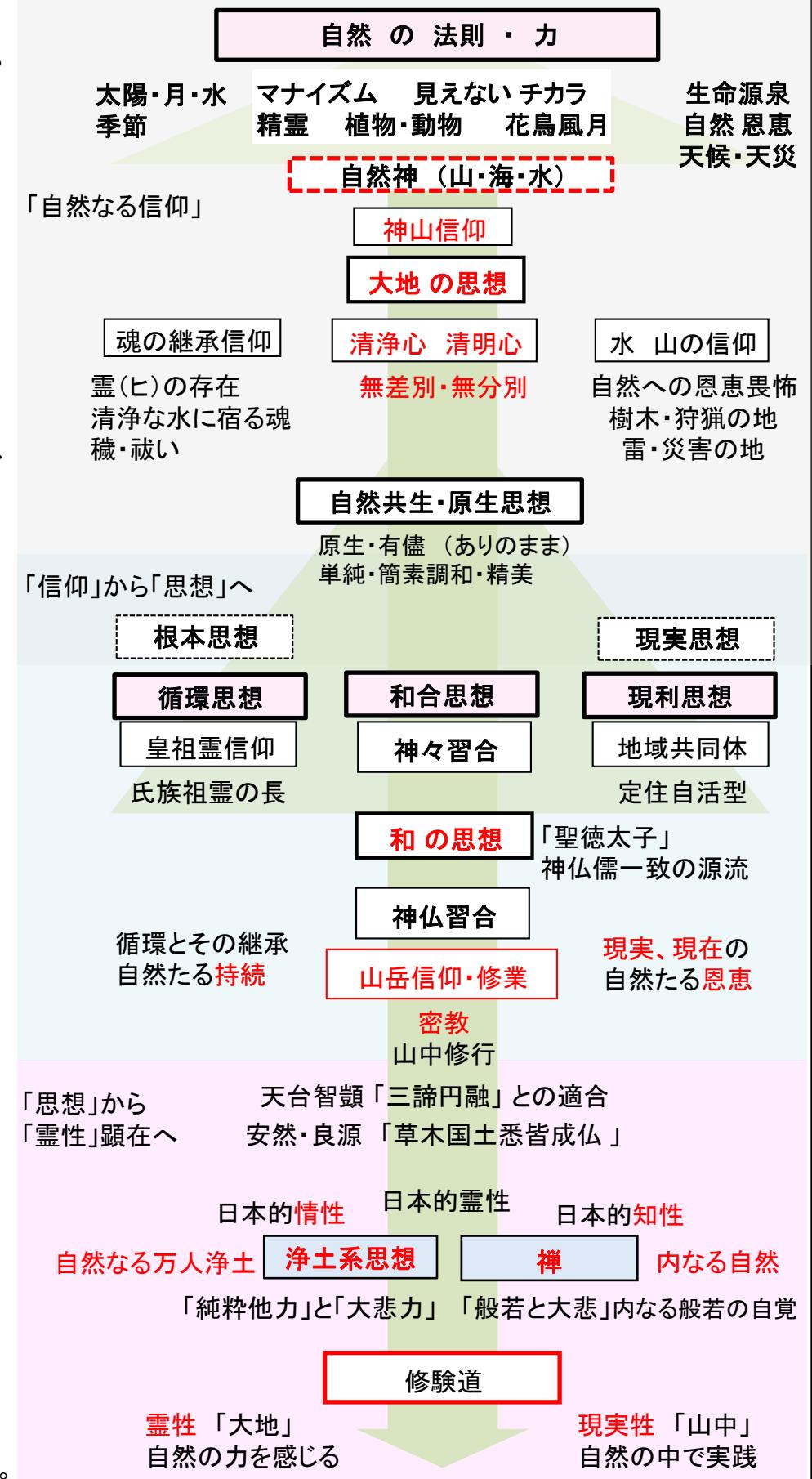
本論、「日本文化の原理 日本の靈性、**大地の思想**とは」で、その「日本の靈性」を理解する手掛かりである「**聖徳太子**」、「**大地性**」、そして「**修験道に共通する思想**」が、「万物自然そして人間、また人間同士の一体性と共生和合」である。と考えた。仏教では、弥陀という名で、万物自然の**般若**(超越的智慧)と**大悲**(般若と得て個人的な利益や苦悩に思い患わず作用する万物への愛)を認識し、「**禪**」で内省的に自覚、「**浄土系思想**」では称名することで体認する。「修験道」は、自然の中での体認を通じて「**大地**」を感じる、そこで直覚させるものが日本の靈性ではないだろうか。と考えた。

鈴木大拙先生の考えは、「日本文化の原理」と一致する。以下に原理に沿って整理した。

「自然の法則・力」への崇敬、畏敬を頂点とする「自然なる信仰」が原初的に発祥した。そこに生まれた**マナイズム**や万物精霊から発想される「魂の継承」への思いは根本的価値を重んずる考えを育み、循環思想となった。すなわち、「日本の靈性」では「日本の情性」と表現された精神性であり、**修験道では内面に仏性を見いだすこと**。これは「自然なる人間(自身)」を感じることである。古代からの表現でいえば、「**霊(ヒ)の存在、清浄な水に宿る魂、穢・祓い**」から連なる**循環的な心情**である。また一方、『日本の靈性』で「日本の知性」と表現された精神性は、修験道では自然の中の人間の存在を直覚的に体験することである。それは現実の「自然の中の人間(自身)」を感じることで、現在(今の関係性・空間性)軸である**現利的な心情**である。そして、これもまた「自然なる人間」を感じることで、古代からの表現でいえば、「**自然への恩恵畏怖**」から連なる心である。この場合、禪と同様に肉体的行為を伴う点で、循環思想との対比で、現実的な特徴となる。それら、その相対する両極の心情、思想の均衡習合が「日本の靈性」を構成し、修験道においても両方の精神性が調和して「**自然なる人間**」につながっている。この様に、日本の靈性や修験道は、「日本文化の原理」から解釈すると理解しやすい。

禪は、仏陀の精神である般若(**超越的智慧**)と 大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思い患わず作用する**万物への愛**)を直接に見ようと欲する。仏陀の精神である般若(超越的智慧)と大悲(万物への愛)を直接に見、我々の内に睡っている**般若**を目ざまそうとする。**精神**に焦点を置き、形式や知性と論理を蔑視し、事物の真髓が把握せられた後に、知識の価値を知る事ができる。禪の考え方は、**精神**に焦点を置き、形式・慣例・儀礼の否定が精神を浮き彫りにする。**無執着**である**超越的な孤高**が、清貧主義、禁慾主義の精神である。**孤高**は仏教では絶対と解釈され、**森羅万象**の中に存在する。鈴木大拙氏の、この「**禪**」の定義は、上記「修験道」と共通する。「**静なる禪**」と「**動なる修験道**」 表層の行為に違いがあるが、目的に大差はないと考える。主に実践者自身への両者と比較すると、浄土系思想の、他者供養まで包含する信仰特徴が浮き彫りとなる。しかし、それらいずれもが出家在家を問わない宗教的行為であることは、いかにも日本の靈性の産物と考える。

「日本文化の原理」から解釈した 修験道へのアプローチ



ひとつの命題がある。ドナルド・キーン氏と 司馬遼太郎氏との間で議論となった「日本人のモラル」と儒教との関係である。

キーン氏は、そのモラルの原点を儒教とし、司馬氏は江戸時代など儒教教育からの影響は認めつつ、それ以前の「オリジナルなモラル」を強調。また、社会体制への影響は少なかった、とする。二人共通して「世間」への意識としての「恥」、そして近松門左衛門の歌舞伎からは、儒教的に行動しようとして解決できない状況で最後は純粋に自棄に至る、そのことを日本的とする。キーン氏は、古事記の死後の穢れ「黄泉の国」への意識と、「心中」の動機や死ぬ直前の重要な意識とを比較して、神道より死後浄土への仏教的意識を指摘した。その上で、「神道は誕生、日常は儒教、死には仏教」に成る「矛盾した信仰構造」を好評価する。応えて、司馬氏は、「死後の黄泉の国意識」以前の「痴呆的空間」なる「古代原初的神信仰」が日本文化の底辺に「皿」としてあり、その上に仏教・儒教がのる、とその構造を結論する。そして最後に、三信仰を適時利用する「便宜主義」を特徴として加える。司馬氏は、その神がいます場所は清められなければならない、とした。以上『日本人と日本文化』より、その「清め」と「モラルの原点」の関係など、以下に検討する。

古事記以前の信仰とは？ モラルは日常生活に顕れる、日常生活から信仰を読み取る。とすれば、その時代の手掛かりとして一つの記事がある。俗称で『三国志魏志倭人伝』と呼ばれている書物である。中国西晋の陳寿によって、呉の滅亡280年から、陳寿の没年297年の間に書かれた歴史書『三国志』。その中の『魏書』第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条のことで、陳寿死後、中国では正史として重んじられた。仏教儒教の伝来や、古事記が書かれる400年以上前、弥生から古墳時代に変遷しようとしていた時代。当時の倭人(日本人)の習俗や地理などについて書かれ、我が国の状況を文字として確認できる現存最古の書物である。「邪馬壹國」はこの書物に登場し所在が議論を呼んだが、書物信頼性を一旦留保し、人々の日常生活に注目したい。以下に該当部分だけを抽出した。

俗称『魏志倭人伝』原文より

戸	竊	四	其	無	如	所	不	棹	衰	生	婦	一	水	食	有	其	徒	有	櫓
及	少	五	人	別	令	云	知	揉	不	口	人	人	中	肉	棺	身	跣	無	木
宗	諍	婦	壽	人	龜	為	以	櫛	謹	財	如	不	澡	喪	無	體	有	與	弓
族	訟	下	考	性	法	輒	為	號	出	物	喪	統	浴	主	櫛	如	屋	僮	木

原文 5, 6ページ 部分

「土地山險、多深林、道路如禽鹿徑。有千餘戸、無良田、食海物自活、乖船南北市糶」土地は山が陰阻で、深い林が多く、道路は獣や鹿の小道(獣道)。千余戸あり、良田は無く、海産物を食べて自活しており、船で南北の市(物々交換の場)に出かけて、糶(てき=穀物を買求める 物々交換する)する。

「今倭水人好沈没捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、後稍以為飾。諸國文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差。」今の倭の海人は水に潜って上手に魚や蛤を採取する。身体の刺青は大魚や水鳥を厭うからである。後にやや装飾となった。諸国の文身は各自に異なり、左や右、大や小、身分の尊卑で差がある。

「其風俗不淫」その風俗は淫乱ではない。

「種禾稻、紵麻、蠶桑緝績。出細紵、縑綿。其地無牛馬虎豹羊鶻。兵用矛、楯、木弓。木弓短下長上、竹箭或鐵鏃或骨鏃、所有無與儋耳、朱崖同。」水稻、紵麻(カラムシ)の種をまき、養蚕して絹織物を紡ぐ。細かい紵(チョマ=木綿の代用品)、薄絹、綿を産出する。その地には、牛・馬・虎・豹・羊・鶻がない。矛、楯、木弓を用いて戦う。木弓は下が短く上が長い、竹の箭(矢柄)あるいは鉄、あるいは骨の鏃、有無するところが儋耳(ダンジ)や朱崖(シュガイ。ともに海南島の地名)に同じである。

「倭地温暖、冬夏食生菜、皆徒跣。有屋室、父母兄弟臥息異處、以朱丹塗其身體、如中國用粉也。食飲用籩豆、手食。其死、有棺無槨、封土作家。始死停喪十餘日、當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒。已葬、舉家詣水中澡浴、以如練沐。」倭の地は温暖、冬や夏も生野菜を食べ、皆が裸足で歩いている。屋室があるが、父母兄弟は寝室を別とする。朱丹を身体に塗り、中国の白粉を用いるが如きである。飲食には御膳を用い、手で食べる。死ねば、棺(かんおけ)はあるが槨(かく=墓室)はなく、土で密封して塚を作る。死去から十余日で喪は終わるが、服喪の時は肉を食べず、喪主は哭泣し、他の人々は歌舞や飲酒をする。葬儀が終われば、家人は皆が水中で水浴びをする。練沐(練り絹を着ての沐浴)のようである。

「其俗舉事行來、有所云為、輒灼骨而卜、以占吉凶、先告所卜、其辭如令龜法、視火坼占兆。其會同坐起、父子男女無別、人性嗜酒。見大人所敬、但搏手以當跪拜。」関連記事『魏略』其俗不知正歲四節、但計春耕秋收為年紀。」そのこの風習では、事を起して行動に移るときには、為す言動があり、すなわち骨を焼いてト占で吉凶を占う。先ずト占を唱えるが、その語句は令龜の法の如く、火坼(熱で生じた亀裂)を観て兆(きざし)を占う。そこでは会同での起居振舞(たちいふるまい)に、父子男女の差別がない。人々の性癖は酒を嗜む。大人(高貴な者)への表敬を観ると、拍手を以て跪拜(膝を着いての拝礼)にあてている。『魏略』そのこの風習では、一年に四季があること(歴)を知らない。ただし、春に耕し、秋に収穫をすることを計って年紀としている。

「其人壽考、或百年、或八九十年。其俗、國大人皆四五婦、下戸或二三婦。婦人不淫、不妒忌。不盜竊、少諍訟。其犯法、輕者沒其妻子、重者滅其門戸及宗族。尊卑、各有差序、足相臣服。收租賦。有邸閣國、國有市、交易有無、使大倭監之。」そのこの人々は長寿で、あるいは百年、あるいは八、九十年を生きる。そのこの風俗では、国の高貴な者は皆、四、五人の婦人、下戸(庶民)はあるいは二、三人の婦人を持つ。婦人は淫乱ではなく、嫉妬をしない。窃盗をせず、訴訟は少ない。そこでは法を犯せば、軽い罪は妻子の没収、重罪はその一門と宗族を滅ぼす。尊卑は各々に差別や序列があり、互いに臣服に足りている。租賦を収めている。邸閣(立派な高樓)の国があり、国には市があり、双方の有無とする物を交易し、大倭にこれを監督させている。

「及郡使倭國、皆臨津搜露、傳送文書賜遺之物詣女王、不得差錯。」郡使が倭国に及ぶときは、皆、港に臨んで点検照合し、文書、賜物を女王に詣でて送るが、間違いはあり得ない。

「下戸與大人相逢道路、逡巡入草。傳辭說事、或蹲或跪、兩手據地、為之恭敬。對應聲曰噫、比如然諾。」賤民が高貴な人物と道で出会えば、後ずさりして草群に入る。言葉で伝達すべき説明事は蹲(うづくま)るか、跪(ひざまづ)いて、両手を地に着けて敬意を表す。応答する声は噫(いい)と言い、これで承諾を示す。

ここで描かれているのは、地域に分散して、漁撈採取、農耕で自活し、窃盗、訴訟が少なく、風俗が整った生活。また、尊卑序列の下、臣服敬意の礼儀ある姿である。そして、葬儀では、喪に服し、水中練沐したとされる。つまり、練を着て水に浴することで「埋葬後に死の穢れを水で洗い清めた」という事である。中国から来た人が脚色する理由は無く、これらは参考とすべき記述と考える。仏教儒教の信仰、教えもない時代に、これほど整った生活が行われ、古事記よりはるか以前に、死に対する穢れの意識が存在した証拠となる。この書物で記されている多くの地域小国は、縄文の漁撈採取を引き継ぎ、弥生の水稻など農耕を併用している。防衛の武具は持つが、この中国人が各所巡訪できる程の安定状態と考える。地方分権自活型の共和状態である。風習では、事を起して行動に移るときには、骨を焼いてト占で吉凶を占う。先ずト占を唱えるが、その語句は令龜の法の如く、火坼(熱で生じた亀裂)を観て兆(きざし)を占う。つまり、自然に問いかける「ト占」や「卑弥呼(巫女)や鬼道」の語から、背景には原始で自然な神祭祀があり、それを中心に充実した地域生活が営まれていた。この「地域」が「世間」であり、その「習俗から逸脱」することが「恥」である。その神祭祀は、自然を前提とした素朴な信仰であるため、白紙であり、司馬遼太郎氏の言う「皿」なのである。また、「死」がもたらす生者の「穢」、その解消方法として「禊」が存在した。「禊」の行為には、水の中の靈魂を体内に入れ、体と靈魂を結合させるという意味があった。その名残として、水を両手のひらで掬って(すくって)飲む動作を『水を掬ぶ(むすぶ)』と言う。この生命誕生再生の「むすぶ」は、のちの古事記で、神産巢日神(カミムスヒ)高御産巢日神(タカミムスヒ)の神名に顕れる。また、今日使われている「結ぶ」は、本来、内在するものを外部に逸脱しないための外的な形である。生命誕生再生のための自然への信仰、その神のいます場所や、「死」に際した生者は、「むすぶ」力を保ち再生するために、清められ穢なきものでなければならない。つまり「穢」「禊」の意識は、地域社会における生命誕生継承のための自然信仰に由来するとともに、我が国の人々に儒教以前に「清浄心」「清明心」を育んだ。「恥」の原点は「穢」なのである。両氏対談では、この記事は引用されてない。しかし「日本人のモラル」を議論するには、源流として、前提すべきと考える。

ドナルド・キーン氏は、日本文学研究の第一人者であり、英訳などを通じ、世界に発信いただいた。その著書などから、日本文化についての考えを抽出し、当方「原理」を検証したい。キーン氏が、長年の研究を経て、日本人、日本文学・文化を象徴すると考えた語彙を、引用著書の順に図中、上から下に配列した。キーン氏の当初からの研究である文学から抽出された「日本人の好み」「日本文学の特徴」の言葉「暗示」「無常」「保守性」は、時間時代の経過を意識する心情、伝統など循環的である。それと比較し、下段の「日本人の特徴」を表す「あいまい(余情)」「はかなさへの共感」「礼儀正しい」「清浄」「よく働く」の「五項目」は、現利的な部分まで捉えた言葉として、当原理構造において、バランス良く配列できる。「不均整」「あいまい(余情)」は、両極習合への葛藤の顕れであり、また、自然なありように通じる「簡素」と共に和合的であり、「女性の重要性」は、仏教の一乗思想、万人往生など平等の顕れと考える。同氏、文学からのアプローチからも検証出来たと考える。

著書『古典の愉しみ』では、「日本人の好み」についてのエッセーを引用し、その「重要な特性」について、「暗示・不均整・簡素・無常」を取り上げている。

「暗示」は、「例えば桜満開だけを楽しまず、初めや終わりにも深い漂いがある」「男女の情も、逢い見るだけでなく、逢えずに終わってしまう悲しさを感じる」など指摘されている。物事の過程の描写、過程の心情を大切にしている。

「不均整」は、中国など芸術・建築と比較され、文学・書道・陶器・生け花・造園を例示されている。

「簡素」は、まず、吉田兼好『方丈記』に記された庵の構造や装飾を取り上げた。千利休の理想「サビ」で、あからさまに富を示さず、また富だけで得がたい価値感も表現した。少ない香料、淡い匂いの食べ物について、近年、外国人の日本食趣向に触れた。

「無常」は、彼が最も不思議なものとし、西洋の永遠に対し、ラフカディオ・ハーン『心』を引用され、「うつろうもの」を望んでいたとした。世界の文学で共通の問題である「人生のはかなさ」が、日本だけは、美にとって不可欠とした。木造建築もまたしかりとする。特別に、桜は、うつろうもの、はかないものとして好まれる。夏目漱石が、西欧人の自然変化に無関心さに驚いたことも紹介する。

過去の日本の美は、変転の激しい時代でも生き続けている、と結ぶ。(このことを「伝統継承」と、追加したい)

著書『日本文学の歴史1』で、「日本文学の特徴」として、二点に絞っている。

まず、中国や東南アジアの文学と比較して、和歌と散文における「女性の重要性」をあげ、『源氏物語』『枕草子』の物語と「日記」の、男性作家への影響に注目する。そして、「保守性」として、今日までの和歌・俳句の興隆、能・歌舞伎・浄瑠璃の公演、古典文学の芝居や映画化を指摘された。

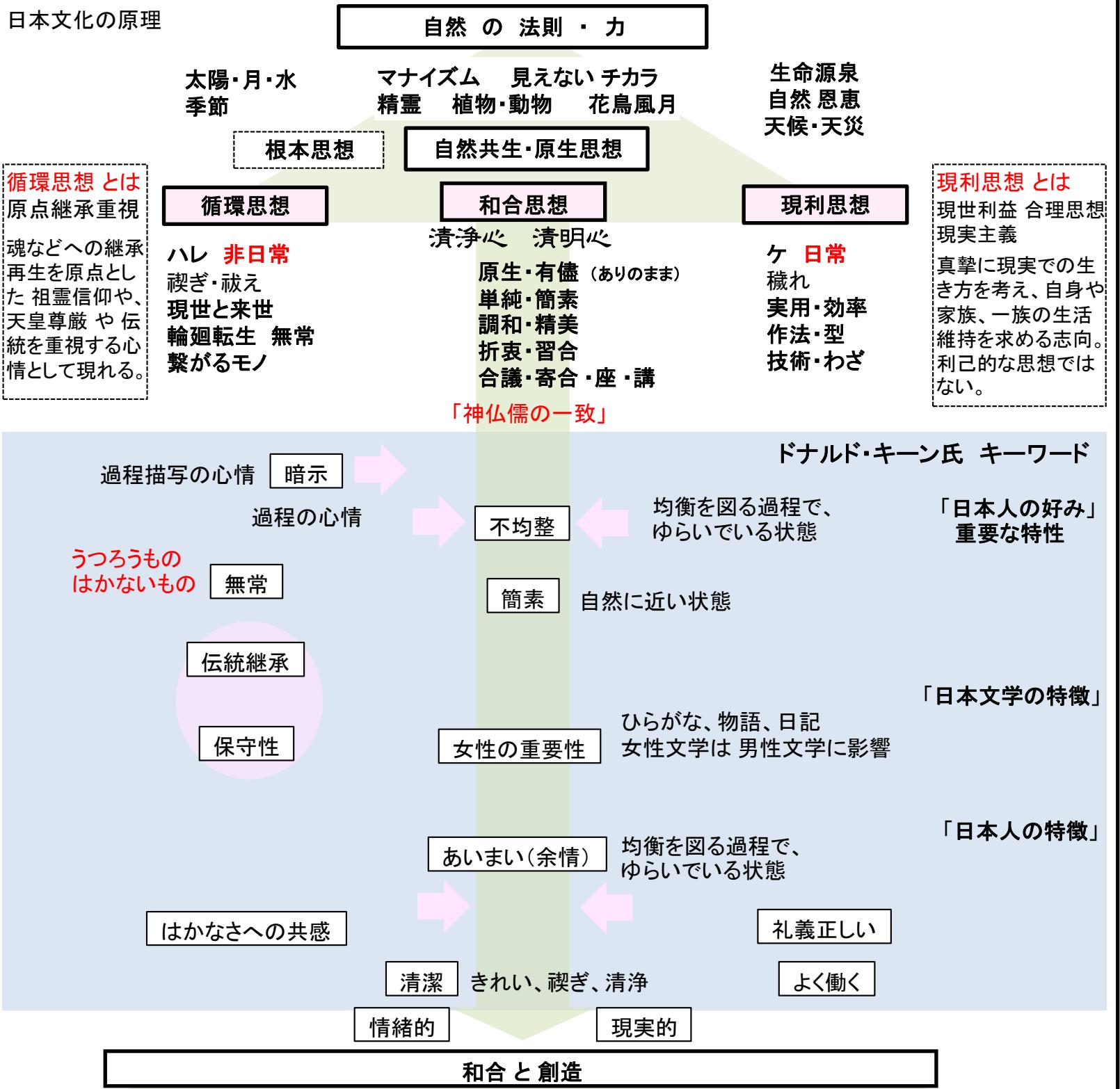
さて、司馬遼太郎氏とキーン氏の対談『日本人と日本文化』の中で、議論となった「日本人のモラル」について、改めて、キーン氏の最新の見解を、確認できることが出来た。

2015年放送NHK「戦後70年企画『ドナルド・キーンの日』」である。

キーン氏は、俗称で『三国志魏志倭人伝』すなわち『三国志』『魏書』第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条を引用され、「日本人の特徴」について、「礼儀正しい」「清浄」が描かれている、とされる。当論「儒教以前 自然なるところ 清浄心 清明心」で、この点について指摘したが、やはり「日本人のモラル」を議論するには、この時代の記述を源流として、前提すべきと考える。「礼儀正しい」は、話す相手など代名詞や敬語の多様な使い分け、「清浄」は、「美しい」の意味も表す「きれい」でもあり「風呂好き」や「禊」へ話題展開。キーン氏は、さらに「あいまい(余情)」「はかなさへの共感」「よく働く」を加え、以上「五項目」を、「日本人の特徴」とされている。

「あいまい(余情)」は、男女のやりとり、絵画の墨による稜線で例示された。「はかなさへの共感」は、散りゆく桜を愛でる心情を、上記「無常」と同様に列記されている。「よく働く」は、特に昭和世代には共感できると考える。

日本文化の原理



「和合思想」は、「日本文化の原理」の中心にあり、「心御柱」である。「自然の法則・力」を背景に、「循環思想」と「現利思想」の調整・均衡を保ち、新たな「創造」を生み出す力でもある。

ドナルド・キーン氏は、『源氏物語』との出会いや日本文学研究を通じ親日家であった。しかし、それまでの日本人に対する認識と、第二次世界大戦の日本兵「玉砕」と、そのことに対する日本人自身の美化意識との矛盾に悩んだ。日本人に対し「自己美化」「特殊性」への過剰意識に警鐘を鳴らしつつ、天皇の存在にひとつの答えを模索した。「日本人の本当に美しい部分、伝えるべき日本人」を求め、日記文学に手掛かりを探し、谷崎潤一郎氏の戦中執筆『細雪』の意義に注目された。2015年放送NHK「戦後70年企画『ドナルド・キーンの本』後編」詳細を、下段に掲載する。

誠に僭越ながら、それら日本人の心情構造を、本論「日本文化の原理」で説明できる、と考える。その当事者の心情を軽々しく判断してはならないが、「玉砕」そして「特攻」の行為には、**清浄心・清明心**を背景に、古くは「切腹」に通じる「**潔し**」「**恥**」、そして「**穢れ**」への**忌避心情**が底流し、外的には、神国意識の下、天命天下の「**礼義**」「**忠義**」がのしかかっている。最後の瞬間には、ムラ・共同体的な「**諸共**」「**一蓮托生**」が、衝動として働いた結果ではなからうか。一方で、戦中に『細雪』を執筆した谷崎氏の心情は、当時の体制の対極として「**均衡**」しようとする思いであり、本論でたびたび指摘してきた日本文化の作用でもある。秀吉の「赤楽茶碗」に対する、利休の「黒楽茶碗」に代表される「**原点・ありのままへの回帰**」均衡と理解したい。その構造を図解したが、「玉砕」や、その「美化意識」には「**循環・現利・和合**」の三点からなる**心情・思想**が重層する複雑性がある。「**神仏儒の一致**」が、負の作用となった、**例えば、語弊があるかもしれないが、その要素は濃厚である。**

谷崎氏の『細雪』も、循環的な心情・思想、すなわち「**伝統を重視する心情**」から発せられたものだが、日本兵と文学者という、その主体者の置かれた立場、状況の違いにより、なされる行為が異なった、と考える。しかしながら、国家総体が、前者に向かう中での『細雪』誕生の意義、すなわち「**均衡**」を発見いただいたキーン氏の指摘は、日本人の誇りとして受け止めなければならない。「日本文化の原理」に依って、その価値が理解できるのである。

ドナルド・キーン氏は、2015年放送NHK「戦後70年企画『ドナルド・キーンの本』」の中で、重要な疑問を打ち明けた。第二次世界大戦中、アッツ島で、なぜ、日本兵は自決したのか？キーン氏が目撃したアッツ島だけではない。ニューギニア島ブナやガタルカナル島でのいわゆる「玉砕」、そして、「特別攻撃隊」カミカゼも、同じであろう。文学を通じて「日本人の良さ」に好感していたキーン氏は、失望しつつも、それまで抱いてきた日本人に対する認識との矛盾に悩んだ。戦後、元日本兵達からの答え「**仏教による精神的犠牲**」「**全体に引きこまれた結果**」も、その解決にはならなかった。

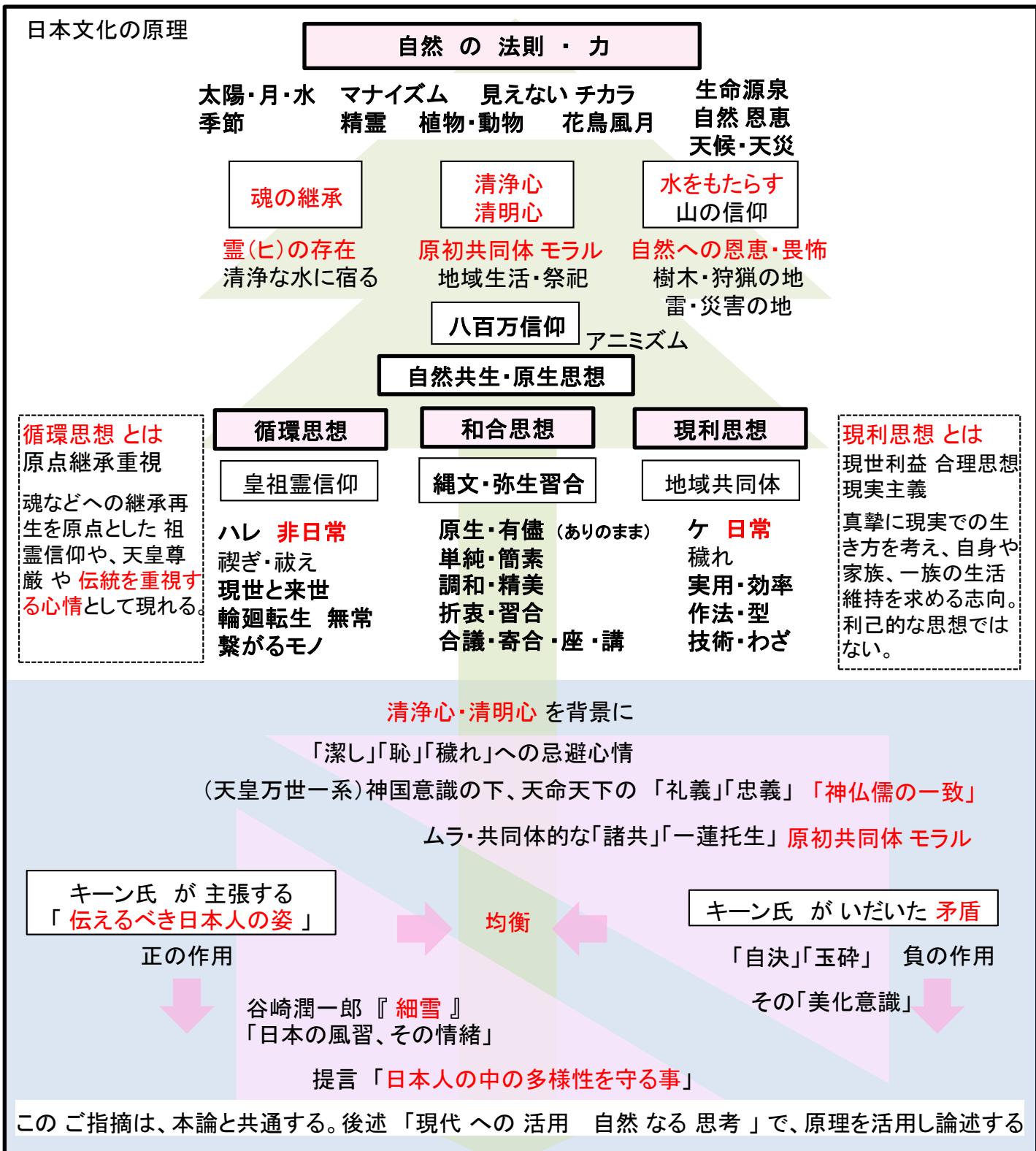
1970年代、司馬遼太郎氏との交流を通じ、新聞社で連載『**日本人の質問**』を始める。外国人であるキーン氏に、日本人から投げかけられる質問を題材に、日本人に対する、「**美化しすぎてはいけない**」「**特殊性を意識しすぎている**」という問題意識を持つ。それは、「**同志意識を楽しんでいる**」「**西洋に対し、日本文化の理解を広める努力を惜しんできた**」などのメッセージとなる。そして、その背景には、天皇の存在があるとし、日本の中にだけいるとそうなるのだが、外国に出ると日本を理解しようと自覚する、と考察したが、近年の日本人たちの海外留学減少を危惧する。

1983年からの連載『**百代の過客 日記にみる日本人**』では、平安時代から現代までの日記に、その当時の人々の考え、感情を見だそうとした。鎌倉時代、女性の『**弁内侍日記**』では、先例にこだわる役人への批判。江戸時代末、『**遣米使日記**』からは、外国人に対する「**眞心は かはらざりけり**」と感じる思いを指摘した。高度成長期にあつて、表面的な文明摂取を批判する永井荷風『**新婦朝者日記**』に、真の文明を見だそうとする姿も見た。一方、キーン氏が、表現の自由者として認識していた伊藤整が、『**太平洋戦争日記**』では、日本兵の自決を「**美しい戦い**」と讃美することに、また矛盾を思い出す。

そしてそのあと、悩むキーン氏は、『**疎開日記**』から、戦中にあつて連載中止になりながら最後は自費出版した谷崎潤一郎の姿を発見する。その著書『**細雪**』を以って、谷崎は「**日本の風習、その情緒を、大切に伝えようとした**」、と讃美する。これこそが、「**伝えるべき日本人の姿**」であると確信する。

「日本人の本当に美しい部分を忘れるべきではない」「**信じることを成し遂げた谷崎潤一郎の様な人を忘れてはならない**」、と主張する。谷崎氏は、キーン氏に、裏側の見えない部分の美しさを大切にする「**羽織り**」を、その形見として伝えた。

その後も「**戦争と日本人の考察**」は続いたが、ひとつの結論として、戦争防止のため「**日本人の中の多様性を守る事**」を、提言とした。そして、2011年東日本大震災発生後、整然と行列する姿、助け合う姿に、「**日本人の真髓**」を再認識したキーン氏は、2012年3月、日本人国籍を取得し「**鬼怒鳴門**」となった。**伝統**は時には隠れて見えなくなってしまうが、それは確かに日本人の中に流れ続けている。日本人は、**伝統を守り、過去の良さから、楽しみを得ることに魅力を感じるべきだと、未来の日本に向け期待される。**



『日本人と日本文化』の中で、ドナルド・キーン氏は、司馬遼太郎氏に語る。「たとえば、『寿の門松』の場合を考えると、主人公与次兵衛はひじょうにむつかしい選択にぶつかるのです。妻のお菊を愛していながら、もうひとりの太夫吾妻を愛している。どうしたらいいのかわからない。二人とも実に心の素直ないい女性で、それでしまいには完全に主人公は狂ってしまう。当時の観客は、きっとあれを見て同情したでしょう。どうして同情したかという、彼は純粋に考えた、**純粋**に自分の感情のままに行動したからだと思います。利害打算が全然なくて、儒教的な考えもなく、ただ純粋に自分の気持ちのままに動いた。それは私にいわせると、ひじょうに**日本的**です。しかし、発狂するまでの心の動きを規制するものはきわめて儒教的だった。」司馬氏も賛成しつつ、仁義礼智信の儒教は、ぬきさしならない問題において、最初の問題とする。答えて、キーン氏は、「(儒教について)かなり遠いところまで大切に考えるでしょう」と、補正を提起された。本論は、このことが重要と考える。

この対談の中に、実は、日本文化にとって重要な言葉や真髓が語られている。「**純粋**」や「**感情のまま**」、そして「**儒教的**」、「どうしたらいいのかわからない」と表現された「**葛藤**」である。上記『寿の門松(ねびきのかどまつ)』とは、近松門左衛門作 上方の浄瑠璃で、1718年、大坂竹本座で初演された、本名題「山崎与次兵衛寿門松」の略称である。いわゆる「**義理と人情**」の世界を描いた物語で、『女殺油地獄』なども、儒教的な人間関係と、親子の人情との葛藤がある。同じく近松『曾根崎心中』は、西国三十三所観音巡礼を終えた直後のお初と、醤油屋の手代・徳兵衛の、「未来**成仏**うたがひなき恋の手本となりけり」と誓う**心中**が結末である。その顛末に至る過程で、主人への義理や、友人への人情、友人の不義理があり、そして最後に、結納金横領がないことを、死んで身の潔白を証明するという徳兵衛の儒教的判断に、お初は人情的に**心中**を決断した。つまり、「**義理**と「**人情**」とは、その様な「**葛藤**」の世界なのであり、その背景に、前述の「**純粋**」や「**感情のまま**」、「**儒教的**」な心情がある。「**人情**」とは、親子・恋人の間の、義理以外の人間関係において、主に本能的で感情的な心情である。当論「日本文化の原理」においては、「**義理**」が(現実)儒教的で現利的であるのに対し、「**人情**」は情緒的で循環的であると考える。(「循環的」とは、生命(魂)などの世代継承を表す心情、概念、思想と定義した)「**義理と人情**」の二つの言葉の組み合わせは、現利的な心情と、循環的な心情との「**均衡**」、つまり和合しようとする「**葛藤**」が表現されている。その「**純粋**」さに観客は同情した。そして、キーン氏は、それら全体をとらえて「**日本的**です」と表現された、と考える。

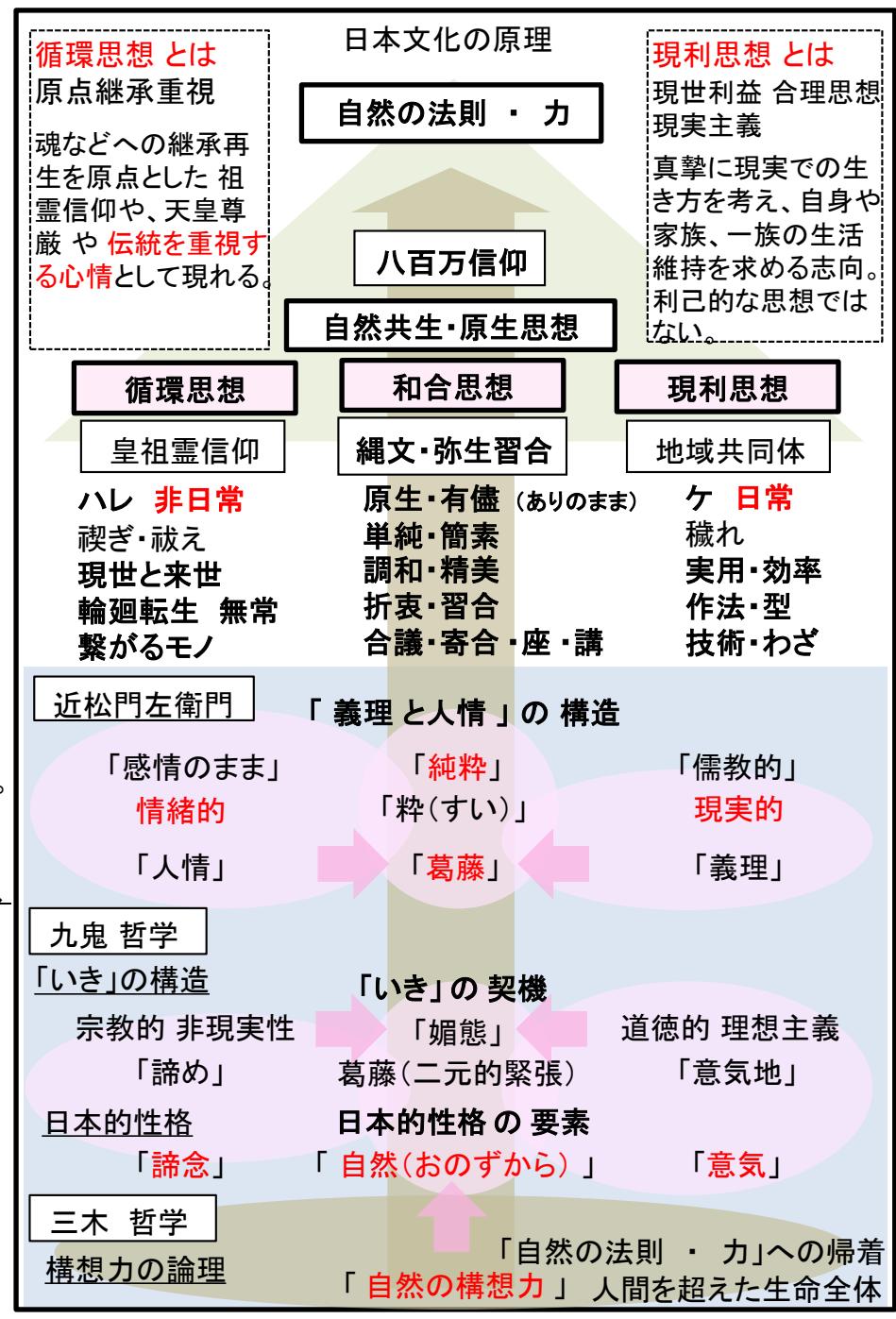
その考えが許されるとして、「**純粋**」「**感情のまま**」「**儒教的**」の解釈について、「日本文化の原理」に配列、図解した。この会話の中の「**純粋**」、上方の「**粹(すい)**」は、恋愛などにおいて、儒教的やその他要因との葛藤・折合いで突き詰めた末に結晶される文化様式(この場合の「**発狂**」「**心中**」)を生みだした。つまり、「**感情のまま**」と「**儒教的**」との「**葛藤**」が「**純粋**」であると考える。ある説明では、大坂の「**すい**」は、「**推**」であって、推とは「**推し量る**」「**推理する**」「**推量を測る**」の推とされる。つまり相手の心を慮って行動することを「**すい**」という。従って「**すい**」というのは、相手に伝わらないと成立しない。相手の心を慮る行動ができない人間のことを「**無粹**」(ぶすい)という。相手の心を読み解くのが日本の商いで、無粹な人間は商売にならない。これが純粋の「**粹(すい)**」で、つまり「**粹**」とは、一旦、上方に限定されるとしても日本文化の構造全体を表現していると考えられる。

対して、江戸の「**いき**」とは、異性間の関係を、突き放さず突き詰めず、常に距離を接近せしめることによって生まれる、と言われる。「**いき**」は粹と表記されることが多いが、これは明治以降で、上方の美意識である「**粹(すい)**」とは区別しなければならない。江戸の「**いき**」は、また「**意気**」であって、「**意気地なし**」という言葉があるように、己の生きざまの気概を示す言葉である。自らを犠牲にしてまでも相手の心を慮って行動するのが上方大坂の「**すい**」。自己の意思を断固として表明するのが、江戸の「**いき**」なのである。その「**いき**」から、論理を展開したい。「**粹(すい)**」と同じく、「**いき**」の構造も、また原理で説明できる。

京都大学名誉教授で、『善の研究』の著者である西田幾多郎氏。彼は、この「**宇宙**」の無限なる活動の根本を「**神**」とよび、実在の根本であるとする。その働きが無限であるという意味で「**無**」とも表現した。これが「**無**」の哲学の源泉である。西田氏から始まる京都学派の哲学者、お二方の考えを紹介したい。田中久文氏の著書『日本の哲学を読む』から、以下に要約する。

九鬼周造氏の考えを、著書『**いき**の構造』などから解説する。「**いき**」の契機は、「**媚態**」「**意気地**」「**諦め**」によって成立している。それらは、わが国の道徳的理想主義と宗教的非現実性によって支えられ、前者は**武士道**によって、後者は**仏教**によって育まれてきたという。「**媚態**」とは、異性に近ずきながら合一して「一元」化することなく、精神的には一定の距離を置いて「二元的」緊張関係を維持させること「**可能的関係**」を構成すること。この「**媚態**」の緊張関係を維持し、磨きをかけるのに必要なものが「**意気地**」「**諦め**」で、「**意気地**」は、異性にもたれかからない「心の強み」、「**諦め**」は、「**流転**、**無常**を差別相の形式と見、空無、涅槃を平等相の原理とする**仏教**の世界観」に基づく。仏教の「**諦め**」は、真理を明らかにする「**明(あか)らむ**」という意味を持つ。そのあと父母、友人の死が連続し、妻と離婚した当時、著書『偶然性の問題』では、人間は他者との偶然的出会いを生きるとし、「**無**」が強調される。因果によって説明できるものを「**必然**」とし、因果関係が二次以降に作用し、説明がつかない偶然を「**仮説的偶然**」とよんだ。二元的関係において「**いき**」と共通し、「**無**」が作用しているとする。晩年、昭和12年(1937)『**日本的性格**』で、「**いき**」の契機と共通する「**意気**」「**諦念**」に加え、「**自然(おのずから)**」を強調し、「**日本的性格の要素**」とした。「**自然**」は、偶然に任せて自在に生きることが、大局的に目的必然にかなったもの、すなわち「**予定調和**」になる。西洋では、目的必然に服従する「**自由**」であるが、道徳観の違う日本では、「**自由**」は、偶然のままに生きる「**自然**」と融合しているとした。

その「**自然**」に関連し、三木清氏の考えを、著書『**構想力の論理**』を主に解説する。三木は、人間とは、「**構想力**」によって新たな「**形**」を創造してゆく存在であると考えた。人間は、動物と違い本能では自然環境と調和できず、乖離した存在であるが、生きてゆくために「**構想力**」によって環境と結び付ける働きをなし、「**技術**」的であるとした。彼が評価するカントの言う「**天才**」の特性、つまり、「**独創性**」「**範例的**」「**芸術的創造**」と共に列記した「**自然として働く**」の「**自然**」に注目した。そして「**自然の構想力**」という概念、すなわち人間を超えた生命全体、自然全体が「**構想力**」を持っている、と考えるに至る。また、さらに超越的な世界を模索し、遺構『**親鸞**』では、親鸞の宗教は「**真理**」の問題であり、「**真に具体的な絶対性**」をもつという。念仏はあらゆる人において同一、平等で、「**御同朋同行**」主義がうまれた、とする。以上引用 本論は、このことをとらえて「**日本的**です」と、考えたい。これは親鸞の「**自然法爾(じねんほうに)の事**」(後述)への合流を示し、**日本的哲学として「自然」に帰着する特性**と考える。



司馬遼太郎氏の、日本文化に対する全体を、初期から晩年まで、以下の三著書からつかみたい。前半は、記者時代の経験から美術的関心に傾向するが、後半は、仏教への見識が高まる。一貫して、自然と密接する古代的神道を日本文化の基層におき、その多神教性は、宗教による統治となじまない、とする。「**たおやめぶり**」にある柔軟性を持った受容と抵抗は、質素な「銀」を基調とする。時に流行る派手な「金」は「ますらおぶり」に通じ、時代的にそれら間の「振り子」的作用、傾向を指摘する。それらのゆらぎは、当方文化構造の両極の間で示したことでもある。

『**日本人と日本文化**』は、1972年の司馬遼太郎氏とドナルド・キーン氏との対談である。司馬遼太郎氏(1923—1996)は、1961年(昭和36年)、39歳で産経新聞社を退職し執筆に専念、この頃は、中世から幕末・明治を舞台とした時代小説の作家としてすでに確立していた。50歳を目前に1971年から『街道をゆく』の連載を始めた時期にあたる。対談の内、特に日本人、日本文化として語られている部分を列記する。

外国文化の受け入れ方について、キーン氏はあらゆる面に外国文化に対する愛と憎、受容と抵抗の関係があると前置きし、『源氏物語』の「**唐(から)めきたり**」の言葉は、その「抵抗」(批判)と指摘した。司馬氏は、それだけではなく「受容」的に「いいこと」も示すとし、それが「**二つの(間の)振り子**」と提起した。そして、日本との対比として朝鮮半島の新羅末期から李朝(李氏朝鮮)を置く。そこでは、1400年頃～1900年頃までの約500年間の全面的な中国化を、儒教を主とした政治や文学、名前で例示し、それが自国語による文学欠乏の原因となったとする。

キーン氏は、平安時代初期、800年代の中国文学(漢文・漢詩)興隆を乗り超え、日本特有な宮廷女性の高い地位によって、女流文学と「かな文字」が成立した、とする。司馬氏は、『土佐日記』を事例に、漢詩による感情表現の不自由さを、「かな」による大和ことばで解決した、と同意した。

感情表現の産物「かな」に内在する「**たおやめぶり**」について、司馬氏は、以下の通り述べる。「典型的に日本人が「たおやめぶり」だと言っても、これはけっして日本人として卑下するとか、それを困ったことだと言おうとしているのではないのです。節操のある人、そしてほんとうに勇気のある人というのは、案外「たおやめぶり」の人から出ることが多くて、つまり自分の意見なり、自分の立場なり、あるいは正しいと思ったことを守りぬくという点で、「ますらおぶり」の人はくるっとどこかに転換してしまっているのに、「たおやめぶり」の人は頑固である、ということがある。」(P31)

新しい世界、日本をつくる気概に燃えた奈良時代や、夏目漱石を例に明治文学初期の「ますらおぶり」の一時期があった。しかし、その時期を過ぎると、余裕を取り戻し、前述の平安時代や正岡子規の「たおやめぶり」への回帰があることで、二人の見解は一致する。

両者は、「仏教の日本化」を合意した上で、空海について、司馬氏は特に論理的完成に、キーン氏は密教美術や国際性に注目した。親鸞や日蓮による日本化について、司馬氏は、釈迦の教えより、自分一個の安心が決定すればよいというところがある、とした。キーン氏はそのことを「文化的に特筆すべき事柄」とし、司馬氏はさらに「宗教や哲学、原理というより、美に昇華した」とする。

「金と銀の対比」においては、義満の「金」から義政の「銀」、安土桃山の「金」から江戸へ遷移するが、その過程の「応仁の乱」を、自然発生的な乱と見る。

キーン氏は、日本の美としてその安土桃山の粗末質素な陶器を示し、司馬氏は、加えて古田織部の金継ぎを特筆した。それは、中国・韓国、西洋には無い独自の文化(価値感)として注目したうえで、桂離宮の対比として日光東照宮を日本の美の特異として断じた。

司馬氏は、医学の山脇東洋らを引用して日本人の**合理主義**に注目し、その理由は不明で不思議とする。政治も同様で、完全に儒教ではなく現実的な体制をとった。つまり世界の大半の民族における、宗教・絶対原理による社会や国民教育・**統治(飼いならし)**のかたちは日本にはない、とする。

生活における神仏儒について、キーン氏は仏儒の影響を強調するが、司馬氏は御所への僧侶不入を例示し、**清浄としての神道**が基礎にあると応える。それら混淆・習合、便宜主義で合意を結ぶ。

後半は、特に仏教との関係に傾向する。釈迦の原始仏教、仏教の無常と日本人の天然の無常観、日本思想として最澄と空海を特に取り上げ、釈迦仏教の理解者として親鸞を評価する。天然自然の世界に軸足を置く空海の密教と、人間の自然に軸足を置く(親鸞の)自然法爾とは、一般に難解ながら、日本人の持つ「天然自然と人間自然」への同一観念として「現実」(実態)で共通させた。当方文化構造の頂点とした自然は空海の密教に、人間側の無常観念と合理主義及びその中庸は最澄の天台に相当する思想体系となる。自然は人間側の**自然調和**(平等)に直結する。

1984年『**微光のなかの宇宙**』の冒頭、『裸眼で』にて記者時代の美術担当時期での体験を振り返り、他人の理論や様式(既成概念や価値観)からの解放が小説執筆の契機となったと回想する。『密教の誕生と密教美術』では、原始仏教から話を始め、**釈迦への尊敬**を現す。(教義についての詳細はないが、死との無関係を指摘)一方、密教美術には、尊敬とは別に魅力を評価する。原始仏教と日本仏教の異質性はともかく、特に今日のある種の僧の有様には批判的である。

大乘仏教では、如来とは衆生に説きつづける人格で、その内容が「法」である。如来を彫刻にするよりも「**法**」の内容こそが仏教である。**親鸞**はそのことに気づいた少ない仏教者として注目する。

一方、密教は、釈迦の原始仏教でも、ガンダーラの仏像をもつ仏教でも、大乘仏教でもなく別体系の仏教であり、仏画、仏像および密具なしにはその思想体系を示すことができない。密教の教主は、釈迦ではなく大日如来である。密教の成立事情に起因し、**現世利益、地上に留まり慈悲を行う菩薩**が装飾され、この世のすべて、現実が肯定され哲学的に昇華させ、大楽という絶対清浄の世界にいたらせる。司馬氏は、ここで現実を「**自然法爾**」とだぶらせている。また、密教の三密(身・口・意)について、以下のように解説する。宇宙の普遍的な原理・法則にも三密がある。天地に三密があり、人間のそれと交流しうる。密教の密とは天地の内奥のことで、そこから三密(動き・語り・思うこと)が出てくる。

司馬氏は、日本で、思想における体系化の課題に気づいた人物として、**最澄と空海**を評価する。前述の密教に比し、最澄の顕教は、地上の人々に理解されうる体系を標榜し後進にゆだねた。空海は密教体系を完成させた。その密教と関連し、特に日本で信仰された仏を、山岳信仰と関連した**不動明王**と、すでに『日本書紀』天武天皇期に初出する**観音菩薩**とする。日本密教は、宗教の本質的要素である「聖」を表現し、世界的にも卓越した美術とする。

1995年、司馬氏の晩年となる『**日本とは何かということ 宗教・歴史・文明**』は、山折哲雄氏との対談を主に構成されている。「宗教と日本人」では、当時の震災・事件にふれ「無神論」を導入とする。山折氏は、「神も仏もあるものか」といった宗教無関心の傾向を指摘し、司馬氏は、その風潮を認めつつ、仏教そのものの(高度な)無神論と区別した。宗教の受容について、司馬氏は、仏教は公伝以降、**統治**(飼いならし)の役割はなく、薬効や芸術として受け止めた。それは、明治のプロテスタンティズムでも同様とし、そこでいう「絶対」「絶対者」は、我が国では受容しがたい概念とする。山折氏は、自然の中に神や仏も宿っているという考え方、多神教的な汎神論、一神論に対する無神論的伝統の例外として親鸞の阿弥陀如来をあげる。しかし司馬氏は、**仏教の「空」**を日本にもそなわる「**相対総和**」と定義し、阿弥陀如来などの仏教本尊は、その「空」の意味(表現)で、前述の「法」の一方便として解釈する。**念仏によって、是非善悪を超えた絶対の真理に到達するという自然法爾**を説く教えである「絶対不二の道」の「絶対」は、西洋の絶対とは違い、浄土信仰を強調した**教義の意味(方便)**とする。一方、山折氏は、インドの概念的な浄土は日本では先祖が宿ると信じられた**山**と習合し自然との協調・共生」の感覚が多神教的傾向を誘引したとみる。

「日本人の死生観」について、山折氏は寺田虎彦を引用する。西ヨーロッパの自然の安定と対極する不安定が、日本人の自然に対する「**天然の無常**」感覚を育んだ。その感覚は、吉田松陰の死に対する淡泊な精神、無私の精神、無心、初心、「純粋な状態」と通ずる、とする。司馬氏もよく同感し山折氏は縄文以来の「天然の無常」が仏教の無常と一致したと自然感覚と宗教観を強調した。「宗教と民族」について、二人は、紛争の背景にある前述の「絶対」への宗教心を指摘した。これからの課題として山折氏は、日本の宗教伝統を国際社会に生かすこと、司馬氏は、それが世界に調和をもたらすことを期待した。そのためには、自分自身を説明する言葉(**論理**)が必要であると結ぶ。

1998年、幻冬舎から五木寛之先生の『大河の一滴』が出版されて、2018年で20年となる。司馬遼太郎先生が他界されたのは1996年だが、その時代の五木先生の所感を『大河の一滴』から伺いたい。そして、その流れで出版された、日本人、日本文化へのご見識、提言を、2001年～2002年『日本人のころ』から確認する。

1998年『大河の一滴』  
「大河の一滴」とは、人の存在、人生を意味する。小さな一滴の水の粒にすぎないが、大きな水の流れをかたちづくる一滴であり、永遠の時間に向かって動いているリズムの一部なのだ、という意味である。(P31)  
これは、日本に限った話ではない。しかし、そのあと日本的な信仰、心情、仏教として、親鸞の阿弥陀信仰で例える。その信仰は一般でいわれる一神教的信仰ではないとする。「諸仏のなかから阿弥陀如来を選んで、その仏ひと筋に帰依するという信仰」とされる。「神や仏という目に見えぬ存在を容易に受け入れることはむずかしい。仏像や仏画は感情移入するためのシンボルであるが宗教の本質ではない。浄土という境地に至るため、浄土真宗では「南無阿弥陀仏」と「名号」を定めた。」(P35)  
そのあとの文脈は以下のように流れる。

「親鸞の仏とは、南無阿弥陀仏という観念であり・・・目に見えないもの、そして無限大のスケールをもつ世界・・・」(P35)  
「存在するのは大河であり、私たちはそこをくだっていく一滴の水のようなものだ。・・・親鸞の「自然法爾」・・・も、たぶんそのような感覚・・・」(P46)  
「本来、日本人の根っこには人情や日本の情緒といったウェットな世界があります。・・・」(P309)  
「人間の「情」とか「悲」・・・人間の真の知性を育てる土壌として感情、情念というものを豊かに育てることこそが、いまの私たちにとって大きな課題」(P310)

以上『大河の一滴』の中の日本的情緒「情」について、その後、以下の著書で詳述された。  
2001年-2002年『日本人のころ』全6巻、2002年『情の力 日本人のころ抄』講談社

現代社会における、「情の力」の復活・再生提唱が、本著の要点である。以下、五木先生の提言この「情」というものを一言で表すならば、それは「ころ」であり、そして、「情」とは“人間の湿り気”のようなものである。いろいろなものが『湿式』から『乾式』へ、ウェットからドライへと転換してきたのが、戦後の歴史である。最近の事件にある「いのち」が軽い、ということは「ころの乾き」に由来している。「乾いたものは軽い。湿度をおびたものは重さがある」これが(仏教のころ)で、昨今の「ころの砂漠化」を憂い、この「湿度」の大切さを説き、「湿り気を帯びた人間のころ」の回復(仏教のころ)を願う。

### 僭越ながら 当方所見

つまり、『大河の一滴』の中で著された 日本的情緒<情>「情の力」や「悲」は、本来、日本にはある。それは、日本が仏教という形で受容し(でき)、鮮明化した無常、そして慈悲や平等の心情である。

日本人が受容し、定着した理由は、古代からの「自然、動植物との一体感」「自然の中の平等意識」や、タマ、鎮魂という無常に通じる「循環・継承的な心情」があったからである。日本文化の理解には、この関係性が重要で、鎮魂に通ずる仏教儀式「放生会」、供養が、速やかに受容されたことがその証である。仏教の弘通に伴い、殺生禁断と放生の思想が普及し、各地の**神社**仏閣で放生会が行われるようになった。放生会は、養老四年(720)、大隅・日向の乱逆平定後、**宇佐大神**の託宣による放生(『扶桑略記』六)が、諸国放生会の始まりとされるが、それら神仏が習合したあり様が、その関係を証左する。

仏教公伝の年については諸説あるが、欽明天皇13年(552年)と『日本書紀』は伝える。 仏教の不殺生戒により魚鳥などを山野池沼に放ち供養する仏会として「放生の儀式」がある。その儀式について『聖徳太子伝暦』は、欽明天皇第二子の敏達天皇7年(578)に六斎日に**殺生禁断**を畿内に令したり、推古天皇19年(611)に聖徳太子が天皇の**遊獵を諫した**と伝える。天武天皇5年(677)、諸国へ詔を下し**放生**を行わしたと日本書紀に記される。『続日本紀』天平勝宝3年(751)、聖武天皇の時代には、さらに**放生**により病を免れ寿命を延ばすとの意義が明確にされた。

親鸞が、方便・象徴として「阿弥陀仏」を無限大の慈悲とし悪人往生を説いたのは、無常の時代に沿った、日本的な「自然」と平等な「情」の表現である。司馬遼太郎先生も『日本とは何かということ 宗教・歴史・文明』で指摘されたように、もちろん、一神教的信仰などではない。法然が1198年(建久9)には九条兼実の請いにより主著『選択本願念仏集』で『観無量寿経』を選択したように、その時代の救済にとって、何が適しているかを親鸞は選択したわけである。

当時、衆生救済に際し、『仏説無量寿経』において念仏往生の願とされる**第十八**、「唯除**五逆** 誹謗正法」の課題があった。(五逆とは、父を殺す・母を殺す・阿羅漢「尊敬されるべき修行者」を殺す・仏身より血を出だす・和合僧「仏法を聞くために集まった仲間」を破るの五つの逆、罪のこと)、つまり、特に悪人(特に親殺し)は救済されないのか? という疑問である。

**法然**は「観無量寿経」を根拠にその回答を『選択本願念仏集』で説いた。さらに徹底した**親鸞**は、「無量寿経」の十七願などから口称念仏を、「涅槃経」からは懺悔による救済を、そして天親の「無量寿経優婆提舍願生偈」(浄土論・往生論)、曇鸞の「浄土論註」を根拠に、「往還廻向」つまり往生者によるこの世での救済を見だし「教行信証」で提示した。その決意は自身の名を道綽・源空(法然)由来の「綽空」から、天親・曇鸞由来の「親鸞」に変えた。【別途詳述】

親鸞の消息『末燈鈔』の「自然法爾の事」にある、「**自然法爾**(じねんほうに)」の自然とは、人間自身に関しても万物に対しても、(人為の加わらない、おのずからある状態)を意味し、今日の「自然」が意味するように森羅万象の対象的世界一般を指すものではなかった。人為的でなく、おのずからそうあることを意味する。(同じ自然の文字をあてた日本人【別途詳述】)

親鸞がいう「**阿弥陀仏**」は、五木先生がいうように「目に見えないもの、無限大のスケール」としての、本論「日本文化の構造」の頂点たる「自然のちから 見えないチカラ」である。  
「**無上仏**と申すは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆゑに、**自然**とは申すなり。」

日本人には、「自然のちから 見えないチカラ」のもとで、自然時間の中の人間、さらに自然環境の中の人間として感じる 古代からの**潜在意識**がある。  
いわば、「大河の中の人間」として感じるころであろう。

五木先生が、復活再生を願う「情」もまた、本来的に日本人にある。なぜなら、本論「日本文化の構造」が示す、日本人の海上・山上、死後の他界感を基層として、古来から持つ、タマ、鎮魂は、「循環・継承的な心情」であり、まさに世代を繋ぐ情緒的な「情」である。「はかなし」や「無常」に通じる「情」である。これもまた、この時代に至り、**潜在**しつつある意識といえる。今、タマシヒを振起するタマフリ、**まことの鎮魂**が必要である。

本論は、それら潜在意識を浮彫にするため、その日本文化、心情を、あえて構造的にとらえようとしている。構造として捉えることで、以上に述べた因果関係が分かる。そして、時代の傾向や課題を、より鮮明にとらえることができる。

五木先生は『情の力 日本人のころ抄』で、**日本文化**の持つ「自然への畏敬としてのアニミズムと、八百万の神々といったシンクレティズム」が、21世紀の世界に貢献できるという。そのためには、日本人が持つ「情」「悲」に通じる潜在意識を覚醒させ、明確に自覚することが、急がれる。その意味を込めた、本著名称『自然の構造 日本のころ』である。

2018年には『大河の一滴』、2021年には『日本人のころ』が出版され、20年を迎える。

この20年、なにがどう変わったか? なにも変わっていないのか? 良い方向にむかっているのか? いやその逆か? はたして「情」と「悲」のゆくえは?

このさきの、20年、そして、その先の未来のために、共にみんなで考えよう

上田正昭先生(1927~2016)の日本人、日本文化への考えをまとめた。著書『日本神話』『日本人のこころ』『神と仏の古代史』など拝読したが、東日本大震災後、晩年の著作となる、2012年『死をみつめて生きる 日本人の自然観と死生観』を、主にしたい。

「はじめの章」で、寺田寅彦の論文『日本人の自然観』を引用され、日本は本来学んできた「**自然との調和**」を忘却し、戦後欧米型の学問が科学の進歩に寄与するという錯覚に陥っていると警鈴を鳴らされる。それはまた、自然環境、文化遺産、生物全般に被害を及ぼした、20世紀の民族や宗教と政治的対立による大戦・紛争と同様に、「**いのちの尊厳**」への危機として捉える。「**人権問題**」と「**環境問題**」は不可分の関係として提起される。季刊雑誌『日本のなかの朝鮮文化』の顧問として、約30年交流のあった**司馬遼太郎**氏の『二十一世紀に生きる君たちへ』(初出1989年)を引用されたうえで、以下、啓蒙される。「自然をおそれず、その力をあがめず、人間こそがいちばんえらい存在だとうぬぼれてきた現代人が、いかに古代や中世の歴史のなかの人間と異なっているかを見事に指摘している言葉である。人間はひとりでは生きられない。自然と調和し、**自然をあがめて共に生きて共に生みだす知恵と体験**を蓄積し発展してきた日本人のくらしのありようや日本の本来の学問のありようを、いま一度想起すべきではないか」そして原発問題に触れ「自然と調和し自然の力を活用したあらたなエネルギーの発見が不可欠」と、結論される。「あとがき」では、最後に『古事記』の「国生み神話」の「共生」(とも生み)を示し、ご本人の宮中歌会、勅題「草」にそった歌、「山川も草木も人も 共生のいのち輝け新しき世に」を記される。**自然との調和、自然と共に歴史を生みだすありがたさ、外国の人々と共に文化を創りだす「とも生み」、日本人が古代以降持ちつづけてきた死生観であるいのちの尊厳への再認識を叫ばれる。**

上記に、まず冒頭として、「起・結」を、詳細にまとめたのにはそれなりの理由がある。その国の歴史や文化の認識は、過去の理解だけではなく、未来のための指針であるべきだからである。なぜなら、その基層にあるものは、これまでその国の人々が形成してきた根源的なところのかたちであり、その集大が今日まで国家を存続させてきたからである。日本文化に対する上田先生の長年の研究を基にした認識が、これらの言葉、提言の根拠であり成果でもある。

第一章「自然との調和」**鎮守の森**、沖縄のウタキ(御嶽)の森は、神霊の宿る常緑樹である神籬・聖なる**神体木**、聖なる岩や石や**磐座**・聖なるストーンサークルの磐境・**神奈備**(神体山)などにあって、そのいいしえは**縄文時代**にさかのぼる。神籬・磐境は『古事記』『日本書紀』に描かれ、神木信仰は具体化して神柱・御柱となるが、その源流は縄文の三内丸山遺跡などの木柱、木柱列にある。諏訪大社の御柱祭は一本の神体木を起源とし、磐座を山頂・中腹に拝する上社本宮は磐座(硯石)と斎庭を四囲、四本の御柱で聖域とする。伊勢神宮の心の御柱を内包する(神明造り)、出雲大社の九本の柱による大社造りも**神柱信仰**である。奈良の大神神社は、三輪山をカミが降臨し鎮まる神奈備(神体山)とし人々が守ってきた。**モリ**は本来は自然の樹木を意味し、『万葉集』では神社・社がモリと訓(よ)まれた。**ヤシロ**はマツリの建物がある場所が原義で、出雲の神庭サイダニ遺跡の神庭とも呼ばれた。神社建築の起源は、出雲などの田の字形建物を参考に祭事と政事の未分化の段階を考慮すべきである。それら以外に沖縄の御嶽は**海上世界**のニライカナイからカミを迎える海辺や岬のウタキも多い。**社叢**は神社以外に寺院にもあり、その神仏習合のおもむきは、『日本書紀』欽明天皇期の「仏」を「蕃神」として、敏達天皇期の「仏神」は、「仏」が海外からの“まれびと”としてうけとめられたことを示し神宮寺や神前読経で具体化した。「**神も仏も**」のシンクレティズム(**重層信仰**)を伴い農耕神・土地神を示す「社」は祭祀する建物、人々の団結の絆を固める場に、社叢は土地の神のモリ、聖なるコミュニティのモリ、そのセンターになった。

第二章「鎮守の森と南方熊楠」鎮守の森は**カミとヒトとの接点**であり、**自然と人間の共生**の場であった。南北朝のころ、惣村・惣郷の結合の場、祭祀団体として宮座・宮ノ党が結成、神前で村々の掟をつくり、「一味神水」「一味同心」の盟約し、そのマツリには芸能が奉納され、娯楽を共にする自治と寄合の場となった。明治政府の神道国教化政策により官社・民社の差が明確になり、明治34年(1901)勅令を受け、全国各地で府県知事の判断によって神社の統廃合が進行、明治41年(1908)和歌山県稲成村の合祀問題から**南方熊楠**氏による反対運動が開始。大正7年(1918)衆議院で「神社合併無益」決議の最大の功労者となる。冒頭提起と関連し、現代の合理主義・便利主義・エゴイズムの風潮による、鎮守の森に対する「**オソレ**」「**ツツシミ**」の希薄化を危惧する。

第三章「死をみつめて生きる」(現代は、生ばかりが強調され、**死の尊厳**が忘却の彼方にある。その意識の希薄化は、結果として、生の希薄化にもつながる、との主旨で書かれている)「**タマ**」が衰微した状態が「**タマシヒ**」である。「鎮魂」「招魂」、「**ミタマフリ**」(**カミマツリ**)の**本番**)によって生者のタマは生命力を充実する。よみがえり引きつがれ、タマは再生する。『古事記』『日本書紀』の神々は、「別天神」を主に**隠り身**として死なない永遠の神と、イザナミのように日本人の**カミ**観念の特徴を示す死ぬ神がある。カミの原義はその「**隠身**」(カクリミ)が妥当である。またイザナキ、イザナミは「神」から「命」に神名が推移するが、神の人間化、天つ神の御言の伝達者となる。ニニギノミコトでは、天皇も人間であり死ぬ起源が記される。産まれる場所と種に朝鮮語対応説がある食物神の再生神話と関連し、特に『日本書紀』のアマテラスは、支配者層の**水稻文化**を象徴し、「稲・カイク(蠶)から糸、神衣を織る」が記され、そこに道教最高の仙女で織女神の西王母の影響がある。天武・持統天皇期には、宮廷に七夕行事があり、日神信仰に織女神信仰が重層していた。

第四章「鎮魂の伝統」死者の場合、**鎮魂**されないタマシヒはさまよい、日本人の信じてきた世界に居ることのできない未完の霊魂となる。宮廷における鎮魂の確実な初見は病に際す天武天皇14年(685)である。石上神宮の鎮魂祭はミタマフリとしての鎮魂の伝統を長く保有してきた。平安時代初期の『先代旧事本記』は、物部系の鎮魂と宮廷鎮魂祭とのつながりを強調する。その秘儀に係る「瑞宝十種」は、『古事記』の天之日矛(天日槍)の「将来物」と近似する。カミの来臨をあおいでカミマツリする非日常の時間と空間が「**ハレ**(晴)」、俗なる日常のそれが「**ケ**(褻)」である。「**ケガレ**(褻枯れ)」の状態になれば聖なるカミをマツリ、カミのミタマとタマフル(魂触る)し、タマフユ(魂殖ゆ)することによって生命力を振起し**タマフリ**につながる。死者のマツリについて、「**祖神**」は、血縁神よりも、霊威神や職業神などが有勢な氏族の司祭権の継承・独占により神裔と意識された。そして、**日神大日靈貴**(おおひるめのむち)は、のちに皇祖神としての天照大神に昇華した。大物主神など**崇る神**への意識があるが、そのまま怨霊神になったのではない。**怨霊信仰**は非業や悲運の死霊を対象として奈良時代に起源し、平安時代の**御霊会**となるが、為政者はタマシズメを重点とし、民衆は崇る威力に幸を祈願したミタマフリを重点とした。

第五章「日本人の他界観」仏教以前の日本人の他界観に**折口信夫**先生の考究がある。折口は四天王寺西門の体験と同寺の日想観往生の風習、さらに沖縄探訪の産物“まれびと論”を前提に、京都禅林寺本の「山越し阿弥陀図」に日本固有な信仰(日想観)を提起した。しかし静遍上人の真言念仏の信仰による来迎図作とする説では日輪ではなく月輪とみなされ、山の向こうの海に注目したい。山水そのものを浄土として表現し、**海上世界**に**山上世界**が優位しつつ重層する。「海の**水平世界**」も「天あるいは地下の**垂直世界**」も、『古事記』の少名毘古那神や瓊瓊杵尊などに見え、また媒介する「船」「鳥」がある。死後の天上他界観は『万葉集』にもあり、天から山に神々が降臨する伝承を生み、殯をすませ、一定期間後、タマシヒは充足され祖霊となって山・天に鎮まると考えられた。それは精霊迎え・送りに残り、浄土信仰の広がりにより、山の彼方に浄土を求める信仰が具体化した。

第六章「万有生命信仰」『日本書紀』神武天皇即位前紀に、タカミムスヒノミコトが道臣命に命じて斎王(祭主)としてマツリをなしたところ、土・火・水・食物・山・野・木・草がすべてカミとして現れる。それはあらゆるものに生命をみだしあらゆるものにカミが宿るとする万有生命信仰の反映である。『万葉集』の柿本人麻呂の反歌や、最澄が強調した『涅槃経』の「**一切衆生悉有仏性**」は日本人の万有生命信仰では「**山川草木悉有神性**」であった。そこから顕在した言霊の信仰も『古事記』雄略天皇期の葛城一言主神社に明白である。万有生命信仰は夢窓疎石の後醍醐天皇の鎮魂、安国寺・利生塔建立提言といった**怨親平等の思想**へみちびく。その日本の宗教はアニミズムとよばれる汎神教で、時に神への感謝を奏上する「祈年祭」の祝詞がある。そこに国家的宗教戦争はなく**世界宗教**のめざすべき方向を示唆する。『日本書紀』などの「神道」用例はいずれも特定の教義によって体系化された宗教的認識ではなく、津田左右吉博士のいう「古くから伝えられてきた民族的風習としての宗教」もしくは「神の権威、力、はたらき、しわざ、神そのものなど」である。「神道」は「仏法」の受容によって、「対句」としてそれ以前からの神や神のはたらき、あるいはマツリのしきたりを表現した。神道の世界も、中国や朝鮮の古典に語があり、**東アジア**の動向に連動して成立した。**万有生命信仰**は日本文化の基層として民族神道に息づく。「生者」同志や「死者」との「絆」を忘れず、災害復興や文化伝統のために、タマシヒを振起するタマフリ、**まことの鎮魂**が必要である。

著書 『自然の構造 日本文化のこころ』  
プロモーション 活用提案 編集案 要旨

詳しくは、日本文化構造学 研究会サイトを 御覧ください。



イメージ画像

「日本文化構造学」で 検索

一般公開用 <https://nakamuranina.jimdo.com/>

自然（じねん）なる日本とは？

本論の、最後の部分は、我が国、歴史文化の 検証、根拠 に基づいた、  
「経営方針」「政策」「原発」「人口構成」「国債」問題 への 提起 です。

関連書籍 予定



イメージ画像



政次郎文庫

# 日本文化「自然の構造」

Foundation of Kyoto culture  
Principle & Origin of Japanese culture

( 抜粋版 本編 日英文 約400ページ )

平成27年 1月24日 初版発行  
平成28年 1月24日 2版 発行  
平成29年 1月24日 3版 発行 随時 追論中

著者 中村正司  
発行者 中村政次郎  
発行所・発行元 日本文化構造学研究所 史跡 政次郎文庫  
京都市下京区紅葉町  
電話 090-6056-3295  
<http://nakamuranina.jimdo.com/>

大阪支店 営業

装幀者 中村二ナ

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。  
落丁・乱丁、内容の問合せ・ご意見などは、上記発行元まで  
ご連絡下さいませ。



日本文化構造学 研究会主宰  
日本学・京都教授研究「知慮の会」  
京都新聞出版 京都検定 解説・校閲  
京都府商工会議所 京都検定協力事業者



© Masashi NAKAMURA 2015 Printed in Japan